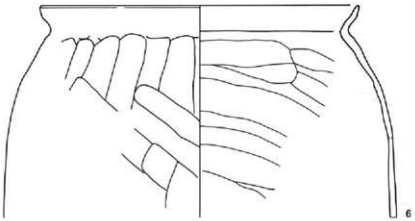
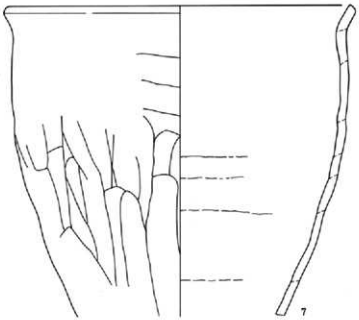
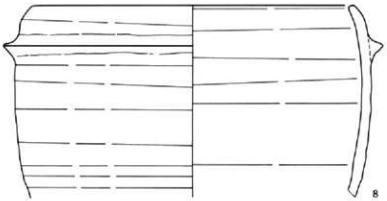






第364図　105号住居出土遺物図（2）

106号住居

本住居は、調査区の北より、86区E・F―14グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、86号住居・116号住居と重複する。新旧関係は、86号住居より前出で116号住居より後出である。

形態は、不整形を呈する。残存状態は、重複する86号住居によって東辺際の南半を欠き、残存部分で

は確認面から床面まで残存高が低いためあまり良好な状態ではない。

規模は、長軸3.32m、短軸3.10m、北辺2.40m、西辺2.60m、東辺、南辺は残存していろところで0.56m、2.28mを測る。床面積は、残存部分で7.57㎡である。主軸方位は、N－90°－Eを指す。壁高は、北壁20.2～22.0cm、東壁12.0～19.7cm、南壁11.7～17.0cm、西壁14.5～28.5cm、平均18.2cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

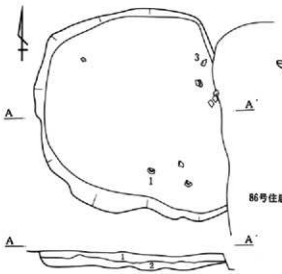
カマドは、東辺の中ほどよりやや北側に構築されていたようであるが重複する86号住居によって欠き、僅かに焼土、粘土ブロックなどが残存する程度である。

掘り方は、確認できなかった。

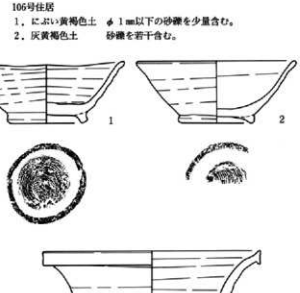
埋没状態は、一応レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など75点が出土している。出土状態は、ほとんどが床面より上位の埋没土中からの出土である。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀前半に比定される。



第365図　106号住居平面・断面図



第366図　106号住居出土遺物図

107号住居

本住居は、調査区の北より、86区D・E－14・15グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、55号住居・86号住居・116号住居と重複する。新旧関係は、55号住居・86号住居より前出で116号住居より後出である。

形態は、ほぼ長方形を呈すると想定される。残存状態は、重複する55号住居・86号住居によって大半を欠き、残存部分は僅かである。

規模は、長軸残存するところでは3.08m、短軸2.90m、北辺2.97mを測る。床面積は、推定8.24㎡である。主軸方位は、N－89°－Eを指す。壁高は、北壁5.5～21.5cmで平均13.0cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも存在しない。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

カマドは、東辺の中ほどよりやや南に構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖が流失している。規模は、全長58.5cm、幅90.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に42.0cm延びる。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、土層観察断面では1層しか確認でき

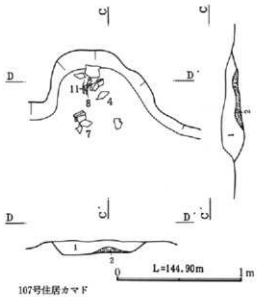
なかったため判断できない。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など204点が出土している。出土状態は、4、7の灰釉陶器椀、土師器鉢がカマド、1、8、11の土師器杯・甕、須恵器羽釜が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第2四半期に比定される。

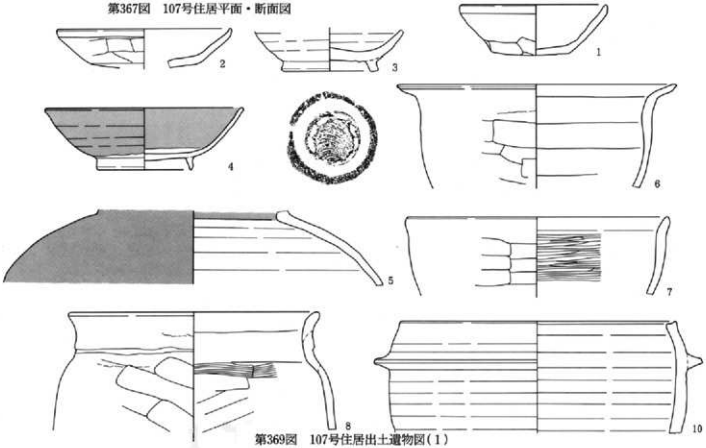
107号住居
1．灰黄褐色土　φ0.5～10mmの砂礫を少量含む。

第367図　107号住居平面・断面図

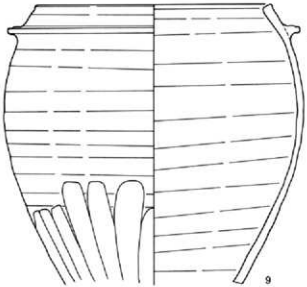


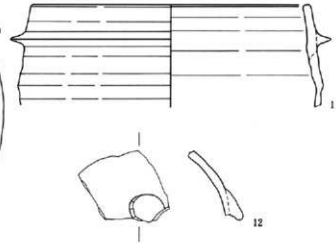
107号住居カマド
1．灰黄褐色土　炭化物、焼土を多量に含む。
2．黒褐色土　灰、炭化物を含む。

第368図　107号住居カマド図



第369図　107号住居出土遺物図(1)





第370図　107号住居出土遺物図（２）

108号住居

本住居は、調査区の北東部、86区Ｂ－18･19グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、120号住居・121号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが後出である。

形態は、長方形を呈すると想定される。残存状態は、北側が調査区外にのびるため全体の３分の２程度しか調査できなかった。

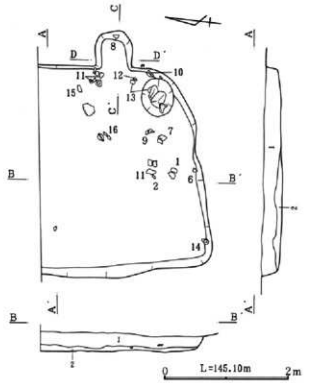
規模は、長軸3.32m＋α、短軸2.70m、南辺2.92m、東辺、西辺は残存するところで2.12m、2.70mを測る。床面積は、残存範囲で7.42m²である。主軸方位は、N－83°－Eを指す。壁高は、東壁12.0～17.0cm、南壁12.3～16.5cm、西壁26.0～28.5cm、平均18.7cmである。

内部施設は、貯蔵穴を検出したが、柱穴、周溝は確認されなかった。貯蔵穴は、東南角に位置し、形態は楕円形を呈す。規模は径58.0×50.6cm、深度9.0cmである。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

カマドは、東辺の南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖が流失している。規模は、全長64.5cm、幅57.0cm、燃焼部幅45.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に55.5cm延びる。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、土層観察断面ではほとんどが１層しかであるため判断が難しいが自然埋没であると考えられる。

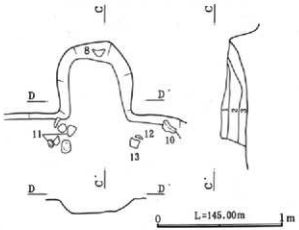


108号住居
1．黒褐色土　φ0.5～２mmの砂礫を多く含む。
2．灰黄褐色土　φ１～３mmの砂礫を少量含む。

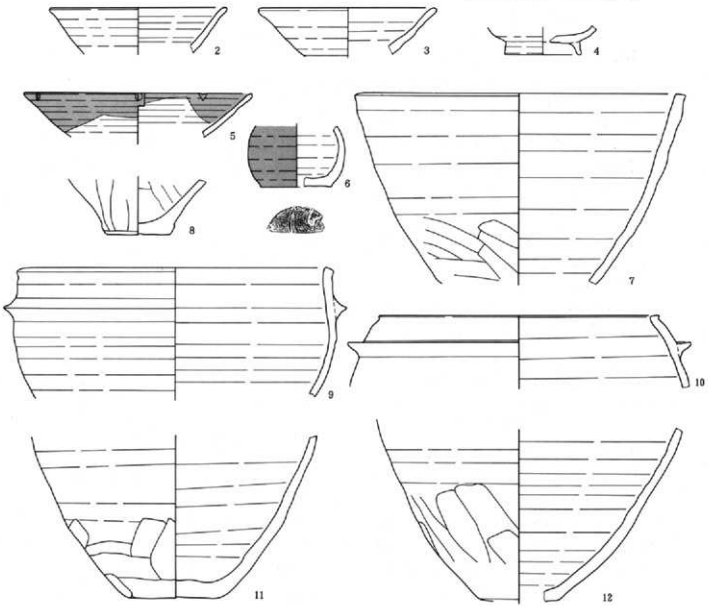
第371図　108号住居平面・断面図

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器、石製品など35点が出土している。出土状態は、９の土師器甕がカマド、２、10、11の須恵器椀・羽釜が床面、13の須恵器甕が貯蔵穴から出土している。

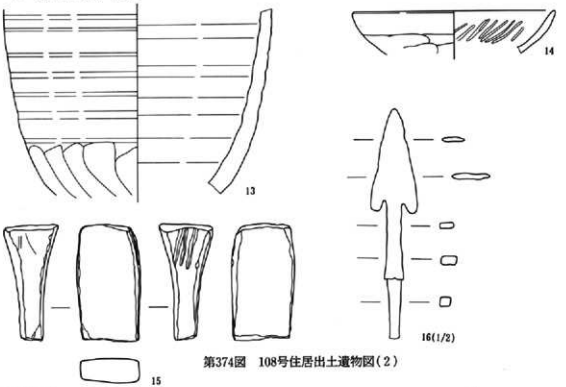
本住居の時期は、出土遺物より10世紀第３四半期に比定される。



第372図　108号住居カマド図



第373図　108号住居出土遺物図(1)



第374図　108号住居出土遺物図(2)

109号住居

本住居は、調査区の北東部、86区C・D－18グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、120号住居と重複し、95号住居と接する。新旧関係は、120号住居より後出である。

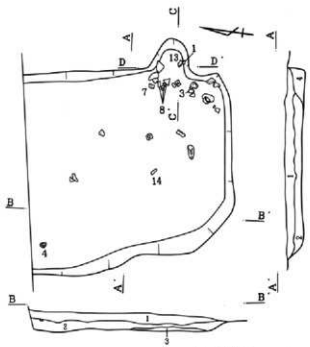
形態は、ほぼ長方形を呈すると想定される。残存状態は、北側が調査区外にのびるため全体の3分の2程度しか調査できなかった。

規模は、長軸3.20m＋α、短軸3.16m、南辺2.72m、東辺、西辺は残存することで3.24m、3.28mを測る。床面積は、残存範囲で8.11m²である。主軸方位は、N－82.5°－Eを指す。壁高は、東壁28.0～31.7cm、南壁10.5～17.3cm、西壁7.0～15.8cm、平均18.4cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山と重複する120号住居埋没土をそのまま踏み固めている。

カマドは、東辺の南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖が流失している。規模は、全長57.0cm、幅79.5cm、燃焼部幅54.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に49.5cm延びる。

掘り方は、確認できなかった。



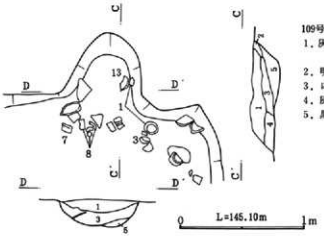
109号住居
1．黒褐色土　φ0.5～10mmの砂礫を多く含む。
2．黒褐色土　φ 1mm以下の砂粒を少量含む。
3．にぶい黄褐色土　φ 5～10mmの砂礫を若干含む。
4．暗褐色土　1～5mmのFPとφ 5mmの円礫を少量含む。

第375図　109号住居平面・断面図

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

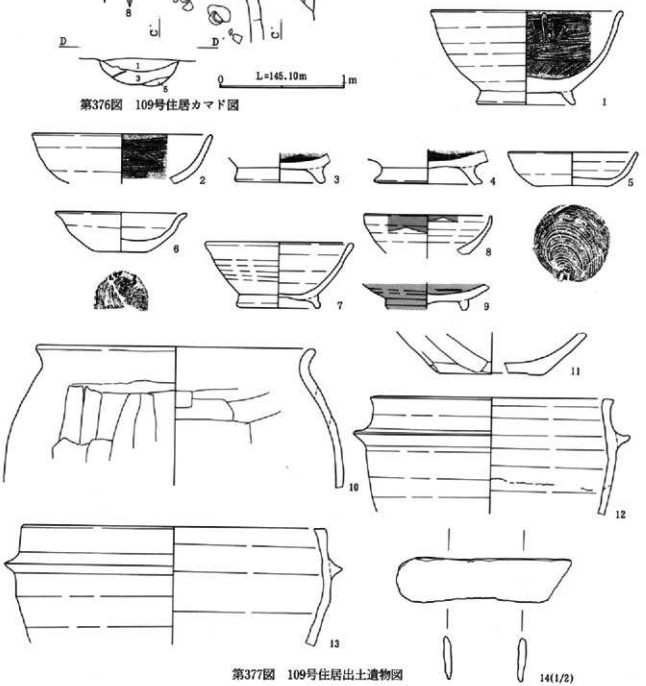
遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など457点が出土している。出土状態は、カマドとその周辺にまとまりがみられ、1、7、8、13の黒色土器椀、須恵器椀・羽釜、灰釉陶器椀がカマドから出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第4四半期から11世紀初頭に比定される。



第376図　109号住居カマド図

109号住居カマド
1．灰黄褐色土　φ0.5～20mmの砂礫を少量、φ1mm以下の黄褐色粒子を少量含む。
2．明赤褐色土　焼土塊を多く含む。
3．にぶい赤褐色土　焼土を多量に含む。
4．灰褐色土　φ1mm以下の砂粒を少量、焼土粒、炭化物を多く含む。
5．黒褐色土　炭化物を多く含む。



第377図　109号住居出土遺物図

110号住居

本住居は、調査区の中央部、86区F・G－12・13グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、94号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが前出である。

形態は、隅丸長方形を呈する。残存状態は、重複する94号住居によって北西部を欠く。

規模は、長軸3.06m、短軸2.68m、東辺2.68m、南辺2.40m、北辺、西辺は残存するところで1.00m、0.68mを測る。床面積は、推定6.60m²である。主軸方位は、N－84°－Eを指す。壁高は、北壁25.5～27.0cm、東壁26.0cm、南壁21.0～23.0cm、西壁23.0～24.6cm、平均25.6cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも存在していない。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

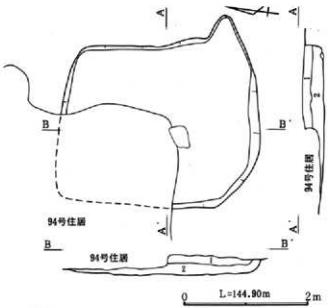
カマドは、東辺の東南角よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖が流失している。規模は、全長45.0cm、幅55.0cm、カマド自体は壁外に延びる。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

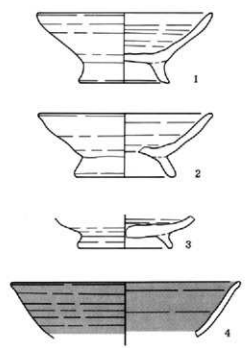
遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など112点が出土している。出土状態は、みな床面より上位の埋没土中から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第３四半期に比定される。



110号住居
1．にぶい黄橙色土　φ１～10mmの砂礫を多く含む。
2．にぶい黄褐色土　φ１～20mmの砂礫、小礫をさらに多く含む。

第378図　110号住居平面・断面図



第379図　110号住居出土遺物図

111号住居

本住居は、調査区の北西部、86区M・N－13・14グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、98号住居・117号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが前出である。

形態は、ほぼ長方形を呈する。残存状態は、重複する98号住居・117号住居によって北西部を欠き、残存部分も確認面から床面までの残存高が低いためあまり良好な状態ではない。

規模は、長軸4.60m、短軸3.34m、東辺4.55m、南辺3.20m、北辺、西辺は残存するところで1.62m、2.48mを測る。床面積は、推定13.50m²である。主軸方位は、N－98°－Eを指す。壁高は、北壁11.5～12.

5cm、東壁10.9～12.0cm、南壁19.5～20.4cm、平均14.5cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

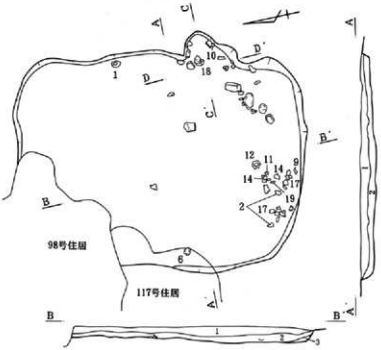
カマドは、東辺の南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖が流失している。袖には礫が補強に使用されていたのか燃焼部内に転倒した状態で検出された。規模は、全長52.5cm、幅88.5cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に33.0cm延びる。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器など440点が出土している。出土状態は、南西部に集中した箇所が見られ2、9、12の土師器杯、須恵器椀が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第1四半期に比定される。



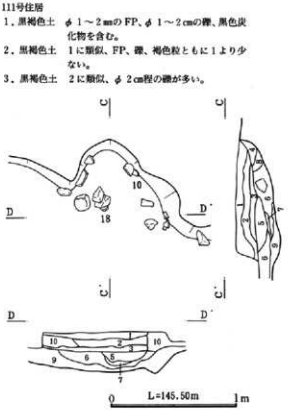
第380図　111号住居平面・断面図

111号住居

1．黒褐色土　φ1～2mmのFP、φ1～2cmの礫、黒色炭化物を含む。

2．黒褐色土　1に類似、FP、礫、褐色粒ともに1より少ない。

3．黒褐色土　2に類似、φ2cm程の礫が多い。



111号住居カマド

1．黒褐色土　φ1～10mmのFP、φ5mm前後の褐色粒を少量含む。

2．暗褐色土　1に類似。

3．暗褐色土　炭化物を多く含む。

4．黒褐色土　φ0.1～0.5cmのFPを少量、炭化物、焼土粒を多量に含む。

5．赤褐色土　焼土、φ0.1～0.5cmのFPを少量含む。

6．黒褐色土　炭化物、黒色灰を多量に含む。

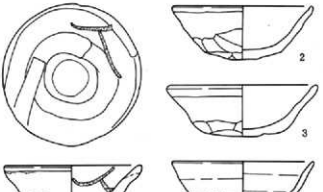
7．褐色土　FPを多量に含む。

8．暗褐色土　砂質土、炭化物を少量含む。

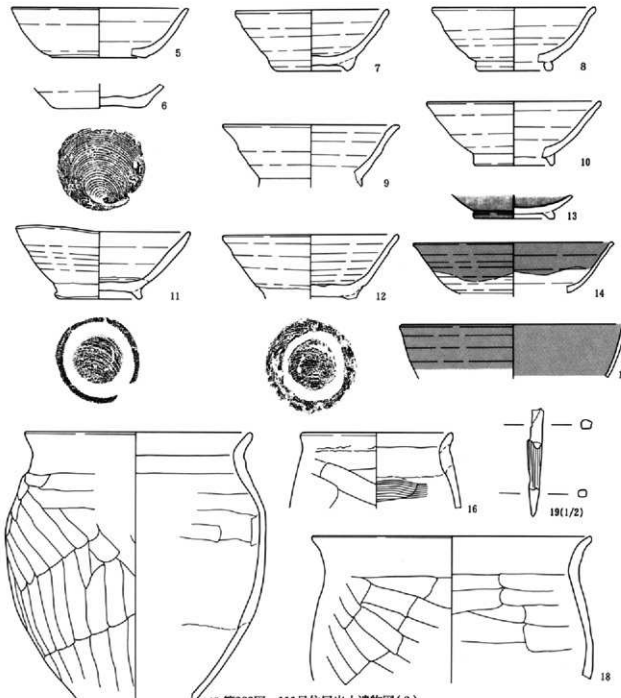
9．黒褐色土　黄褐色土粒を多量に、炭化物を少量、φ0.1～0.5cmのFPを少量含む。

10．暗褐色土　2に類似するが、φ1～2mmのFPを多量と炭化物を少量含む。

第381図　111号住居カマド図



第382図　111号住居出土遺物図(1)



17 第383図　111号住居出土遺物図(2)

112号住居

本住居は、調査区の北西部、86区O－13･14グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、99号住居の内側に一回り小規模な状態で重複する。新旧関係は、本住居のほうが前出である。

形態は、長方形を呈する。残存状態は、重複する99号住居によって確認面から床面までの上半を欠く。

規模は、長軸4.40m、短軸3.72m、北辺3.92m、東辺4.36m、南辺3.28m、西辺4.03mを測る。床面積は、15.04m²である。主軸方位は、N－110°－Eを指す。壁高は、北壁3.5～12.8cm、東壁3.3～3.5cm、南壁2.0～9.8cm、西壁0.5～4.0cm、平均5.2cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

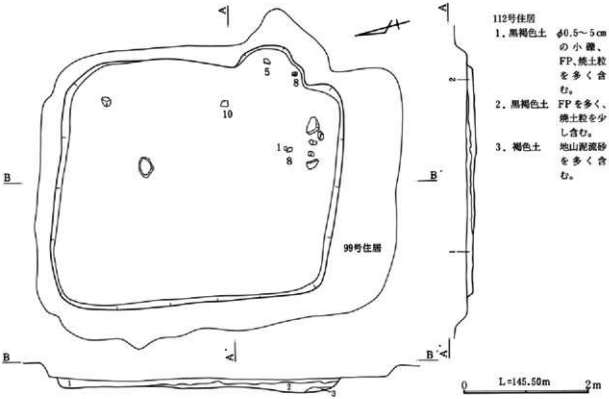
カマドは、東辺の南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖が流失している。規模は、全長48.0cm、幅115.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に延びる。

掘り方は、確認できなかった。

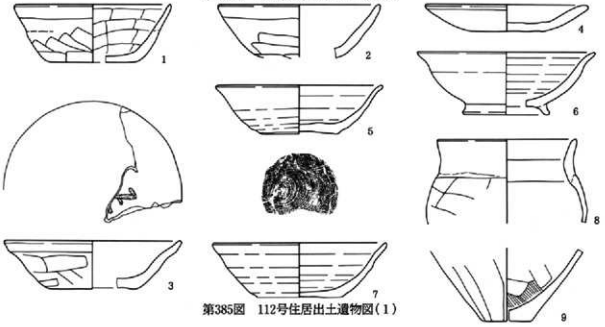
埋没状態は、一応レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など162点が出土している。出土状態は、5、8の須恵器椀、土師器甕がカマド、1の土師器杯が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第2～3四半期に比定される。



第384図　112号住居平面図・断面図



第385図　112号住居出土遺物図(1)

第386図　112号住居出土遺物図（２）

113号住居

本住居は、調査区の北西部隅、86区Ｐ・Ｑ－15グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、119号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが前出である。

形態は、ほぼ長方形を呈する。残存状態は、重複する119号住居によって北西部を欠き、残存部分も確認面から床面までの残存高が低いため良好な状態ではない。

規模は、長軸3.44m、短軸1.92m、東辺3.35m、南辺1.88m、北辺、西辺は残存するところで0.84m、2.75mを測る。床面積は、残存範囲で5.74m²である。主軸方位は、N－119°－Eを指す。壁高は、北壁2.0～7.0cm、東壁7.0～10.7cm、南壁4.0～7.0cm、西壁0.5～9.0cm、平均5.9cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

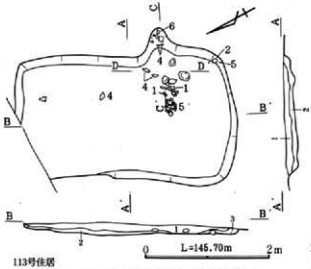
カマドは、東辺の中ほどよりやや南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖が流失している。規模は、全長52.5cm、幅67.5cm、燃焼部幅52.5cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に33.0cm延びる。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

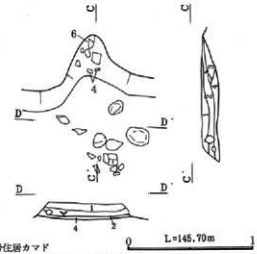
遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器など96点が出土している。出土状態は、カマドとその前部にまとまった出土がみられ、４、６の土師器甕がカマド、１、２、５の須恵器椀、灰釉陶器椀、土師器甕が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より９世紀第３四半期に比定される。



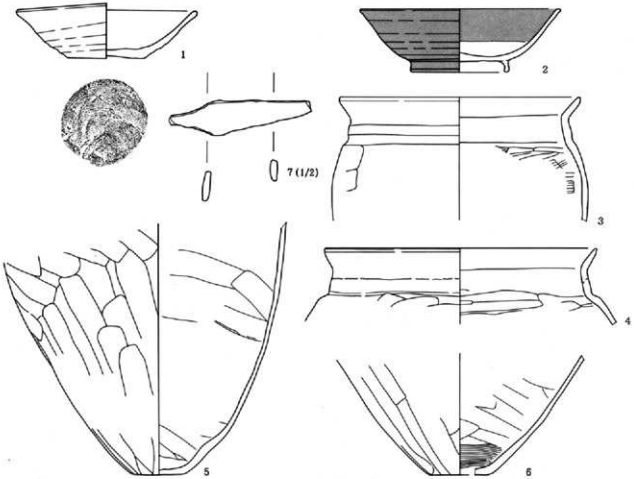
113号住居
1．黒褐色土　φ0.5～５cmの小礫を多く、FPを少し含む。
2．黒褐色土　φ0.5～５cmの小礫を多く含む。
3．黒褐色土　φ0.5～５cmの小礫、黄褐色粒を多く含む。

第387図　113号住居平面・断面図



113号住居カマド
1．黒褐色土　φ５～30mmの小礫を少し、φ0.5～２mmのFPを少し含む。
2．暗褐色土　焼土、炭化物を少し含む。
3．暗褐色土　焼土粒、炭化物を少し含む。
4．暗褐色土　砂質土、焼土粒を少し含む。

第388図　113号住居カマド図



第389図　113号住居出土遺物図

114号住居

本住居は、調査区の北東部、86区A－16グリッドに位置する。他遺構との重複はみられず単独で占地する。

形態は、長方形を呈する。残存状態は、確認面から床面まで残存高が低いが比較的良好な状態である。

規模は、長軸3.44m、短軸2.68m、北辺2.64m、東辺2.68m、南辺2.40m、西辺3.12mを測る。床面積は、7.69㎡である。主軸方位は、N－87.2°－Eを指す。壁高は、北壁8.2～12.0cm、東壁5.2～15.7cm、南壁5.0～16.3cm、西壁11.2～21.5cm、平均12.0cmである。

内部施設は、周溝は検出したが、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。周溝は、東辺の北半から北辺、西辺の北半の壁下を巡る。規模は径8.0～25.0cm、深度0～4.0cmである。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

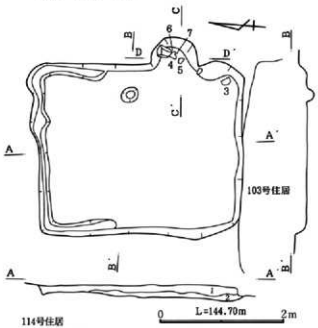
カマドは、東辺の南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖が流失している。規模は、全長60.0cm、幅75.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に42.0cm延びる。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、一応レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

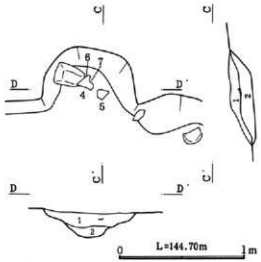
遺物は、土師器、須恵器など51点と少量の出土である。出土状態は、カマドとその周囲にまとまっており、4～7の須恵器椀・羽釜、土師器甕がカマド、3の須恵器椀が床面からの出土である。

本住居の時期は、出土遺物が1～4が9世紀第1四半期、5～7が10世紀前半代と差がみられる。そしてどちらもカマド・床面と住居に供伴する位置関係からの出土遺物がありどちらかへの比定はできない。



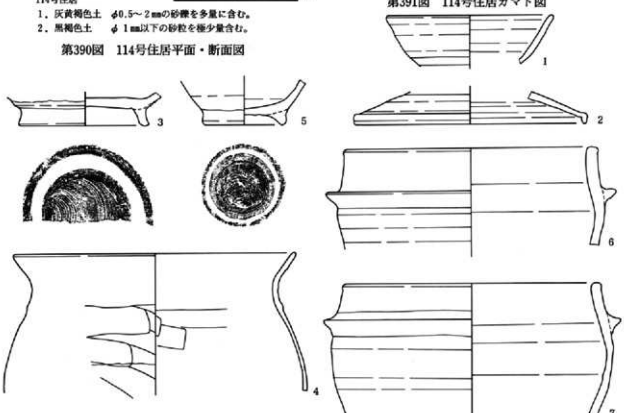
114号住居
1．灰黄褐色土　φ0.5～2mmの砂礫を多量に含む。
2．黒褐色土　φ 1mm以下の砂粒を極少量含む。

第390図　114号住居平面・断面図



114号住居カマド
1．灰黄褐色土　φ0.5～5mmの砂礫を多く含む。
2．黒褐色土　炭化物、焼土を多く含む。

第391図　114号住居カマド図



第392図　114号住居出土遺物図

115号住居

本住居は、調査区の北東部、86区C・D－17・18グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、71号住居・87号住居・95号住居・102号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが重複する住居群より前出である。

形態は、長方形を呈すると想定される。残存状態は、重複する住居群によって半分以上を欠く。

規模は、長軸4.64m、短軸3.88m、北辺は推定4.88m、東辺は残存するところで2.92mを測る。床面積は、残存範囲で推定8.00m²＋α である。主軸方位

は、N－94°－Eを指す。壁高は、北壁8.2～13.0cm、東壁11.7～18.5cm、平均12.9cmである。

内部施設は、周溝らしいものを検出したが、柱穴、貯蔵穴とも確認されなかった。周溝は、西辺の中ほどの壁際で全長0.7mほど検出した。幅は15～20cm、深度は3cm前後である。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

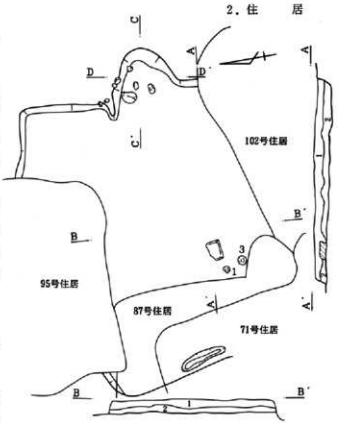
カマドは、東辺の南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、左袖は残存しているが右袖が流失している。規模は、全長105.0cm、幅106.5cm、左袖27.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に64.5cm延びる。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、ほぼ水平な堆積状態を観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など173点が出土している。出土状態は、1、3の須恵器椀が床面から出土している。

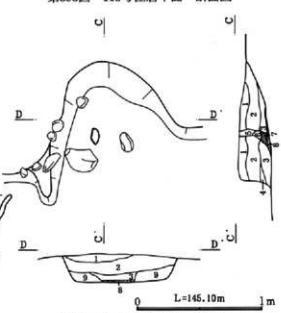
本住居の時期は、出土遺物より9世紀第4四半期に比定される。



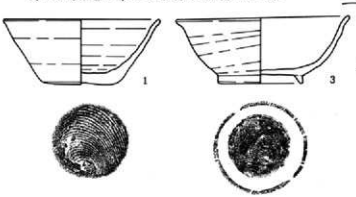
115号住居
1．褐灰色土　φ0.5～2cmの砂礫を多量に含む。
2．灰黄褐色土　φ0.5～2cmの砂礫をさらに多く、φ1mm以下の黄褐色粒をやや多く含む。

第393図　115号住居平面・断面図

115号住居カマド
1．黒褐色土　φ1mm以下の微細な砂粒及び黄褐色粒子を少量含む。
2．灰黄褐色土　φ1～5mmの砂礫・焼土、φ1～2mmの黄褐色粘質土ブロックを若干含む。
3．黒褐色土　φ0.5～10mmの焼土塊・炭化物を多く含む。
4．にぶい黄橙色土　粘質土ブロック。
5．灰黄褐色土　φ1～2mmの砂粒を少量、φ1mm以下の黄褐色粒子を極少量含む。
6．灰黄褐色土　ブロック。
7．赤褐色土　焼土ブロック。
8．黒色土　炭化物、灰層。
9．にぶい黄橙色土　φ1～5mmの砂礫・小石を多量に含む。



第394図　115号住居カマド図



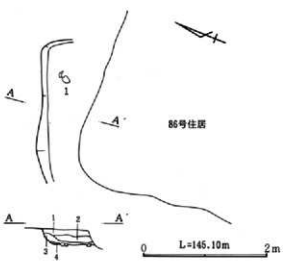
第395図　115号住居出土遺物図

116号住居

本住居は、調査区の北より、86区E－14・15、F－14グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、86号住居・106号住居・107号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが重複する住居群より前出である。

形態は、大部分を欠くため不明である。残存状態は、重複する住居群によって南側から8割以上を欠き北辺側の僅かしか残存していない。

規模は、長軸、短軸、各辺、床面積とも計測できない。主軸方位は、N－65°－E前後を指すと想定される。壁高は、残存する北壁18.0～25.0cm、東壁15.7cm、平均14.7cmである。



第396図　116号住居平面・断面図

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、残存範囲では地山をそのまま踏み固めている。

カマドは、残存範囲では確認されなかった。

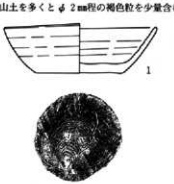
掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、残存範囲が狭いため土師器、須恵器など11点と少量しか出土していない。

本住居の時期は、出土遺物より8世紀第3四半期に比定される。

116号住居
1．黒褐色土　φ 2～3mmのFP、φ 2～5mmの褐色粒、炭化物を少量含む。
2．黒褐色土　φ 2～3mmのFPは1より少ない。
3．黒褐色土　2に類似、褐色粒が1・2より多い、炭化物も増えている。
4．暗褐色土　地山土を多くとφ 2mm程の褐色粒を少量含む。



第397図　116号住居出土遺物図

117号住居

本住居は、調査区の北西部、86区N－13・14、O－14グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、98号住居・99号住居・111号住居と重複する。新旧関係は、98号住居・99号住居より前出で111号住居より後出である。

形態は、ほぼ長方形を呈する。残存状態は、重複する98号住居によって北側半分近くを欠く。

規模は、長軸4.24m、短軸2.44m、南辺2.56m、西辺4.12m、北辺と東辺は残存するところでは0.44m、1.60mを測る。床面積は、残存範囲で4.51㎡である。主軸方位は、N－89°－Eを指す。壁高は、東壁3.0～4.0cm、南壁3.0～25.0cm、西壁3.0～20.0cm、平均8.8cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

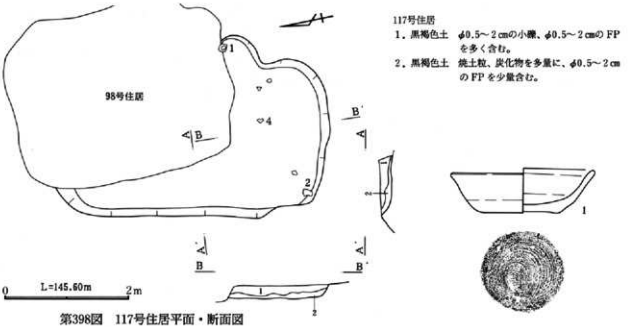
カマドは、東辺の中ほどに構築されている。残存状態は、重複する98号住居によって左側半分を欠き、天井部が崩落し、袖が流失している。規模は、全長68cm、幅58cm＋α、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に延びる。

掘り方は、確認できなかった。

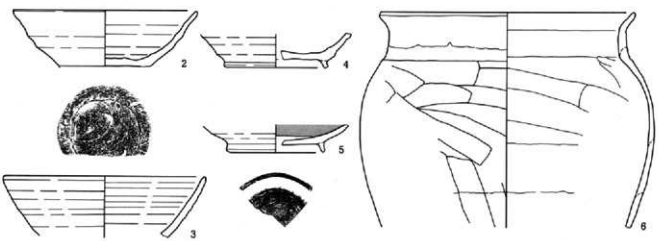
埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など86点が出土している。出土状態は、1、4の須恵器杯・椀が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より9世紀第3四半期に比定される。



第398図　117号住居平面・断面図



第399図　117号住居出土遺物図

118号住居

本住居は、調査区の北西部、86区Q－14・15グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、調査区内ではみられず単独で占地する。

形態は、ほぼ長方形を呈す。残存状態は、西側の半分程度が調査区外へ延びる。調査区内では、確認面から床面まで残存高が低いためあまり良好な状態ではない。

規模は、長軸3.07m、短軸2.13m＋α、東辺3.17m、北辺と南辺は残存するところで2.24m、1.38mを測る。床面積は、残存範囲で4.69m²である。主軸方位は、N－96°－Eを指す。壁高は、北壁7.0～12.0cm、南壁16.0～20.0cm、東壁5.0～11.0cm、平均18.5cmである。

内部施設は、貯蔵穴を検出したが、柱穴、周溝は確認されなかった。貯蔵穴は、東南角壁下に位置し、形態は楕円形を呈す。規模は径70.0×51.0cm、深度13.0cmである。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

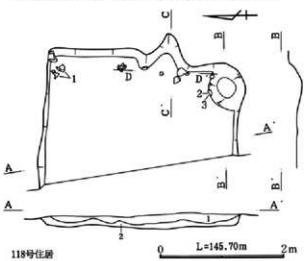
カマドは、東辺の中ほどよりやや南に構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、左袖は僅かに残存しているが右袖は流失している。規模は、全長64.5cm、幅72.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に30.0cm延びる。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

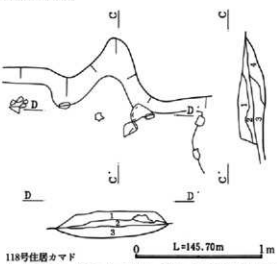
遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など7点と調査された住居の中ではもっとも少量の出土である。出土状態は、2、3の須恵器椀と土師器甕が貯蔵穴から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より9世紀第4四半期に比定される。



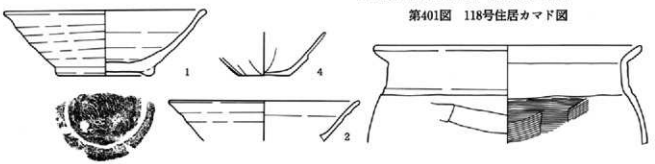
118号住居
1．黒褐色土　φ0.5～5cmの小礫を多く、焼土粒を若干含む。
2．黒褐色土　φ0.5～5cmの小礫を多く、焼土粒を少し含む。

第400図　118号住居平面・断面図



118号住居カマド
1．黒褐色土　φ0.5～2cmの小礫、φ0.5～1cmのFPを少し含む。
2．黒褐色土　焼土粒を少し、炭化物を少し含む。
3．暗褐色土　焼土粒を少し含む。
4．黒褐色土　粘質土、焼土・炭化物を多く含む。

第401図　118号住居カマド図



第402図　118号住居出土遺物図

119号住居

本住居は、調査区の北西部角隅、86区O・Q－15グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、113号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが後出である。本住居は、調査を行った範囲が住居の南西部分4分の1程度のため不明確な点が多い。

形態は、長方形を呈すると想定される。残存状態は、確認面から床面までの残存高が高いので比較的良好である。

規模は、長軸2.28m＋α、短軸1.60m＋α、南辺と西辺は、残存するところで2.40m、1.20mを測る。床面積は、残存範囲で2.86m²である。主軸方位は、N－91°－Eを指す。壁高は、南壁12.0～24.0cm、西壁27.0～31.8cm、平均23.7cmである。

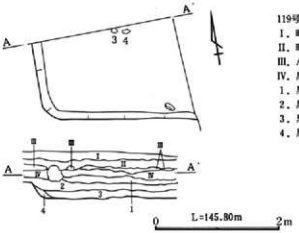
内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも存在していない。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

カマドは、調査された範囲では確認されなかった。掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

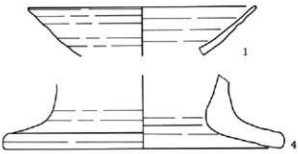
遺物は、土師器、須恵器など25点が出土している。出土状態は、ほとんど床面よりやや上位の埋没土中からの出土である。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第３四半期に比定される。



119号住居
Ⅰ．暗褐色土　φ0.5～１cmの小礫、φ0.5～１cmの FP を少量含む。
Ⅱ．暗褐色土　As-B を多量に含む。
Ⅲ．As-B
Ⅳ．黒褐色土　焼土、炭化物を少量、φ0.5～２cmの FP を多量に含む。
１．黒褐色土　焼土粒、φ0.5～２cmの小礫を多く含む。
２．黒褐色土　φ0.5～３cmの小礫を多く、炭化物、焼土粒を少量含む。
３．黒褐色土　φ0.5～２cmの小礫を多量に、焼土粒を極少量含む。
４．黒色土　φ0.5～１cmの FP を少量含む。

第403図　119号住居平面・断面図



第404図　119号住居出土遺物図

120号住居

本住居は、調査区の北東部、86区Ｂ・Ｃ－18・19グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、108号住居・109号住居・121号住居と重複する。新旧関係は、108号住居・109号住居より前出で、121号住居より後出である。

形態は、ほぼ方形を呈する。残存状態は、重複する108号住居・109号住居によって北東角、西辺の上部を欠く。

規模は、長軸4.12m、短軸3.88m、南辺3.60m、西辺3.40m、北辺、東辺残存するところでは2.28m、2.68mを測る。床面積は、推定13.59㎡である。主軸方位は、N－82°－Eを指す。壁高は、北壁25.9～28.5cm、東壁4.5～13.5cm、南壁3.0～17.0cm、西壁9.8～14.0cm、平均14.5cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

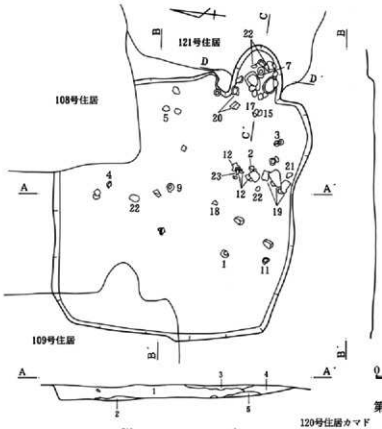
カマドは、東辺の東南角よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落しているが、袖は残存している。規模は、全長90.0cm、幅87.0cm、焚口幅76.5cm、左袖24.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に60.0cm延びる。袖は、左側が住居内へ作られているが、右側は東辺のカマド左右で20cmほどの違いが生じていることから地山をそのまま利用したと考えられる。燃焼部からは、長さ30cm、幅20cm、厚さ10cm前後の円礫が検出されているがこれらは袖、天井部の補強に使用されたものと考えられる。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、土層観察断面では大部分が１層であるが、自然埋没であると考えられる。

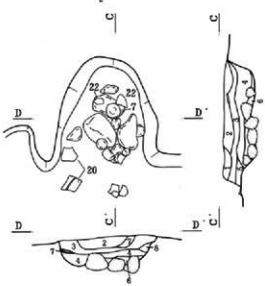
遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器など371点が出土している。出土状態は、カマドとカマド周辺にまとまった出土が見られ、７、20、22の須恵器椀・羽釜・甕がカマド、17、19の灰釉陶器椀、須恵器羽釜が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第２四半期に比定される。



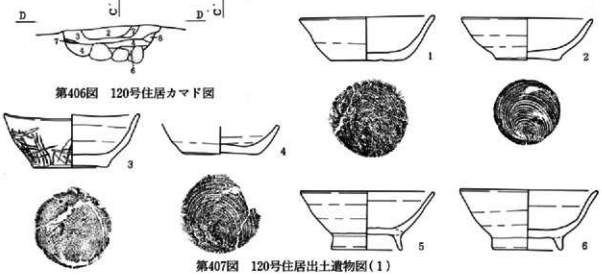
120号住居
1．黒褐色土　φ0.5～2cmのFP、黄褐色粒を多く含む。
2．黒褐色土　φ0.5～2cmのFPを少し含む。
3．黒褐色土　φ0.5～2cmのFPを少量含む。
4．黒褐色土　φ0.5～2cmのFPを少しと炭化物を多く含む。
5．黒褐色土　炭化物、焼土粒を少し含む。

第405図　120号住居平面・断面図

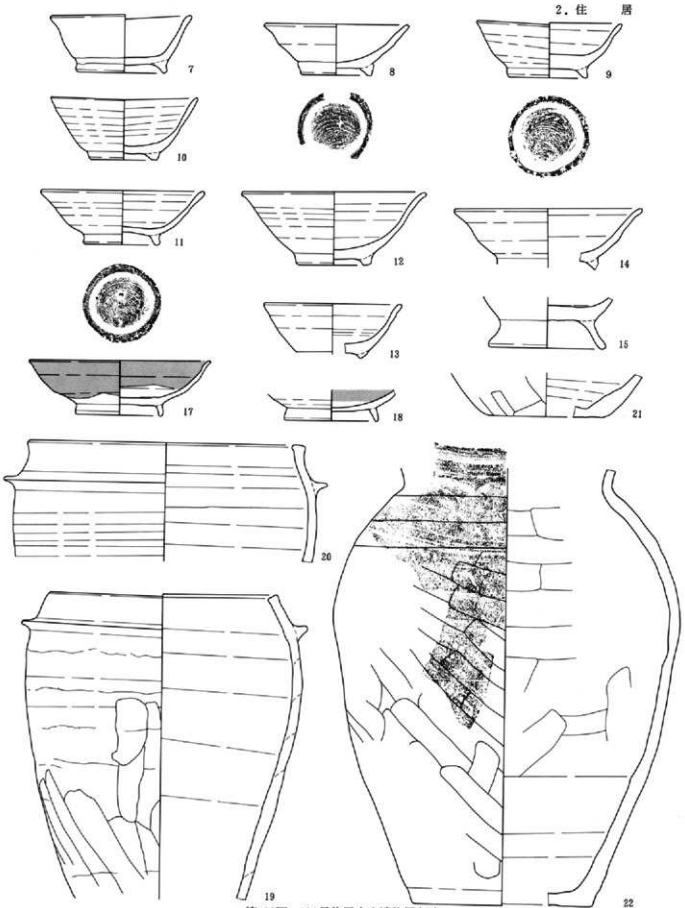


120号住居カマド
1．暗褐色土　炭化物を極少量含む。
2．暗褐色土　φ0.5～3cmのFPを多く含む。黄褐色土粒を少し含む。
3．黒褐色土　黄褐色土ブロック、炭化物を含む。
4．暗褐色土　焼土、φ0.5～3cmのFPを少し含む。
5．黒色土　炭化物多く、焼土粒少し含む。
6．暗褐色土　灰・焼土粒を若干含む。
7．黄褐色土　焼土。
8．暗褐色土　FP、焼土を少し含む。

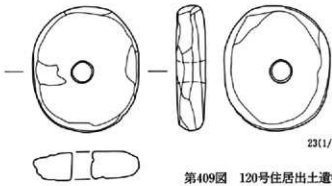
第406図　120号住居カマド図



第407図　120号住居出土遺物図(1)



第408図　120号住居出土遺物図(2)



第409図　120号住居出土遺物図(3)

121号住居

本住居は、調査区の北東部、86区A・B－18グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、108号住居・120号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが後出である。

形態は、長方形に近いが各角は明確ではない。残存状態は、確認面から床面まで残存高が低いためあまり良好な状態ではない。

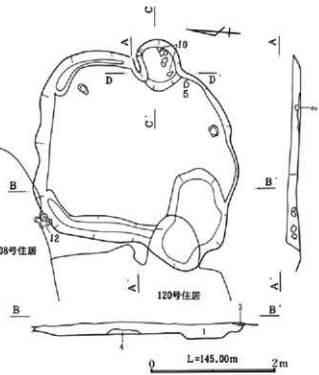
規模は、長軸3.20m、短軸2.96m、北辺2.80m、東辺2.80m、南辺2.88m、西辺2.76mを測る。床面積は、7.05m²である。主軸方位は、N－89.5°－Eを指す。壁高は、北壁5.6～20.5cm、東壁4.7～10.8cm、南壁6.0～24.0cm、西壁5.2～11.2cm、平均11.1cmである。

内部施設は、周溝と土坑状の落ち込みを検出したが、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。周溝は、東辺のカマド北側と西辺を巡る。規模は幅22.0～26.0cm、深度5.0～8.0cmである。土坑状の落ち込みは、南西角に位置し、形態は楕円形を呈す。規模は径156.0×108.0cm、深度34.0cmである。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

カマドは、東辺の中ほどに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖は左側が残存している。規模は、全長87.0cm、幅61.5cm、燃焼部幅46.5cm、左袖22.5cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に40.5cm延びる。袖は、左側が住居内へ作られているが、右側は東辺のカマド左右で20cmほどの違いが生じていることから地山をそのまま利用したと考えられる。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、土層観察断面の大部分が1層である



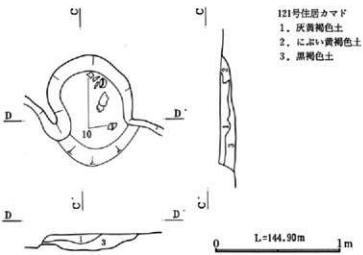
121号住居
1．灰黄褐色土　φ0.5～5mmの砂礫をやや多くとφ1～2mmの黄褐色粒、焼土粒を少量含む。
2．黒褐色土　φ0.5～1.2mmの砂粒、焼土を若干、炭化物、灰を多量に含む。
3．黒褐色土　灰、炭化物を多量に、φ1～5mmの焼土を少量含む。
4．黒色土　炭化物が大部分を占める。

第410図　121号住居平面・断面図

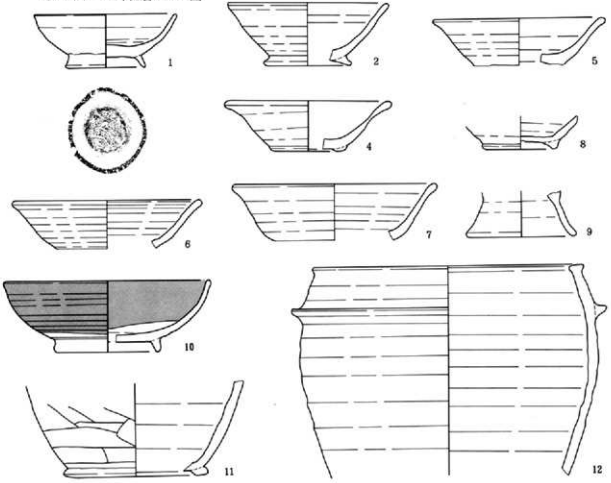
が壁際で三角堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など171点が出土している。出土状態は、3、7、10の須恵器椀、灰釉陶器椀がカマド、5の須恵器椀が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第2～3四半期に比定される。



第411図　121号住居カマド図



第412図　121号住居出土遺物図

139号住居

本住居は、調査区の東より、86区C－10・11グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、43号住居・64号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが後出である。

形態は、長方形を呈する。残存状態は、確認面から床面まで残存高が低いが比較的良好な状態である。

規模は、長軸2.80m、短軸2.05m、北辺2.06m、東辺2.37m、南辺1.90m、西辺2.65mを測る。床面

積は、4.57m²である。主軸方位は、N－2°－Eを指す。壁高は、東壁14.0～19.0cm、南壁4.0～15.5cm、西壁16.0～19.0cm、平均14.6cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、重複する43号住居の埋没土と地山をそのまま踏み固めている。

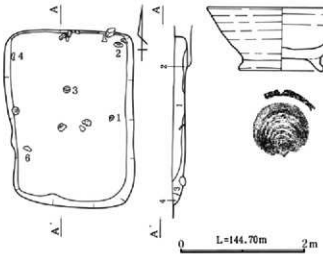
カマドは、構築されていない。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

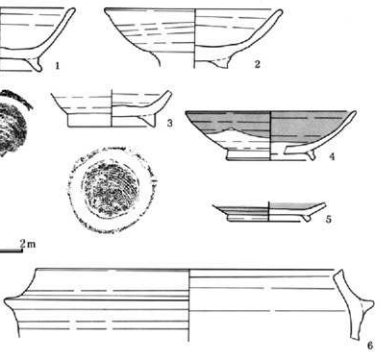
遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など219点が出土している。出土状態は、比較的床面や床面近くからの出土が多く、図を掲載した遺物も5の灰釉陶器椀以外は床面からの出土である。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第2～3四半期に比定される。



139号住居
1．黒褐色土　φ0.1～0.5cmの砂、φ1～5cmの小礫を多くとφ0.5～1cmの炭化物片を多く含む。
2．黒色土　炭化物が大部分を占める。
3．黒褐色土　φ0.1～0.5cmの砂粒、黄色粒を含む。
4．にぶい黄褐色土　砂質土、φ0.1～0.3cmの橙色粒を少量含む。

第413図　139号住居平面・断面図



第414図　139号住居出土遺物図

140号住居

本住居は、調査区の中央部のやや南、86区C・D－7グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、141号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが後出である。

形態は、やや歪んだ長方形を呈する。残存状態は、確認面から床面まで残存高が低いためあまり良好な状態ではない。

規模は、長軸2.80m、短軸2.30m、北辺2.80m、東辺1.94m、南辺2.96m、西辺2.12mを測る。床面積は、12.5m²である。主軸方位は、N－9.5°－Eを指す。壁高は、北壁12.5cm、東壁10.0～15.5cm、南壁10.5cm、西壁9.0cm、平均11.2cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

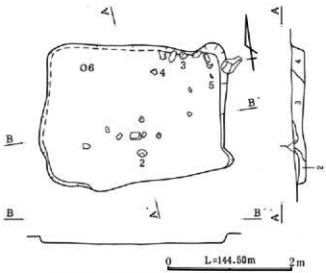
カマドは、構築されていない。

掘り方は、確認できなかった。

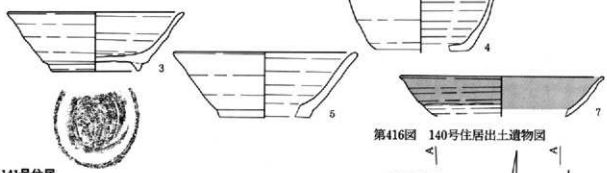
埋没状態は、確認面から床面まで残存高が低く堆積状態があまり明確ではないが、自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など305点が出土している。出土状態は、3、4の須恵器椀が床面より出土している。

本住居の時期は、出土遺物より9世紀第4四半期から10世紀初頭に比定される。



第415図　140号住居平面・断面図



第416図　140号住居出土遺物図

141号住居

本住居は、調査区の中央部のやや南、86区C・D－7グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、140号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが前出である。

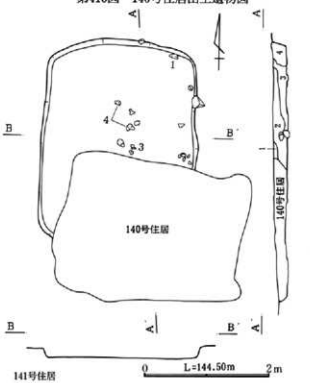
形態は、ほぼ長方形を呈する。残存状態は、重複する140号住居によって南東部分を欠き、残存部分も確認面から床面まで残存高が低いため良い状態ではない。

規模は、長軸3.22m、短軸2.48m、北辺2.28m、西辺2.80m、東辺は残存するところで1.68mを測る。床面積は、推定6.93m²である。主軸方位は、N－94°－Eを指す。壁高は、北壁22.0～25.0cm、東壁16.5～17.5cm、西壁11.5～12.5cm、平均17.5cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

カマドは、構築されていない。

掘り方は、確認できなかった。

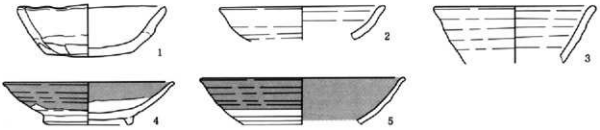


第417図　141号住居平面・断面図

埋没状態は、一応レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など219点が出土している。出土状態は、大部分が床面よりやや上位からの出土であるが1の土師器杯が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第1四半期に比定される。



第418図　141号住居出土遺物図

142号住居

本住居は、調査区の中央部、86区G・H－11グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、35号住居、85号土坑と重複する。新旧関係は、本住居のほうが前出である。

形態は、北東角と東南角が不明瞭なため多角形状を呈す。残存状態は、重複する35号住居によって北辺側を欠き、残存部分も確認面から床面まで残存高が低いため良い状態ではない。

規模は、長軸3.40m、短軸3.32m、東辺、南辺、西辺は残存するところで3.36m、2.92m、2.44mを測る。床面積は、残存範囲で7.72m²である。主軸方位は、N－89.5°－Eを指す。壁高は、東壁3.0～7.5cm、平均5.3cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

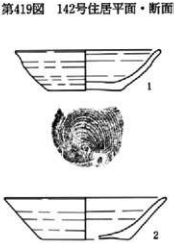
カマドは、東辺の中ほどよりやや南に構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖が流失しているが袖の補強に使用された礫は据えられた状態で検出された。規模は、全長25cm、幅50cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に10cm延びる。

掘り方は、確認できなかった。

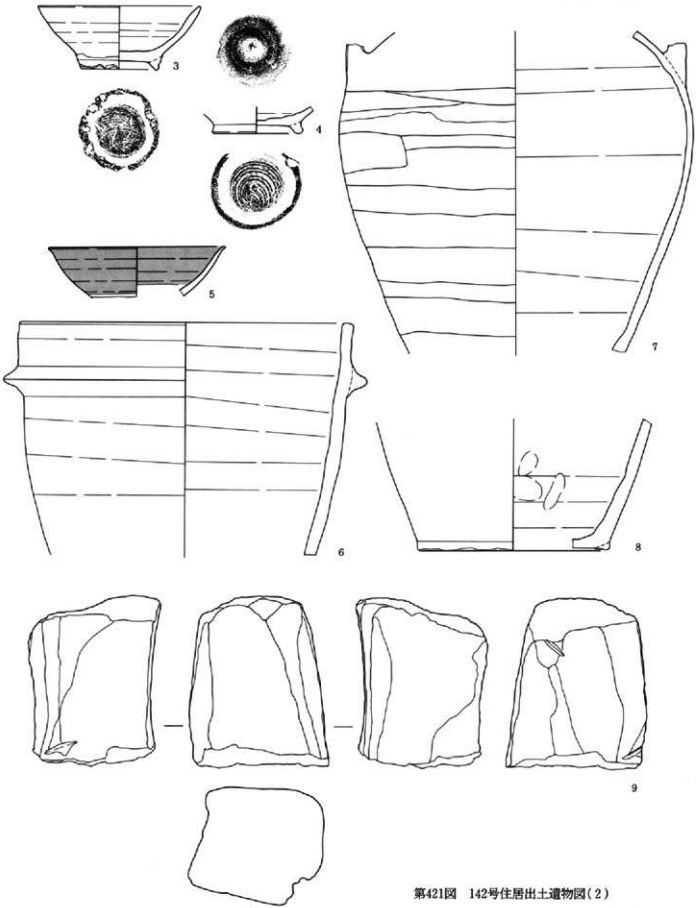
遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など156点が出土している。出土状態は、確認面から床面まで残存高が低いためかほとんど床面からの出土である。

本住居の時期は、出土遺物より9世紀末から10世紀第1四半期に比定される。

第419図　142号住居平面・断面図



第420図　142号住居出土遺物図(1)



第421図　142号住居出土遺物図(2)

143号住居

本住居は、調査区の中央部、86区B・C－6グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、159号住居、23号土坑と重複する。新旧関係は、23号土坑より前出で159号住居より後出である。

形態は、ほぼ長方形を呈する。残存状態は、確認面から床面まで残存高が低いためあまり良好な状態ではない。

規模は、長軸3.22m、短軸2.62m、北辺2.44m、東辺3.36m、南辺2.32m、西辺2.90mを測る。床面積は、6.70m²である。主軸方位は、N－3°－Eを指す。壁高は、北壁5.5～10.5cm、東壁22.0～22.5cm、南壁2.5cm、西壁6.5～12.0cm、平均11.9cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

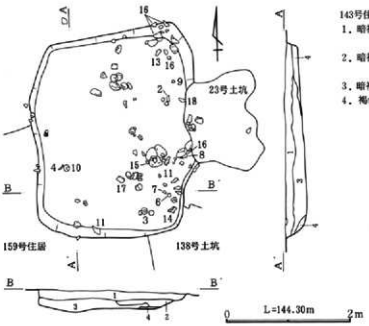
カマドは、構築されていない。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

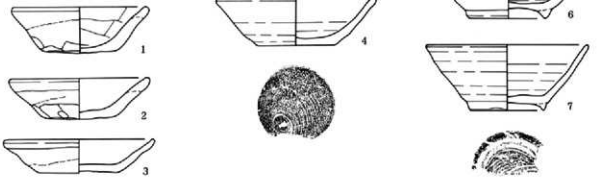
遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など329点が出土している。出土状態は、多くの遺物が床面よりやや上位の埋没土中からの出土であるが3、4、8、13、14、16の須恵器椀・羽釜、土師器甕が床面より出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第1四半期に比定される。

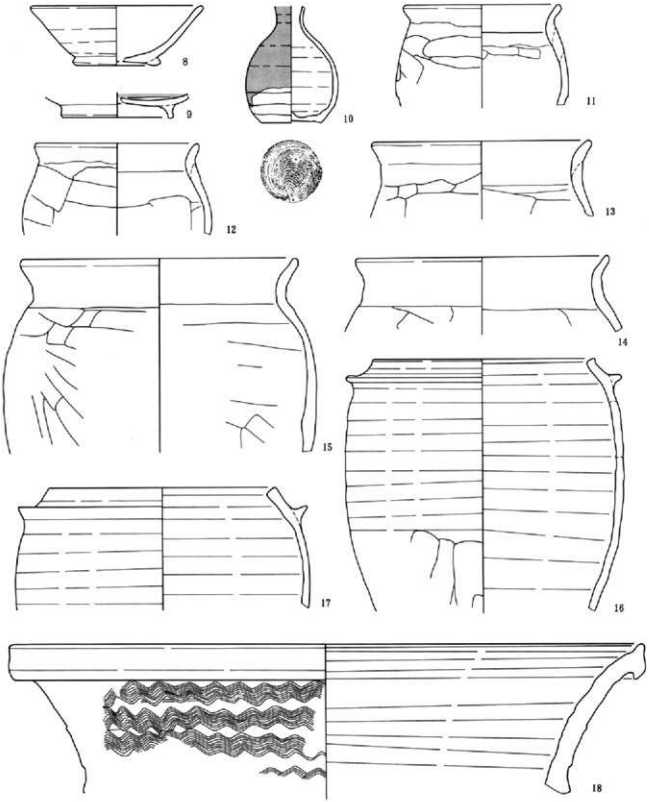


143号住居
1. 暗褐色土　φ0.5～2cmの砂粒、長さ3cm位の炭化物片を少量含む。
2. 暗褐色土　φ0.5～2cmの砂粒、長さ3～5cmの炭化物を多量に含む。
3. 暗褐色土　φ0.5～2cmの砂粒、φ1cm位の黄色粒を含む。
4. 褐色土　φ1～3mmの砂粒、長さ1cm位の炭化物片を含む。

第422図　143号住居平面・断面図



第423図　143号住居出土遺物図(1)



第424図　143号住居出土遺物図（2）

144号住居

本住居は、調査区の西南部、86区H・I－1・2グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、みられず単独で占地する。

形態は、ほぼ長方形を呈する。残存状態は、確認

面から床面まで残存高が低いため不良な状態である。

規模は、長軸3.96m、短軸3.08m、北辺2.84m、東辺3.88m、南辺2.68m、西辺3.84mを測る。床面積は、10.10m²である。主軸方位は、N－94°－Eを指す。壁高は、北壁5.5～14.0cm、東壁2.0～10.0cm、西壁2.0～4.0cm、南辺1cm前後で平均5cm程度である。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

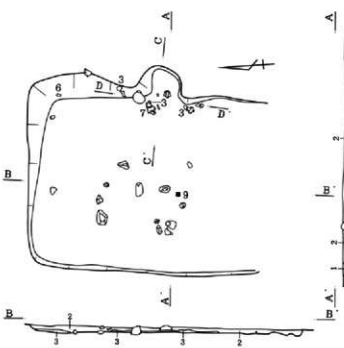
カマドは、東辺の中ほどに構築されている。残存状態は、残存高が5～7cmしかないためほとんど削平を受けているが左袖に補強のため使用された礫は据えられた状態で検出された。使用された規模は、全長55.5cm、幅82.5cm、焚口幅43.5cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に31.5cm延びる。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、埋没土の残存高が低いため不明確であるが自然埋没であると考えられる。

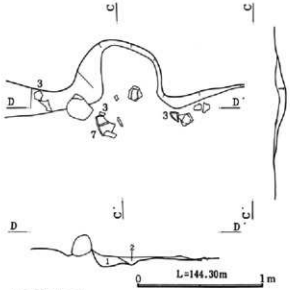
遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、石帯など219点が出土している。出土状態は、3、7の須恵器椀、土師器鉢がカマド、9の銙帯丸鞆が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第1四半期に比定される。



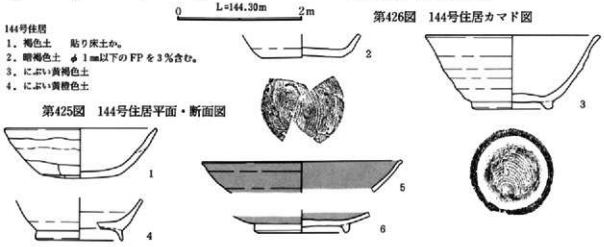
144号住居
1．褐色土　貼り床土か。
2．暗褐色土　φ1mm以下のFPを3％含む。
3．にぶい黄褐色土
4．にぶい黄橙色土

第425図　144号住居平面・断面図

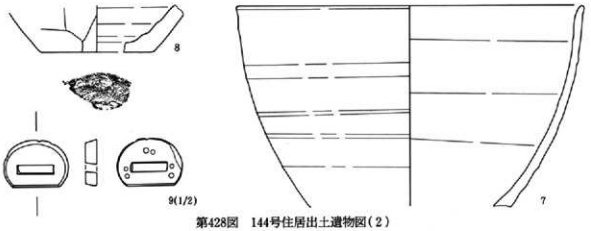


144号住居カマド
1．暗褐色土　焼土粒を若干、炭化物・黄褐色土ブロックを5～10％含む。
2．暗褐色土　焼土を若干含む。

第426図　144号住居カマド図



第427図　144号住居出土遺物図(1)



第428図　144号住居出土遺物図（2）

146号住居

本住居は、調査区の南より、86区D・E－1・2グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、147号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが後出である。

形態は、北西角が突出するような不整形を呈する。残存状態は、確認面から床面まで残存高が僅かしかないため不良な状態である。

規模は、長軸2.80m、短軸2.28m、北辺2.28m、東辺2.68m、南辺2.20m、西辺2.16mを測る。床面積は、5.96m²である。主軸方位は、N－115°－Eを指す。壁高は、各壁ともほとんど残存高がない状態である。

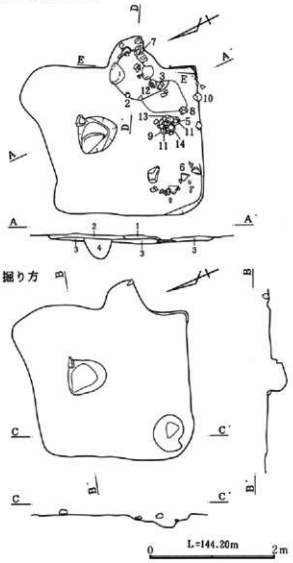
内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかったが住居中ほどから土坑状の落ち込みを検出した。落ち込みは、楕円形を呈し、規模は径65×60cm、深度25cmである。床面の状態は、厚さ5cm前後暗褐色土を張り込んで踏み固め床面としている。

カマドは、東辺の中ほどに構築されている。残存状態は、天井部が崩落している。袖は、大部分流失しているが、左袖は僅かに残存し、補強に使用された礫が据えられた状態で検出された。規模は、全長99.0cm、幅117.0cm、左袖37.5cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に54.0cm延びる。

掘り方は、床面下5cmほどでほぼ平坦であるが、東西角から床下土坑を検出した。床下土坑は、楕円形を呈し、規模は径57×48cm、深度10cmである。

埋没状態は、残存高がごく僅かなため不明である。

遺物は、土師器、須恵器など418点が出土している。

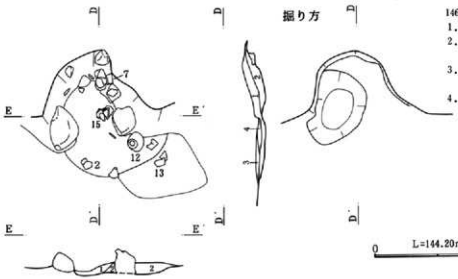


146号住居
1．暗褐色土　焼土粒・ブロックを10%含む。
2．暗褐色土　FPを若干含む。
3．暗褐色土　φ1～10mmのFPを若干含む。
4．暗褐色土　床下土坑。

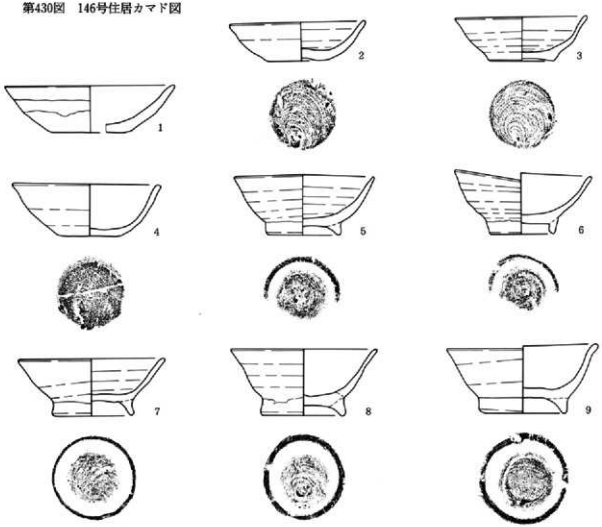
第429図　146号住居平面・断面図

出土状態は、カマドとカマド前部の右側に集中した箇所がみられ、確認面から床面までの残存高が僅かしかないため出土した遺物はほとんど床面からである。

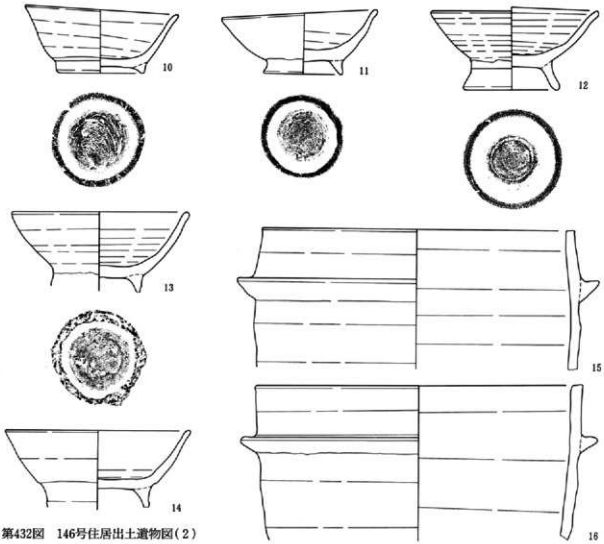
本住居の時期は、出土遺物より10世紀第２四半期に比定される。



第430図　146号住居カマド図



第431図　146号住居出土遺物図(１)



第432図　146号住居出土遺物図（2）

147号住居

本住居は、調査区の南より、86区D－1グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、146号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが前出である。

形態は、やや歪んだ隅丸長方形を呈する。残存状態は、確認面から床面まで残存高が低いためあまり良好な状態ではない。

規模は、長軸3.68m、短軸3.36m、北辺3.32m、東辺2.80m、南辺2.80m、西辺2.80mを測る。床面積は、8.53m²である。主軸方位は、N－95°－Eを指す。壁高は、北壁9.5～13.5cm、東壁5.0～12.0cm、南壁10.5～23.0cm、西壁14.5～18.0cm、平均13.3cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

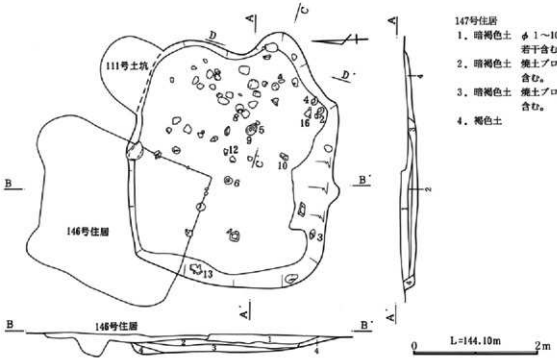
カマドは、東辺の中ほどに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖は残存している。袖には、φ10cm前後の礫が補強に使用されている。規模は、全長139.5cm、幅120.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に52.5cm延びる。

掘り方は、確認できなかった。

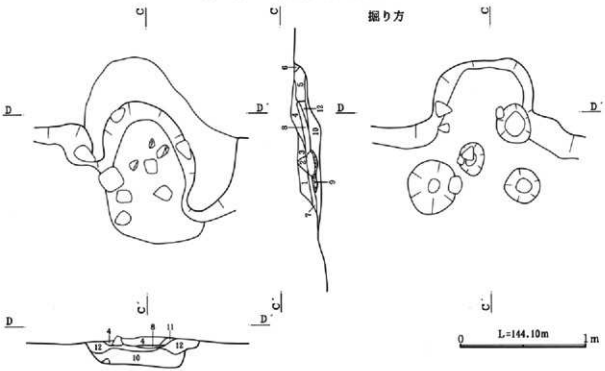
埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など280点が出土している。出土状態は、住居東半に分布が多くみられ、14の土師器甕がカマド、2、3、10、12、13、16の須恵器杯、灰釉陶器椀・長頸壺、土師器甕が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より9世紀第4四半期に比定される。



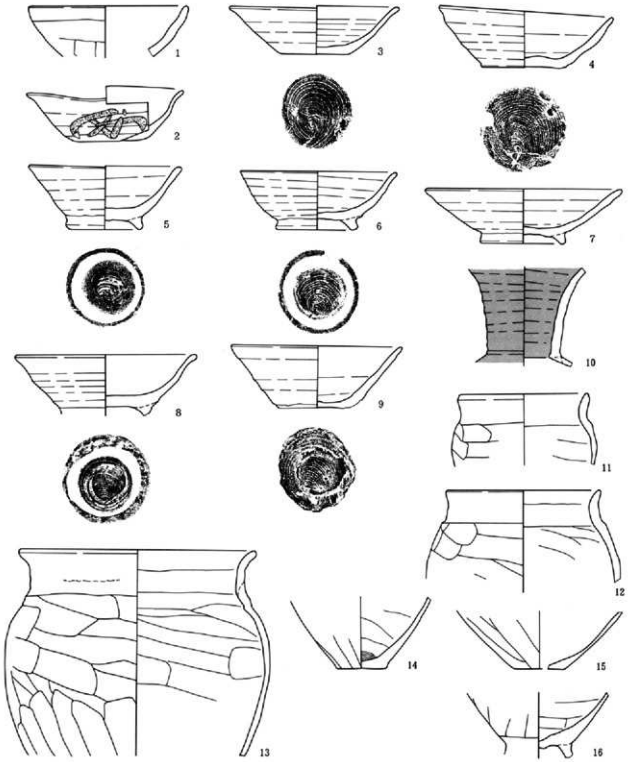
第433図　147号住居平面・断面図



147号住居カマド

1．灰黄褐色土　FPを5%含む。
2．褐色土　やや粘質土。
3．暗褐色土　炭化物ブロックを含む。
4．暗褐色土　焼土ブロックを30%含む。
5．灰黄褐色土　やや砂質土。
6．褐色土　焼土を多く含む。
7．黒褐色土　灰、炭化物を30%含む。
8．暗褐色土　粘質土、焼土ブロックを20%含む。
9．黒色土　灰。
10．褐灰色土　砂質土、焼土粒・灰を5%含む。
11．褐色土　焼土を多く含む。
12．暗褐色土　粘質土、焼土粒・ブロックを20%、φ0.5～1cmのFPを10%含む。

第434図　147号住居カマド図



第435図　147号住居出土遺物図

148号住居

本住居は、調査区の南より、86区D・E－2・3グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、1号住居・159号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが後出である。

形態は、東辺が西辺に比べて1mほど長いやや歪んだ長方形を呈する。残存状態は、確認面から床面まで残存高が低いためあまり良好な状態ではない。

規模は、長軸5.12m、短軸3.36m、北辺3.20m、

東辺5.20m、南辺2.80m、西辺4.20mを測る。床面積は、14.50㎡である。主軸方位は、N－94°－Eを指す。壁高は、北壁19.0cm、東壁11.0cm、南壁11.0cm、西壁4.20cm、平均13.5cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

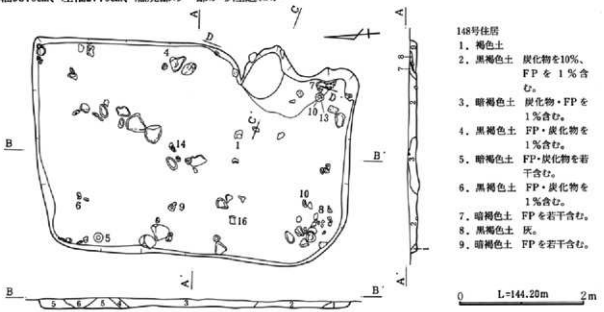
カマドは、東辺の南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖の大部分が流失しているが左袖が僅かに残存する。規模は、全長63.0cm、幅93.0cm、左袖27.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に25.5cm延びる。

掘り方は、確認できなかった。

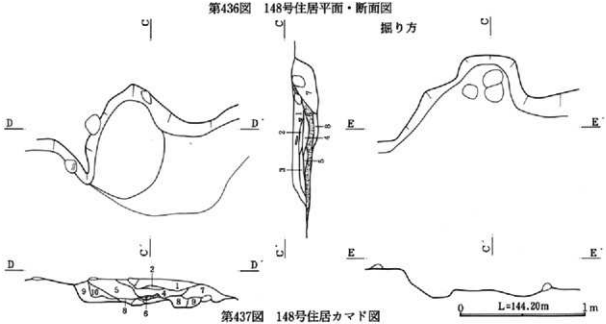
埋没状態は、不規則な堆積が観察できることから人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など389点が出土している。出土状態は、住居全域からやや散漫な状態がみられ、1、4、10、13、16の土師器杯、須恵器杯・椀・甕、灰釉陶器椀が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より9世紀第4四半期から10世紀初頭に比定される。



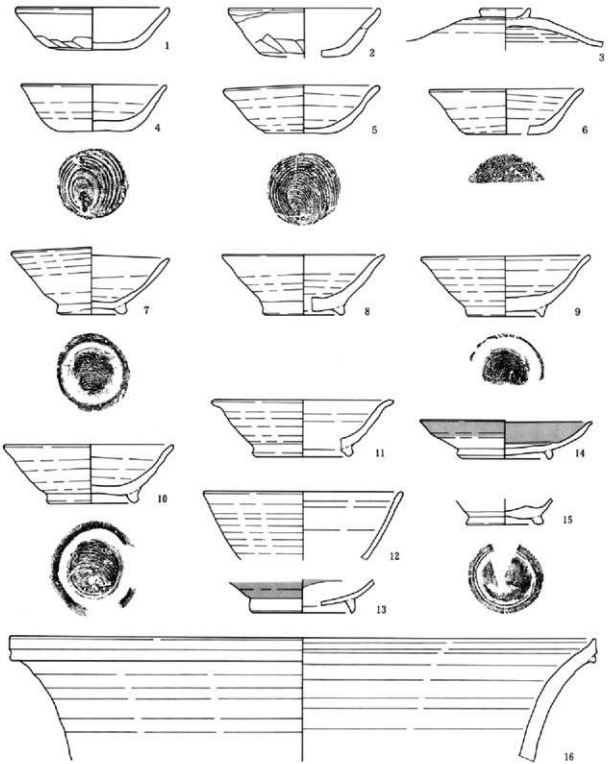
第436図　148号住居平面・断面図



第437図　148号住居カマド図

148号住居カマド

1．黒褐色土　焼土粒、炭化物を5％含む。
2．黒色土　灰を20～50％含む。
3．暗褐色土　焼土を10％、灰を30％含む。
4．浅黄橙色土　焼土を50％含む。
5．橙色土　焼土、天井部か?
6．黒色土　灰。
7．暗褐色土　粘質土、焼土粒、炭化物を10％含む。
8．暗褐色土　焼土粒、ブロックを30％含む。
9．暗褐色土　粘質土、焼土粒、炭化物を含まない。
10．焼土と灰。



第438図　148号住居出土遺物図

149号住居

本住居は、調査区の南より、86区D－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、148号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが前出である。

形態は、ほぼ長方形を呈する。残存状態は、住居中央を攪乱で欠き、西辺際を重複する148号住居によって欠く。また、住居自体も確認面から床面まで残存高が低いためあまり良好な状態ではない。

規模は、長軸2.80m、短軸1.72m、北辺2.84m、東辺3.44m、南辺3.20m、西辺3.44mを測る。床面積は、10.40m²である。主軸方位は、N－91°－Eを指す。壁高は、北壁10.0cm、東壁11.0cm、南壁6.0～15.0cm、西壁15.0cm、平均11.6cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

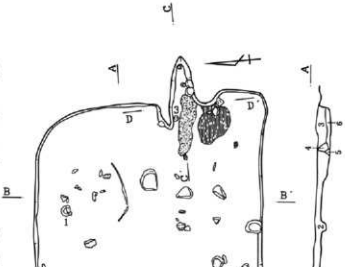
カマドは、東辺の中ほどよりやや南に構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖は残存している。規模は、全長118.5cm、幅103.5cm、焚口幅90.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に97.5cm延びる。焚口からカマド前部の床面にかけて灰の堆積がみられる。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、不規則な堆積が観察できることから人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。

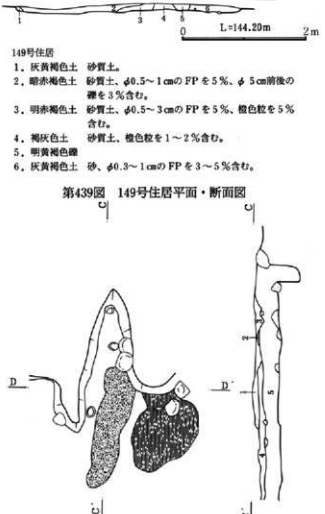
遺物は、土師器、須恵器など344点が出土している。出土状態は、3の須恵器椀がカマド、1の須恵器杯が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より9世紀第3四半期に比定される。



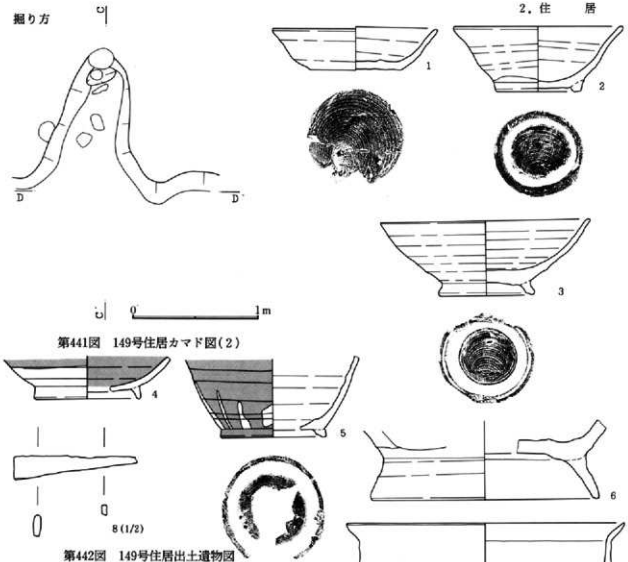
149号住居
1．灰黄褐色土　砂質土。
2．暗赤褐色土　砂質土、φ0.5～1cmのFPを5％、φ5cm前後の礫を3％含む。
3．明赤褐色土　砂質土、φ0.5～3cmのFPを5％、橙色粒を5％含む。
4．褐灰色土　砂質土、橙色粒を1～2％含む。
5．明黄褐色礫
6．灰黄褐色土　砂、φ0.3～1cmのFPを3～5％含む。

第439図　149号住居平面・断面図



149号住居カマド
1．黒褐色土　灰をブロック状に30～50％含む。
2．暗褐色土　灰をブロック状に10％含む。
3．黒褐色土　灰をブロック状に5％、焼土粒を3％含む。
4．暗青灰色土　暗褐色土ブロック、炭を5～10％含む。
5．褐色土　焼土粒を1％、φ2～3mmのFPを3％含む。
6．暗褐色土　炭の細粒を10％、焼土粒を1～2％含む。
7．褐色土　焼土粒を5％、φ2～5mmのFPを1～2％含む。

第440図　149号住居カマド図(1)



第441図　149号住居カマド図(2)

第442図　149号住居出土遺物図

150号住居

本住居は、調査区の南より、86区B・C－1・2グリッドに位置する。他遺構との重複はみられず単独で占地する。

形態は、長方形を呈する。残存状態は、確認面から床面まで50cmほどの残存高を有しており良好な状態である。

規模は、長軸4.32m、短軸3.28m、北辺3.24m、東辺4.12m、南辺3.04m、西辺4.12mを測る。床面積は、10.11m²である。主軸方位は、N－89°－Eを指す。壁高は、北壁59.0cm、東壁45.0～51.0cm、南壁47.0cm、西壁56.0cm、平均52.5cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴ともみられない。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

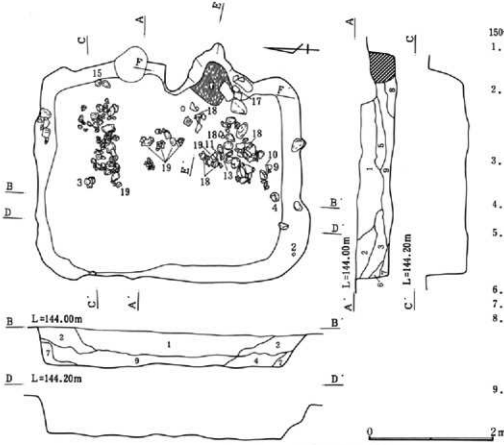
カマドは、東辺の南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖は残存している。規模は、全長91.5cm、幅124.5cm、左袖55.5cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に48.0cm延びる。右袖は、φ10cm、長さ20cm前後の細長い礫などを補強に使用している。

掘り方は、確認できなかった。

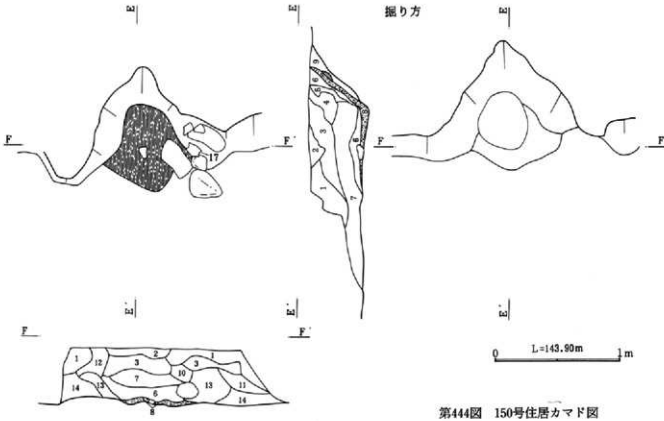
埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など385点が出土している。出土状態は、住居北東部と東南部の２カ所に礫の集中した箇所がみられその間に土器の集中した箇所が見られる。

本住居の時期は、出土遺物より９世紀第２四半期に比定される。



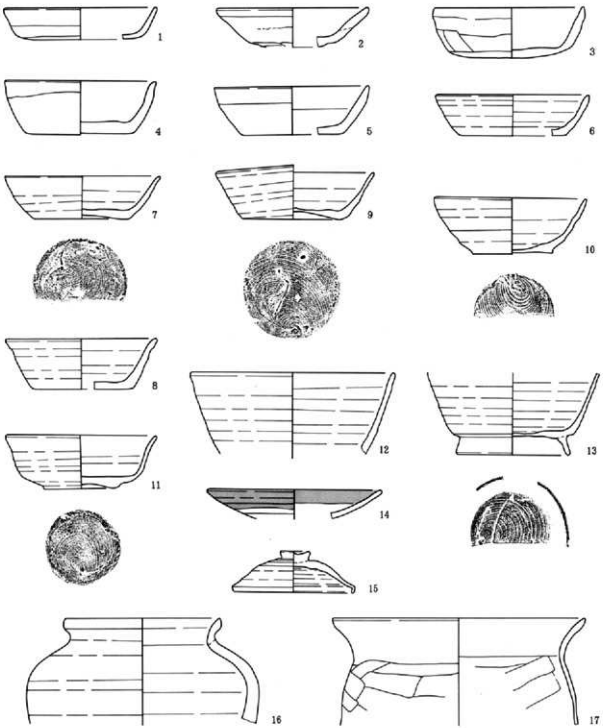
第443図　150号住居平面・断面図



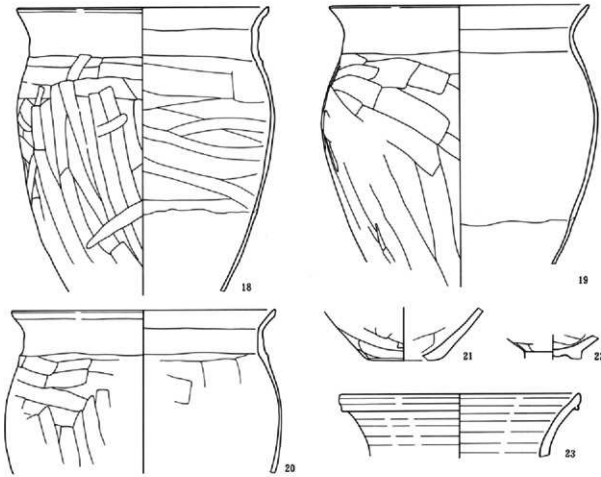
第444図　150号住居カマド図

150号住居カマド

1．暗褐色土　やや粘質土、黄褐色粘土ブロックを10%含む。
2．褐灰色土　φ２～３mmのFP・黄褐色粘土粒を２～３%含む。
3．にぶい黄橙色土　粘土質、暗褐色土を10～20%含む。
4．褐色土　　やや砂質土、FA粒を１%含む。
5．にぶい黄橙色土　粘土質。
6．明黄褐色土　　粘土、焼土粒、炭化物粒を５%含む。
7．にぶい黄褐色土　粘土質、暗褐色土をブロック状に10～20%含む。
8．黒色土　　灰。
9．黄褐色土　　粘土、焼土粒ブロックを20%含む。
10．黒褐色土　　暗褐色土粒子を３%含む。
11．黒褐色土　　焼土粒を１%含む。
12．6層に焼土粒ブロックを20～30%含む。
13．黄褐色土　　粘土、φ５mmのFPを２%含む。
14．灰黄褐色土　砂質土、粘土粒ブロックを20%含む。



第445図　150号住居出土遺物図(１)



第446図　150号住居出土遺物図(2)

151号住居

本住居は、調査区の西南部、86区O－3グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、みられず単独で占地する。

形態は、ほぼ長方形を呈する。残存状態は、確認面から床面までの残存高が20cm前後あり比較的良好な状態である。

規模は、長軸3.52m、短軸2.40m、北辺2.00m、東辺3.20m、南辺2.36m、西辺3.40mを測る。床面積は、6.03m²である。主軸方位は、N－90°－Eを指す。壁高は、北壁25.5～28.5cm、東壁19.5～22.5cm、南壁18.0～21.0cm、西壁22.5～24.0cm、平均22.7cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、掘り方に1～3cmほど暗褐色土を敷いて踏み固めて床面としている。

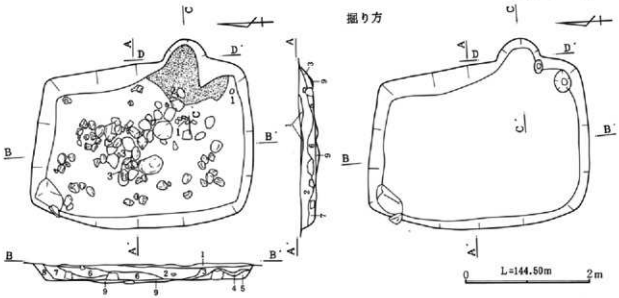
カマドは、東辺の南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖が流失している。規模は、全長69.0cm、幅90.0cm、燃焼部幅81.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に46.5cm延びる。燃焼部の火床面は、3cmほどの厚さで焼土化している。また、掘り方では、右袖部分で補強に使用した礫を据えてあった小孔が検出された。

掘り方は、床面より1～3cmほど下であるが床下土坑などの施設は検出されず平坦であった。

埋没状態は、一応レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、住居全域から φ10～40cmの礫は多量に出土したが、土師器、須恵器などの土器は29点と少量が出土しているだけである。出土状態は、ほとんど床面よりやや上位の埋没土中からの出土であるが2、3の須恵器椀蓋と土師器甕が床面から出土している。

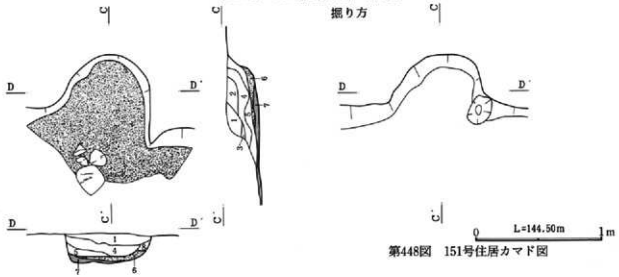
本住居の時期は、出土遺物より8世紀第4四半期に比定される。



151号住居

1．黒褐色土　　粘質土、φ 2～5㎜のFPを3％含む。
2．にぶい黄褐色土　砂質土、φ0.5～1㎝のFPを3％、褐色粒を5％含む。
3．灰黄褐色土　2に類似。
4．黒褐色土　　黄色砂を30％含む。
5．黄橙色土　　粗い砂。
6．灰黄褐色土　2・3に類似。3より暗い色調。
7．暗褐色土　　砂質土、φ 3～5㎜のFPを1～2％、褐色粒を5％含む。
8．暗褐色土　　砂質土、φ 3～5㎜のFPを3～5％含む。
9．暗褐色土　　明褐色焼土ブロックを10％含む。住居の貼り床。

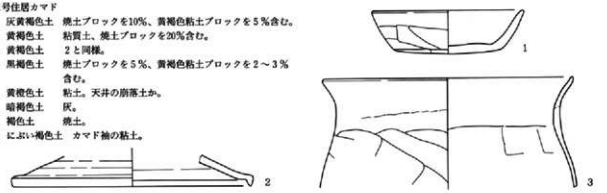
第447図　151号住居平面・断面図



第448図　151号住居カマド図

151号住居カマド

1．灰黄褐色土　焼土ブロックを10％、黄褐色粘土ブロックを5％含む。
2．黄褐色土　　粘質土、焼土ブロックを20％含む。
3．黄褐色土　　2と同様。
4．黒褐色土　　焼土ブロックを5％、黄褐色粘土ブロックを2～3％含む。
5．黄橙色土　　粘土。天井の崩落土か。
6．暗褐色土　　灰。
7．褐色土　　焼土。
8．にぶい褐色土　カマド袖の粘土。



第449図　151号住居出土遺物図

152号住居

本住居は、調査区の西より、86区M－10グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、158号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが後出である。

形態は、ほぼ長方形を呈する。残存状態は、住居中ほどを東西に通る現在の用水路で欠くがその他の部分は確認面から床面まで25cmほどあり比較的良好な状態である。

規模は、長軸2.92m、短軸2.20m、北辺2.16m、東辺2.88m、南辺2.08m、西辺2.72mを測る。床面積は、4.34m²である。主軸方位は、N－89°－Eを指す。壁高は、北壁28.0cm、東壁26.0cm、南壁16.0cm、西壁26.0cm、平均24.0cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

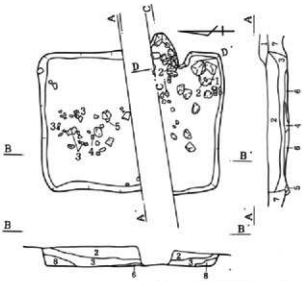
カマドは、東辺の南よりに構築されている。残存状態は、北半を用水路で欠き、天井部が崩落しているが、右袖は残存している。規模は、全長60.0cm、右袖25.5cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に36.0cm延びる。袖と燃焼部壁面には、小礫を補強に使用している。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

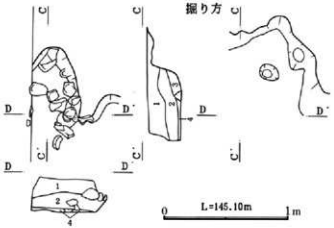
遺物は、土師器、須恵器など268点が出土している。出土状態は、カマドと北側部分にややまとまった出土がみられ、1～3の須恵器椀、土師器甕が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第2四半期に比定される。



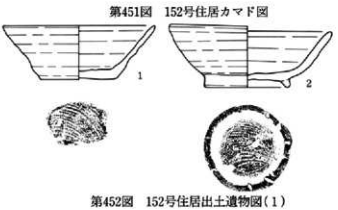
152号住居
1．暗褐色土
2．暗褐色土　砂質土、φ0.5～1cmのFPを含む。
3．黄褐色土　小礫、鉄分ブロックを含む砂礫。
4．黄灰色土　小礫、鉄分ブロックを含む砂礫。
5．黄褐色土　砂質土、壁溝に壁土が流入。
6．黄褐色土　砂質土。
7．黄褐色土　FPを含む。
8．灰褐色土　泥流砂を少しと橙色粒子を僅かに含む。

第450図　152号住居平面・断面図

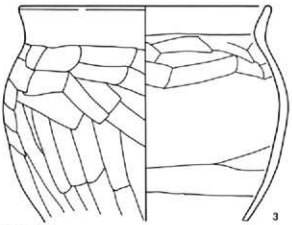


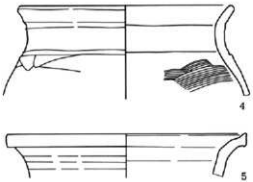
152号住居カマド
1．灰色土　橙色粒子を僅かに含む。
2．灰色土　黄橙色砂ブロックを多く含む。
3．灰色土　泥流砂を少し含む。
4．黒色土　炭・灰を多く含む。

第451図　152号住居カマド図



第452図　152号住居出土遺物図(1)





第453図　152号住居出土遺物図（2）

153号住居

本住居は、調査区の西より、86区M－9・10グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、みられず単独で占地する。

形態は、ほぼ長方形を呈する。残存状態は、確認面から床面まで残存高が25cmほどあり比較的良好な状態である。

規模は、長軸2.96m、短軸2.88m、北辺2.80m、東辺2.92m、南辺2.40m、西辺2.80mを測る。床面積は、7.13m²である。主軸方位は、N－90°－Eを指す。壁高は、北壁24.0～26.0cm、東壁19.0cm、南壁25.0～29.0cm、西壁25.0～28.0cm、平均24.4cmである。

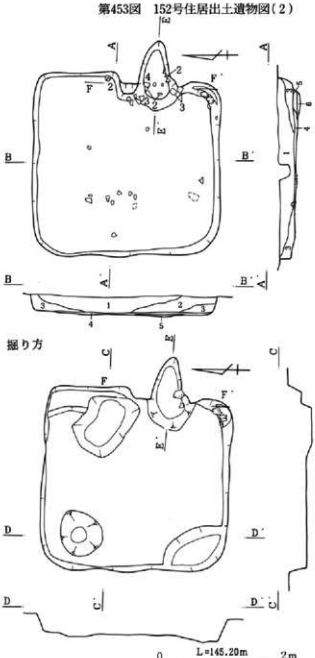
内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、周辺部を除いて地山泥流層に類似した黄橙色や灰黄色の砂質土を敷いて床面としている。

カマドは、東辺の南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落しているが、右袖は僅かであるが左袖は比較的良い状態で残存している。規模は、全長111.0cm、幅61.5cm、左袖45.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に55.5cm延びる。燃焼部の火床面は、灰と炭化物の堆積が見られる。

掘り方は、北東角と北西角付近で深度5cm、3cmの落ち込みが検出されたが床下土坑とは断定できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など451点が出土している。



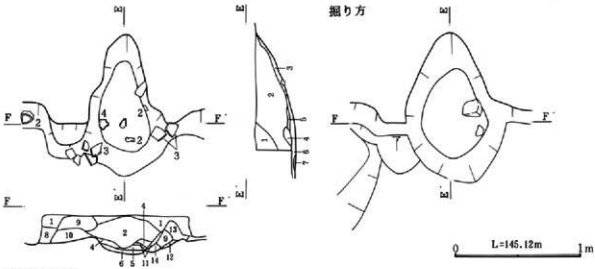
第454図　153号住居平面・断面図

出土状態は、カマドとその周辺にややまとまった出土がみられ、2～4の須恵器椀・羽釜、土師器甕がカマドから出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第3四半期に比定される。

153号住居

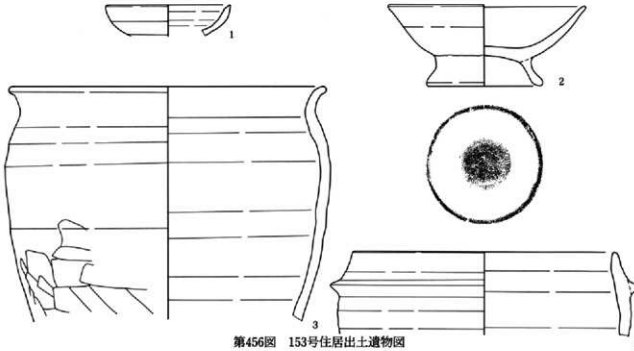
1．灰褐色土　橙色粒子を少し、泥流砂を少し含む。
2．灰褐色土　橙色粒子を少し、泥流砂を多く含む。
3．灰褐色土　やや粘質土、橙色粒子を僅かに含む。
4．灰色土　泥流砂を少し含む。
5．灰褐色土　泥流砂、シルト主体の層。
6．灰褐色土　橙色粒子を僅かに含む。粒子やや密。



153号住居カマド

1．灰褐色土　橙色粒子を少し、泥流砂を少し含む。
2．灰褐色土　炭化物ブロックと焼土粒子を少し含む。
3．灰褐色土　シルト質土。礫が入る。
4．黄橙色土　シルト質土のブロック。
5．黒色土　炭化物ブロック、焼土粒を少し含む。
6．黒色土　灰、炭化物。
7．黄橙色土　粘質土。
8．灰褐色土　やや粘質土、橙色粒子を僅かに含む。
9．黄橙色土　袖、シルト質土を構築材としている。
10．赤褐色土　袖、泥流砂を構築材としている。
11．赤褐色土　天井下部が焼け落ちたもの。
12．黒褐色土　9に似た黄橙色土を含む。
13．灰褐色土　橙色粒子を少し、泥流砂を若干含む。
14．灰褐色土　橙色粒子を少し、泥流砂を少し含む。

第455図　153号住居カマド図



第456図　153号住居出土遺物図

154号住居

本住居は、調査区の西端、86区O・P－9・10グリッドに位置する。他遺構との重複関係はみられず単独で占地する。

形態は、東辺が西辺に比べてやや長いがほぼ長方形を呈する。残存状態は、中ほどを東西に通る現在の用水路で欠き、確認面から床面まで残存高が低いためあまり良好な状態ではない。

規模は、長軸2.80m、短軸2.20m、北辺2.04m、東辺3.20m、南辺2.00m、西辺2.64mを測る。床面積は、5.27m²である。主軸方位は、N－90°－Eを指す。壁高は、北壁16.0cm、東壁12.0～13.0cm、南壁14.0cm、西壁19.0cm、平均15.4cmである。

内部施設は、柱穴は、1基検出したが、周溝、貯蔵穴は確認されなかった。柱穴は、中央やや北側に位置し、形態は楕円形を呈する。規模は径24.0×18.0cm、深度24.0cmである。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

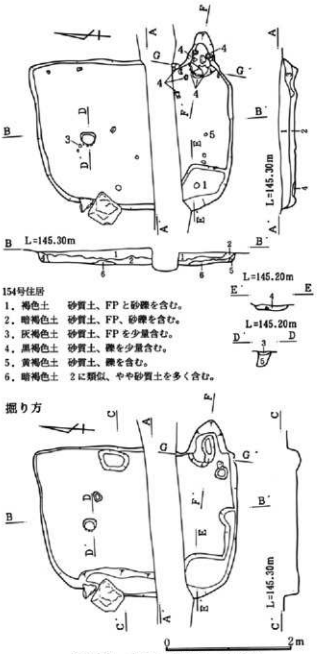
カマドは、東辺の東南角よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落している。規模は、全長73.5cm、幅64.5cm、燃焼部幅28.5cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に60.0cm延びる。袖は地山をそのまま利用したようで作られていない。

掘り方は、深度6cmほどの落ち込みと西壁下から南壁下にかけて周溝状の落ち込みを検出した。周溝状の落ち込みは、幅30～45cm、深度2～3cmほどである。

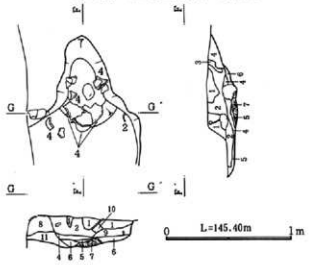
埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など234点が出土している。出土状態は、カマドにややまとまった出土がみられ、4、5の須恵器羽釜がカマド、1～3の黒色土器椀、須恵器椀、灰釉陶器皿が床面から出土している。

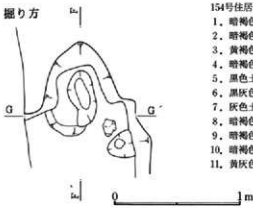
本住居の時期は、出土遺物より10世紀第4四半期に比定される。



第457図　154号住居平面・断面図

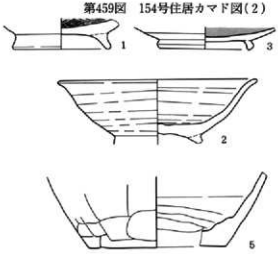


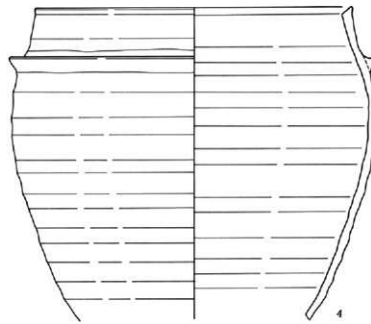
第458図　154号住居カマド図(1)



154号住居カマド
1．暗褐色土　黄褐色土を僅かに含む。
2．暗褐色土　黄褐色土を多く含む。
3．黄褐色土　黄褐色土ブロック。
4．暗褐色土　焼土・炭化物を多く含む。
5．黒色土　炭、焼土粒を僅かに含む。
6．黒灰色土　炭、焼土粒を僅かに含む。
7．灰色土　灰。
8．暗褐色土　1・2よりやや明るく焼土が僅かに混じる。
9．暗褐色土　1に類似、炭化物を含む。
10．暗褐色土　黄褐色土多い。
11．黄灰色土　泥流シルトブロック少し、炭化物、焼土粒を少し含む。

第459図　154号住居カマド図(2)





第460図　154号住居出土遺物図

155号住居

本住居は、調査区の西南部、86区Ⅰ－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、156号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが前出である。

形態は、北辺が南辺に比べて40cmほど長い隅丸長方形を呈する。残存状態は、重複する156号住居によって北西部の上位を欠くが確認面から床面まで残存高が35cm前後あり比較的良好な状態である。

規模は、長軸3.72m、短軸3.04m、北辺2.68m、東辺3.44m、南辺2.24m、西辺3.44mを測る。床面積は、7.98m²である。主軸方位は、N－78°－Eを指す。壁高は、北壁29.0～44.0cm、東壁33.0cm、南壁35.0cm、西壁41.0～43.0cm、平均35.4cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

カマドは、東辺の中ほどよりやや南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖はやや残存し補強で使用されていた礫が掘えられた状態で検出された。規模は、全長73.5cm、幅63.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に37.5cm延びる。

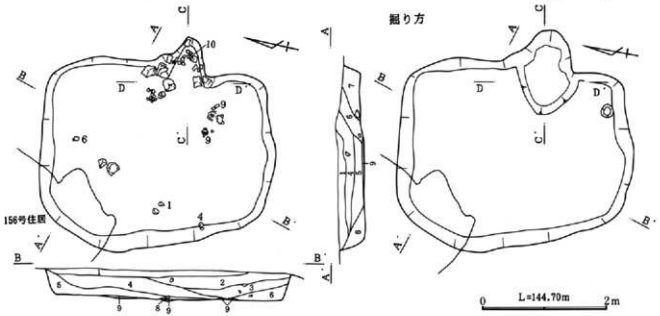
掘り方は、確認できなかった。燃焼部には、3～4cmの灰が堆積していた。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など254点が出土している。出土状態は、大部分が床面よりやや上位の埋没土中からの出土であるが10の土師器台付甕がカマド、9の土師器甕が床面から出土している。

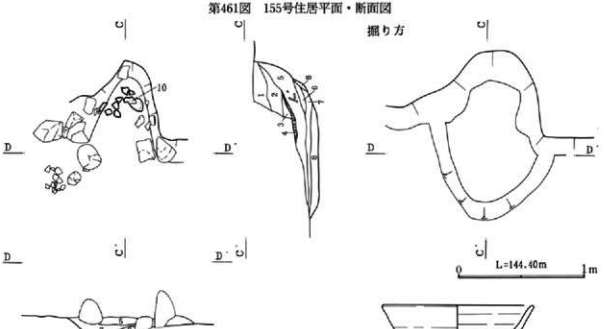
本住居の時期は、出土遺物より9世紀第2四半期に比定される。



155号住居

1．灰褐色土　黒灰粘質土ブロックを少し、FP を僅かに、橙色粒子を僅かに含む。
2．灰褐色土　FP を少し、橙色粒子を僅かに含む。
3．灰褐色土　FP を僅かに含む。
4．灰褐色土　FP を僅かに、泥流シルト僅かに含む。
5．灰色土　泥流シルト少し、橙色粒子を少し含む。
6．灰褐色土　泥流シルト僅かに、橙色粒子を僅かに含む。
7．暗赤褐色土　橙色粒子を少し、泥流砂少し含む。
8．黒色土　炭化ブロック、橙色粒子を僅かに含む。
9．暗褐色土　砂質土、泥流砂を多く含む。

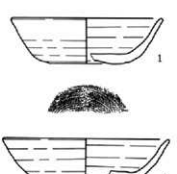
第461図　155号住居平面・断面図



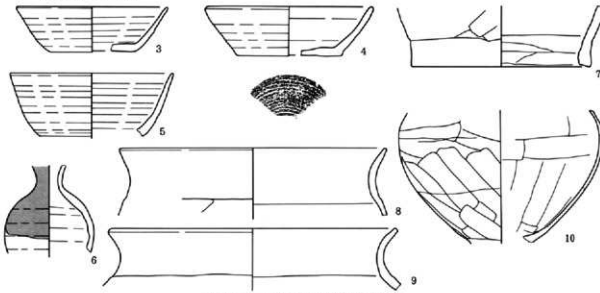
155号住居カマド

1．灰褐色土　FP 粒を僅かに、泥流シルト僅かに含む。
2．黄褐色土　泥流シルトが主体。
3．灰褐色土　泥流シルト少し含む。
4．黒色土　炭。
5．橙褐色土　焼土粒を少し、灰を少し含む。
6．橙褐色土　やや粘質土、橙色粒子を少しと灰を少し含む。
7．黒灰色土　灰、炭化物を少し含む。
8．橙褐色土　粘質土、泥流砂僅かに含む。

第462図　155号住居カマド図



第463図　155号住居出土遺物図（1）



第464図　155号住居出土遺物図(2)

156号住居

本住居は、調査区の西南部、86区Ⅰ－4・5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、155号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが後出である。

形態は、ほぼ長方形を呈する。残存状態は、確認面から床面まで残存高が低いためあまり良好な状態ではない。

規模は、長軸2.64m、短軸2.28m、北辺2.20m、東辺2.64m、南辺1.96m、西辺2.52mを測る。床面積は、5.33m²である。主軸方位は、N－111°－Eを指す。壁高は、北壁11.0cm、東壁8.0cm、南壁13.0cm、西壁14.0cm、平均11.5cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、重複する155号住居の埋没土と地山をそのまま踏み固めている。

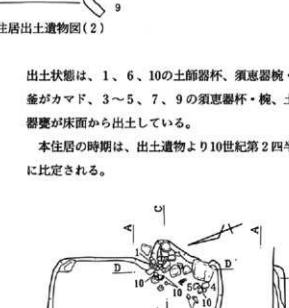
カマドは、東辺の南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖が流失している。規模は、全長54.0cm、幅90.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に30.0cm延びる。袖と燃焼部付近からは、補強で使用していた礫が多く検出されその一部は据えられたままの状態であった。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など161点が出土している。出土状態は、1、6、10の土師器杯、須恵器椀・羽釜がカマド、3～5、7、9の須恵器杯・椀、土師器甕が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第2四半期に比定される。



156号住居
1．灰褐色土　橙色粒子を僅かに含む。
2．灰褐色土　橙色粒子を少し、泥流砂を僅かに含む。
3．赤褐色土　橙色粒子を少し含む。

第465図　156号住居平面・断面図

156号住居カマド
1．黒色土　炭化物ブロックを含む。
2．暗褐色土　泥流砂を僅かに含む。
3．赤褐色土　焼土、泥流砂を僅かに含む。

L=144.80m

第466図　156号住居カマド図

第467図　156号住居出土遺物図

157号住居

本住居は、調査区の西南部、86区K－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、みられず単独で占地する。

形態は、東西に長い長方形を呈する。残存状態は、確認面から床面まで残存高が40cm前後もあり良好な状態である。

規模は、長軸4.00m、短軸3.40m、北辺3.76m、東辺3.40m、南辺3.68m、西辺3.12mを測る。床面積は、9.56m²である。主軸方位は、N－85°－Eを指す。壁高は、北壁43.0～44.0cm、東壁44.0cm、南壁35.0～41.0cm、西壁42.0～43.0cm、平均41.5cmである。

内部施設は、周溝を検出したが、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。周溝は、東辺のカマドの両側部分を除き壁下を全周巡る。規模は、幅8～18cm、深度2～6cmである。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

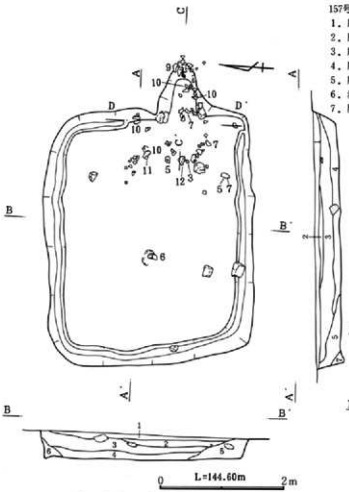
カマドは、東辺の中ほどよりやや南に構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖が流失している。規模は、全長90.0cm、幅90.0cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に63.0cm延びる。袖は壁面に食い込むように細長い角礫を据えて補強に使用している。燃焼部火床面には、灰が2～3cmほど堆積している。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

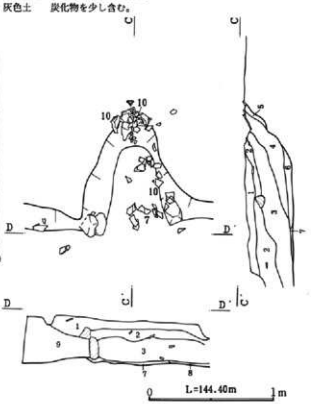
遺物は、土師器、須恵器など285点が出土している。出土状態は、カマド、カマド周辺にまとまった出土がみられ、2、7、9、10の土師器杯・甕、須恵器杯がカマド、12の土師器甕が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より9世紀第2四半期に比定される。

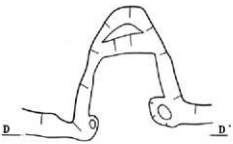


第468図　157号住居平面・断面図

157号住居
1．灰褐色土　橙色粒子を少し含む。
2．灰褐色土　橙色粒を少し、泥流砂を多く含む。
3．灰色土　橙色粒子を若干含む。
4．灰色土　橙色粒子を少し含む。
5．灰色土　橙色粒子を僅かに含む。
6．赤褐色土　橙色粒子を僅かに含む。
7．灰色土　炭化物を少し含む。



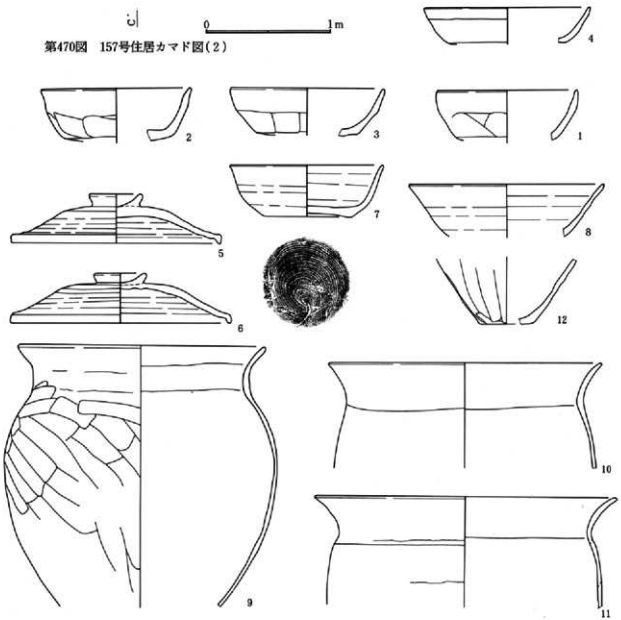
第469図　157号住居カマド図(1)



157号住居カマド
1．灰褐色土　FP を僅かに含む。
2．灰色土　　橙色粒子を僅かに含む。
3．灰褐色土　橙色粒子を少し含む。
4．灰褐色土　焼土粒を少し、炭化物を僅かに含む。
5．灰褐色土　粘質土、焼土粒を僅かに含む。
6．黒灰色土　灰主体、炭化物、焼土粒を少し含む。
7．黒色土　　炭、焼土粒を僅かに含む。
8．黄褐色土　炭を僅かに含む。
9．灰色土　　泥流砂を僅かに含む。

0　1m

第470図　157号住居カマド図(2)



第471図　157号住居出土遺物図

158号住居

本住居は、調査区の西より、86区M－10・11グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、83号住居・152号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが前出である。

形態は、方形を呈すると想定される。残存状態は、重複する83号住居と152号住居によって北西角と南辺側を欠く。

規模は、長軸2.24m、短軸2.08m、各辺は残存するところで北辺1.50m、東辺1.60m、南辺0.40m、西辺1.00mを測る。床面積は、残存範囲で3.17m²である。主軸方位は、N－95°－Eを指す。壁高は、北壁11.0～24.0cm、東壁25.0～27.0cm、西壁8.0cm、平均17.2cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

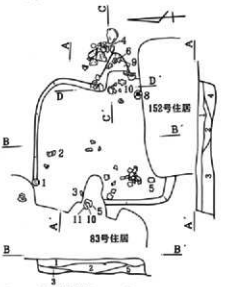
カマドは、東辺の南よりに構築されている。残存状態は、天井部が崩落し、袖が流失している。規模は、全長52.5cm、幅52.5cm、燃焼部の一部から煙道にかけては壁外に34.5cm延びる。袖と燃焼部付近の掘り方には φ15cm前後の小孔がみられ、礫が数個検出されていることから補強に多くの礫が使用されたと想定される。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

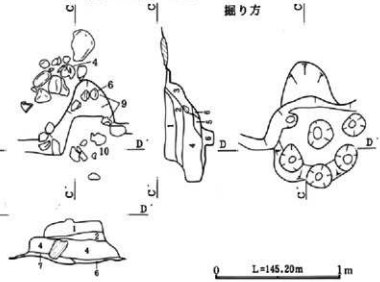
遺物は、土師器、須恵器など281点が出土している。出土状態は、カマドとその周辺、西辺際にまとまった出土がみられ、4～6、9、10の須恵器杯・椀がカマドから出土している。

本住居の時期は、出土遺物より9世紀末から10世紀第1四半期に比定される。



158号住居
1．黒灰色土　橙色粒子を僅かと炭化物を僅かに含む。
2．灰褐色土　橙色粒子を僅かと泥流砂を少し含む。
3．橙褐色土　橙色粒子を僅かに含む。
4．灰褐色土　橙色粒子を僅かに含む。
5．灰色土　橙色粒子を僅かに含む。

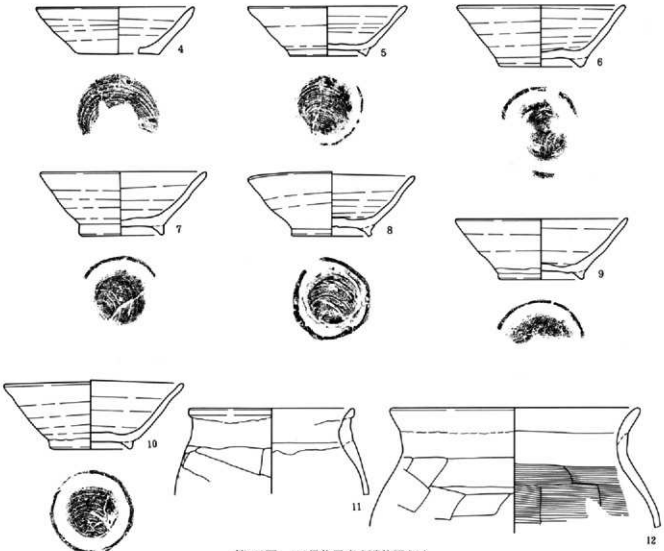
第472図　158号住居平面・断面図



158号住居カマド
1．灰褐色土　FP、灰、橙色粒子、炭化物を僅かに含む。
2．黒灰色土　FP、灰を僅かと炭化物を多く含む。
3．灰褐色土　橙色粒子を僅かと泥流砂を少し含む。
4．灰褐色土　橙色粒子を僅かと炭化物を多く含む。
5．黒灰色土　胚珠帯、炭化物を少し、焼土粒を僅かに含む。
6．黒色土　焼土粒を少しと炭化物を多く含む。
7．暗褐色土　泥流砂を少し含む。

第473図　158号住居カマド図

第474図　158号住居出土遺物図（1）



第475図　158号住居出土遺物図（2）

159号住居

本住居は、調査区の中央部、86区C・D－6グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、143号住居、138号土坑と重複する。新旧関係は、本住居のほうが前出である。

形態は、ほぼ長方形を呈する。残存状態は、重複する143号住居によって北東部分を欠き、確認面から床面までの残存高が僅かなため不良な状態である。

規模は、長軸4.04m、短軸3.28mで南辺3.08m、西辺3.68mを測る。床面積は、残存範囲で8.38m²である。主軸方位は、N－2°－Eを指す。壁高は、北壁6.5～10.5cm、東壁7.5cm、南壁2.5～7.5cm、西壁2.5～3.5cm、平均6.0cmである。

内部施設は、柱穴、周溝、貯蔵穴とも確認されなかった。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

カマドは、残存範囲では確認されなかった。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器などが出土しているが大部分は須恵器である。出土状態は、大部分が床面よりやや上位の埋没土中からの出土であるが2、4、9、19の須恵器椀・甕が床面から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より10世紀第1四半期に比定される。

159号住居

1．黄褐色土　炭化物を多量に含む。
2．褐色土　φ0.1～0.3cmの砂礫、1cm程の炭化物片を含む。
3．褐色土　φ0.5～0.8cmの炭化物片、φ0.5cmの橙色粒、φ0.1～0.3cmの砂礫を多く含む。
4．暗褐色土　炭化物片を多量に含む。
5．黒褐色土　φ0.1～0.2cmの橙色土粒、φ0.1～0.3cmの砂礫、φ5cmの黄色砂ブロックを含む。
6．褐色土　φ0.3～0.5cmの砂礫を含む。

143号住居

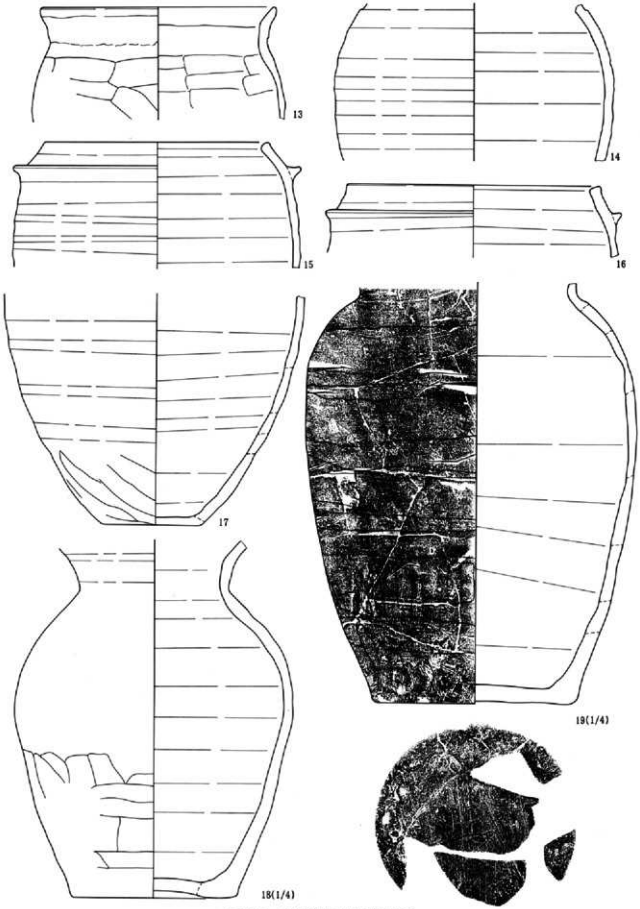
138号土坑

B　B'　A　A'

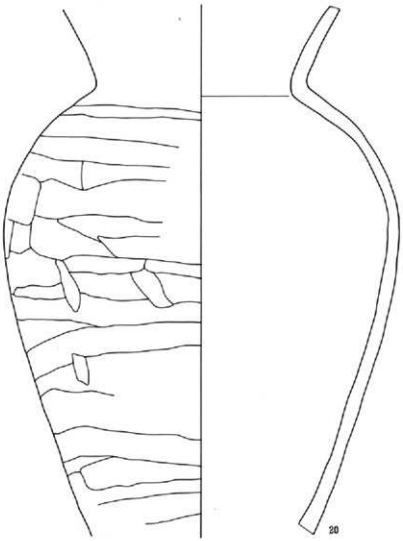
L=144.30m　0　2m

第476図　159号住居平面・断面図

第477図　159号住居出土遺物図(1)



第478図　159号住居出土遺物図（２）



第479図　159号住居出土遺物図(3)

160号住居

本住居は、調査区の北東部、86区A－18グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、79号住居と重複する。新旧関係は、本住居のほうが前出である。

形態は、歪んだ四角形または台形状を呈すると想定される。残存状態は、重複する79号住居によって3分の2程度を欠く。

規模は、長軸2.88m、短軸1.48m＋α、南辺2.32m、東辺、西辺は残存するところでは1.00m、1.70mを測る。床面積は、残存範囲で2.74m²である。主軸方位は、N－88°－Eを指す。壁高は、東壁17.0cm、南壁4.0～16.0cm、西壁7.0～10.0cm、平均12cmである。

内部施設は、貯蔵穴を検出したが、柱穴、周溝は確認されなかった。貯蔵穴は、東南角の壁下に位置し、形態は楕円形に近い。規模は径82×45cm、深度10cmである。床面の状態は、地山をそのまま踏み固めている。

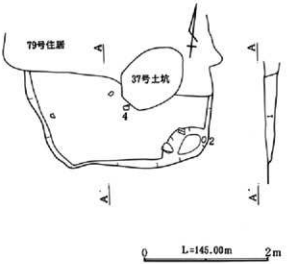
カマドは、残存範囲では検出されなかった。

掘り方は、確認できなかった。

埋没状態は、土層観察断面では1層しか確認できず埋没状態の判断はできない。

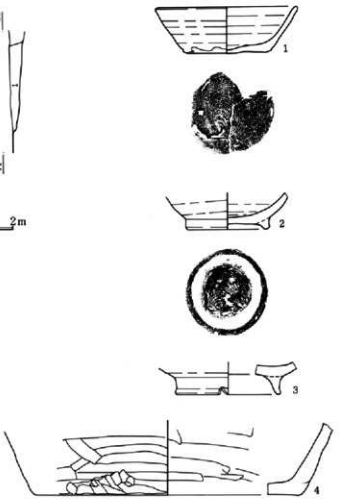
遺物は、土師器、須恵器などが出土している。出土状態は、2の須恵器椀が貯蔵穴から出土している。

本住居の時期は、出土遺物より9世紀第2四半期に比定される。



160号住居
1．にぶい黄褐色土　φ 1～5㎜の砂礫を少量含む。

第480図　160号住居平面・断面図



第481図　160号住居出土遺物図

3．建　物

1号建物

本建物は、調査区の北部、86区Ｊ・Ｋ－15・16グリッドに位置する。遺構は、Ⅲ（As－Ｂ）層上面で確認した。他遺構との重複関係は、みられず単独で占地する。遺構の東側に位置する段差は、Ⅲ（As－Ｂ）層下から水田が検出されることからⅢ（As－Ｂ）層下水田が開田された時期には形成されたと考えられ本建物のほうが後出であると考えられる。

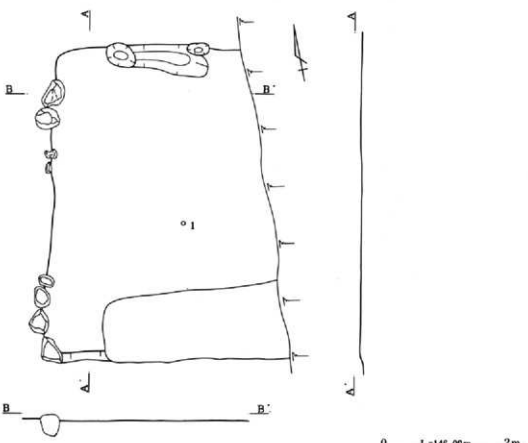
形態は、長方形または方形を呈すると想定される。残存状態は、東側が不明確で南辺の大半を現代の攪乱で欠き、現在の地表面からも浅い位置にあるため良い状態ではない。

規模は、南北4.90m、東西3.43m＋α、西辺4.87m、北辺と南辺は残存するところで2.95m、1.04mを測る。西辺は、ほぼ南北方向に位置する。

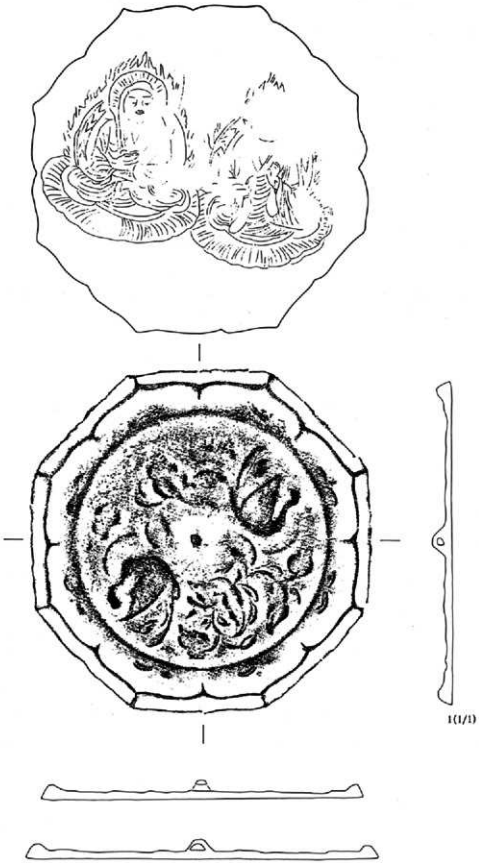
建物は、西辺にφ20～50cmの礫が部分的ではあるが一直線上に配置され、北辺からは長さ1.60m、幅0.3～0.5m、深度３～４cmの溝状の落ち込みが検出された。この北辺の溝状の落ち込みは、深度や一部円形の落ち込みを呈することなどから本来は礫が据えられていたのが除かれた跡と考えられる。建物内部は、Ⅲ（As－Ｂ）層が周囲に比べて硬質化していた。

出土遺物は、中ほどでⅢ層にやや入り込んだ状態で八稜鏡が１枚出土している。

本建物は、周囲に礫が配置されている点や出土した八稜鏡などから堂宇と想定される。



第482図　１号建物平面・断面図



第483図　1号建物出土遺物図

2号建物

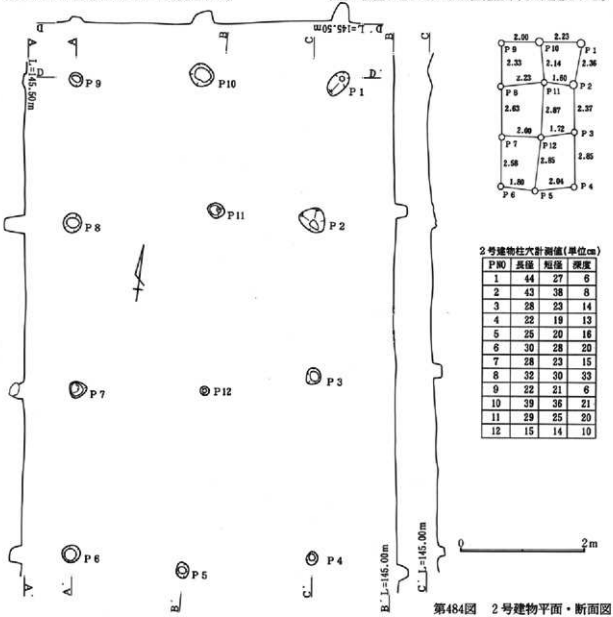
本建物は、調査区の中央付近、86区E・F－12～14グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、58号住居・86号住居、3号建物と重複する。新旧関係は、本建物のほうが住居より後出である。3号建物との新旧関係は、遺構確認時には明らかではないが3号建物と重複する38号土坑が出土遺物から10世紀前半代に比定され3号建物より後出であることから本建物のほうが後出である。

形態は、北西角は直角であるが、北東角80°、東南角96°、南西角98°とやや歪んだ長方形を呈す、梁行3間、桁行2間の側柱で床束柱をもつ建物である。また、北辺、西辺は直線上に柱穴が配置されているが東辺はP2で南辺はP5でやや角度をもつ。

規模は、梁行3間（P10－P5）7.82m、桁行2間（P2－P5、P3－P7）3.84m、東梁行（P1－P4）7.56m、西梁行（P6－P9）7.48m、北桁行（P9－P1）4.20m、南桁行（P4－P6）3.80mを測る。建物柱内部の面積は、31.72m²である。棟軸は、N－3°－Wを指す。柱穴は、径14～43cm、深度6～33cmで柱痕は検出できなかったが、側柱P7と床束柱P12には、底面に小礫が置かれている。

遺物は、本建物からは出土していない。

本建物の時期は、出土遺物がないため不明確であるが、重複する住居がともに10世紀代第3四半期に比定され本建物がⅢ（As－B）層下水田耕作土より下層に位置することから11世紀前半代に比定される。



2号建物柱穴計測値（単位cm）

PNO	長径	短径	深度
1	44	27	6
2	43	38	8
3	28	23	14
4	22	19	13
5	25	20	16
6	30	28	20
7	28	23	15
8	32	30	33
9	22	21	6
10	39	36	21
11	29	25	20
12	15	14	10

第484図　2号建物平面・断面図

3号建物

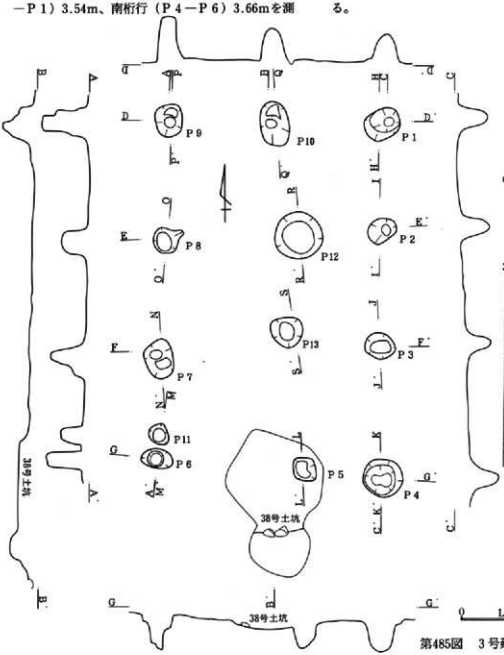
本建物は、調査区中央付近、86区E・F—11・12グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、2号建物、38号土坑と重複する。新旧関係は、本建物のほうが前出である。

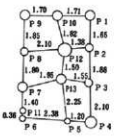
形態は、ほぼ長方形を呈す、梁行3間、桁行2間の側柱で床束柱をもつ建物である。また、柱穴P6の西側には、束柱P13が位置している。残存状態は、重複する38号土坑によってP5の上部を欠く。

規模は、梁行3間（P5—P10）5.52m、桁行2間（P2—P8）3.72m、東梁行（P1—P4）5.58m、西梁行（P6—P9）5.28m、北桁行（P9—P1）3.54m、南桁行（P4—P6）3.66mを測る。建物柱内部の面積は、39.60㎡である。棟軸は、N—24°—Wを指す。柱穴は、P1からP10までの側柱が径45～72cm、深度19～53cmであるが、P12、P13の床束柱は、径76cm、55cm、深度10cm、14cmと径は側柱とそれほど変わらないが深度は浅い。柱痕は、検出されなかったが、側柱穴P1、2、7～9では土層観察断面から柱を抜き取った痕跡が窺える。

遺物は、本建物からは出土していない。

本建物の時期は、出土遺物がないため不明確であるが、重複する38号土坑が10世紀前半代に比定されることから9世紀から10世紀前半代の間に比定される。

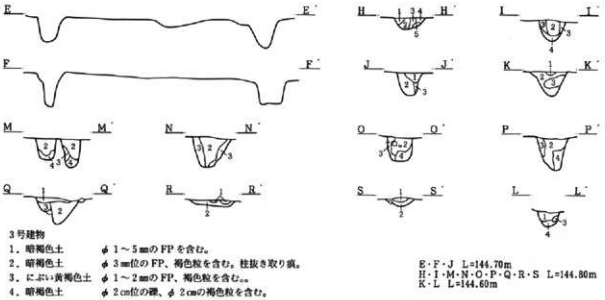




3号建物柱穴計測値（単位cm）

PNO	長径	短径	深度
1	60	46	19
2	48	43	25
3	50	43	38
4	64	62	40
5	45	40	25
6	50	30	46
7	65	47	47
8	53	44	40
9	52	47	53
10	72	46	43
11	34	34	32
12	76	75	10
13	55	50	14

第485図　3号建物平面・断面図



3号建物
1．暗褐色土　φ 1～5mmのFPを含む。
2．暗褐色土　φ 3mm位のFP、褐色粒を含む。柱抜き取り痕。
3．におい黄褐色土　φ 1～2mmのFP、褐色粒を含む。。
4．暗褐色土　φ 2cm位の礫、φ 2cmの褐色粒を含む。
5．暗褐色土　φ 1cmの礫を僅かに含む。

第486図　3号建物断面図

4号建物

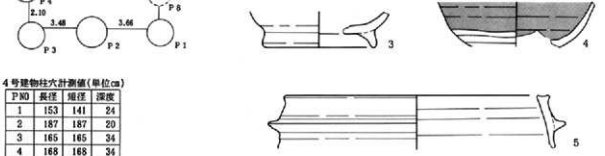
本建物は、調査区の北部、F・G－15～17グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、56号住居、35号土坑・36号土坑と重複する。新旧関係は、本建物のほうが前出である。

形態は、やや歪んだ長方形を呈す梁行2間、桁行2間の側柱の建物である。残存状態は、重複する住居と土坑によってP6の北半とP7、P8を欠く。

規模は、梁行2間(P1－P3)7.20m、桁行2間(P2－P6)4.50m、南梁行(P1－P3)7.14m、北梁行(P5－P7)7.27m、西桁行(P3－P5)4.60m、東桁行(P7－P1)推定4.44mを測る。建物柱内部の面積は、65.43m²である。棟軸は、N－86°－Eを指す。柱穴は、径92～187cm、深度20～50cmと規模が大きい。柱痕は、すべての柱穴で確認されなかった。

遺物は、黒色土器椀、須恵器杯・椀・羽釜、灰釉陶器椀が出土している。

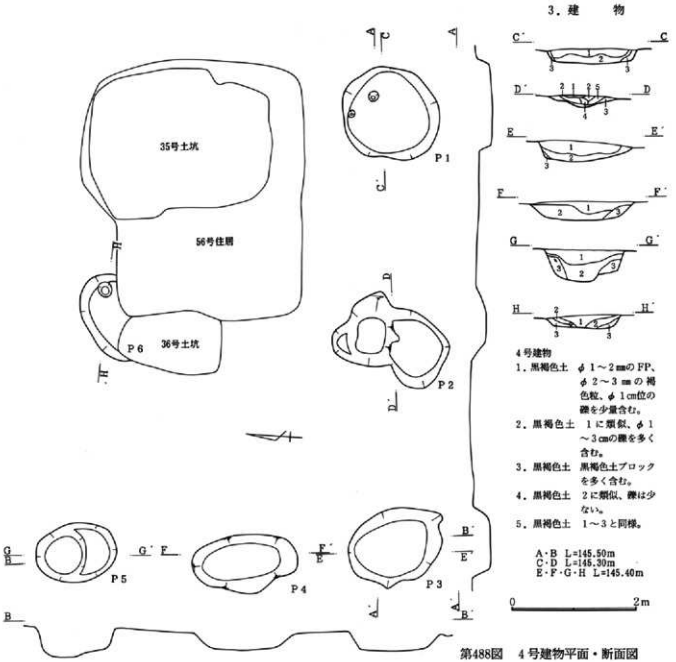
本建物の時期は、出土遺物から10世紀第3四半期に比定される。



4号建物柱穴計測値(単位cm)

PNO	長径	短径	深度
1	153	141	24
2	187	187	20
3	165	165	34
4	168	168	34
5	128	128	50
6	133	133	24
7	－	－	－
8	－	－	－

第487図　4号建物出土遺物図



第488図　4号建物平面・断面図

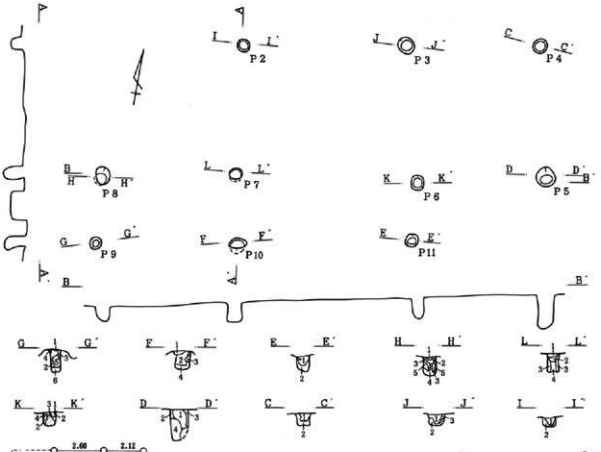
5号建物

本建物は、調査区の中央やや西、Ⅰ～K－10・11グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、みられず単独で占地する。形態は、北西角と東南角の柱穴を現在の用水路などで欠くため不明確な点があるが長方形を呈す梁行3間、桁行2間の側柱で床束柱をもつ建物か桁行1間で庇付の側柱の建物と想定されるが、桁行の間隔からみると庇付の建物の可能性が高い。

規模は、梁行3間（P5－P8）7.08m、梁行1間（P4－P5）2.10m、庇間隔（P8－P9）1.00mを測り、全体としては約7.0m×3.0m程度であると想定される。棟軸は、N－82°－Eを指す。柱穴は、側柱径20～31cm、深度16～52cm、庇柱21～30cm、深度27～38cmで柱痕は検出できなかったが一部の土層観察断面で抜き取り痕が観察された。

遺物は、本建物からは出土していない。

本建物の時期は、出土遺物がないため明確でなく、重複する遺構も存在しないことから下芝五反田遺跡での集落が存在した8世紀後半から11世紀前半代の間に比定される。



5号建物柱穴計測値(単位cm)

P NO	長径	短径	深度	P NO	長径	短径	深度
1	−	−	−	7	20	20	30
2	22	22	16	8	30	24	30
3	29	26	16	9	21	20	38
4	25	25	22	10	30	18	30
5	32	31	52	11	25	21	27
6	25	23	23	12	−	−	−

5号建物

1．黒褐色土　砂質土、As-Bか。
2．暗褐色土　砂質土、ローム状粒を僅かに含む。
3．黒褐色土　1に類似。
4．茶褐色土　やや粘性土。
5．暗褐色土　2に類似。
6．灰褐色土　砂質土。

第489図　5号建物平面・断面図

6号建物

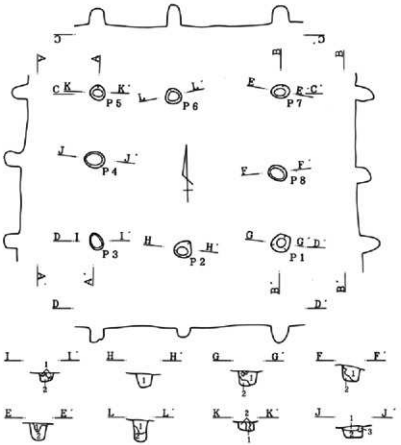
本建物は、調査区の南西部、M・N－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、128号土坑と重複する。新旧関係は、128号土坑と柱穴との直接の重複関係がないため判断ができない。

形態は、梁行2間、桁行2間のほぼ長方形を呈す側柱の建物である。

規模は、梁行2間2.94m、桁行2間2.40m、東梁行（P 1－P 3）2.98m、西梁行（P 5－P 7）2.97m、北桁行（P 7－P 1）2.40m、南桁行（P 3－P 5）2.36mを測る。建物柱内部の面積は、7.14㎡である。棟軸は、N－73°－Eを指す。柱穴は、径22～35cm、深度14～35cmで柱痕は検出されず、抜き取り痕も明確でなかった。

遺物は、本建物からは出土していない。

本建物の時期は、出土遺物がないため明確でなく、重複する128号土坑からも遺物が出土していないことから下芝五反田遺跡での集落が存在した8世紀後半から11世紀前半代の間に比定される。



6号建物柱穴計測値（単位cm）

PNO	長径	短径	深度
1	35	27	23
2	30	27	23
3	30	20	14
4	32	27	18
5	24	23	14
6	28	25	35
7	30	22	28
8	30	25	26

6号建物

1．橙褐色土　橙色粒を少し含む。
2．灰褐色土　橙色粒を若干含む。
3．灰褐色土　橙色粒を僅かに含む。

第490図　6号建物平面・断面図

4．井　戸

1号井戸

本井戸は、調査区の北東部、86区A－12グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、93号住居と重複する。新旧関係は、本井戸のほうが後出であると考えられる。

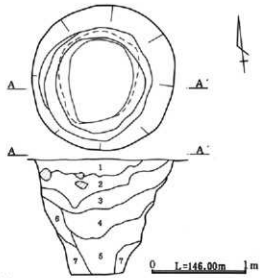
形態は、平面がほぼ円形で断面は細長い逆台形状を呈す。規模は、確認面で径1.57×1.53m、底面は径0.90×0.74m、深度1.22mを測る。

埋没状態は、土層観察断面では自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など21点が出土しているが小片のため実測掲載できるものはなかった。

また、本井戸は、湧水によるアグリなども観察できないことから掘削途中で断念した可能性もある。

本井戸の時期は、出土遺物から判断が難しいため明確にできないが埋没土中にAs－Bが観察できることからAs－B降下後に掘削されたと考えられる。



1号井戸
1．黒褐色土　As-Bが多量に混入、黄褐色粒が少量混入する。
2．暗褐色土　As-Bが多量に混入、φ5～20cmの礫、褐色土ブロックを含む。
3．黒褐色土　As-BとAs-B灰が混入。
4．黒褐色土　As-Bが多量に混入する。
5．黒褐色土　φ0.3～1cmの礫が少量、黄褐色粒を多量に含む。
6．黒褐色土　褐色粒ブロックが少量、φ1～5cmの小礫を少量含む。
7．暗褐色土　φ0.1～1cmの小礫を多量、黄褐色土を少量含む。

第491図　1号井戸平面・断面図

2号井戸

本井戸は、調査区の北東部、85区T－17・18、86区A－17・18グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、10号溝と重複する。新旧関係は、本井戸のほうが後出であると考えられる。

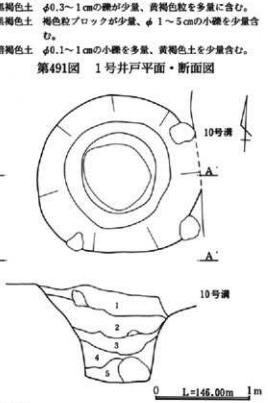
形態は、平面が楕円形で断面は細長い逆台形状を呈す。規模は、確認面で径1.73×1.66m、底面は径0.72×0.64m、深度1.02mを測る。

埋没状態は、土層観察断面では自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など21点が出土しているが小片のため実測掲載できるものはなかった。

また、本井戸は、湧水によるアグリなども観察できないことから掘削途中で断念した可能性もある。

本井戸の時期は、出土遺物から判断が難しいため明確にできないが埋没土中にAs－Bが観察できることからAs－B降下後に掘削されたと考えられる。



2号井戸
1．黒褐色土　As-Bが多量に混入する。φ0.5～1cmの小礫を多く含む。
2．暗褐色土　φ0.5～1cmの小礫を多く含む。
3．黒褐色土　φ0.5～1cmの小礫、褐色粒を多く含む。
4．暗褐色土　φ0.5～15cmの小礫を多く含む。
5．黒褐色土　φ0.5～1cmの小礫を多く含む。

第492図　2号井戸平面・断面図

3号井戸

本井戸は、調査区の北東部、85区T－18グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、10号溝と重複する。新旧関係は、本井戸のほうが前出であると考えられる。

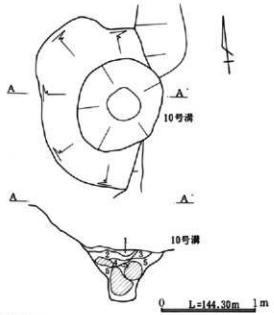
形態は、重複する10号溝で上部を欠くため明確ではないが平面が楕円形で断面は細長い逆台形状を呈す。規模は、確認面で径1.63×1.30m＋α、底面は径0.38×0.35m、深度は確認面から1.10mを測る。

埋没状態は、土層観察断面では下半に φ30～150cm大の礫が見られることから下半は人為的な埋め戻しで上半は自然埋没であると考えられる。

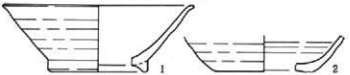
遺物は、土師器、須恵器など19点が出土している。また、下半からは、須恵器椀が出土している。

また、本井戸は、湧水によるアグリなども観察できないことから掘削途中で断念した可能性もある。

本井戸の時期は、出土遺物から10世紀代に比定される。



3号井戸
1．暗褐色土　φ0.5～2cmの小礫を多く含む。
2．黄褐色土　泥流層土。
3．黒褐色土　黄褐色ブロックを多く含む。
4．黒褐色土　黄褐色ブロック、φ0.5～2cmの小礫を多く含む。
5．黒褐色土　φ0.5～2cmの小礫を多く含む。



第493図　3号井戸平面・断面図・出土遺物図

4号井戸

本井戸は、調査区の北東部、86区N－10・11グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、83号住居と重複する。新旧関係は、本井戸のほうが後出である。

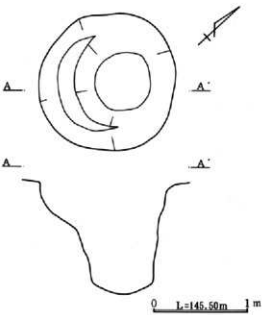
形態は、平面が円形で断面は細長い逆台形状を呈す。規模は、確認面で径1.48m、底面は径0.58m、深度1.17mを測る。

埋没状態は、土層観察断面では自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など44点が出土しているが小片のため実測掲載できるものはなかった。

また、本井戸は、湧水によるアグリなども観察できないことから掘削途中で断念した可能性もある。

本井戸の時期は、出土遺物から判断が難しいため明確にできないが埋没土中にAs－Bが観察できることからAs－B降下後に掘削されたと考えられる。



第494図　4号井戸平面・断面図

5．土　坑

土坑は、位置、形態、重複関係、規模、時期などについては第3表に一覧で掲載してある。なお、特異なものや遺物が多く出土しているなど特徴的な土坑については下記に記載してある。

8号土坑

本土坑の残存状態は、調査の手順の関係で南側を欠く。底面は、ほぼ平坦であるが中程に浅い落ち込みをもつ。この落ち込みには、φ10～30cm大の礫が15個ほど検出された。北東角よりに径40cm、深度が13cmの小規模なピットを検出した。

遺物は、須恵器が埋没土中から6点出土しているだけである。

本土坑の時期は、出土遺物からは判断ができないが、重複する11号溝との関係から14世紀以降と考えられる。

9号土坑

本土坑の残存状態は、確認面から底面までの残存高が50cmほどあり良好な状態である。底面は、ほぼ平坦である。壁面は、30°～40°ほどの緩やかな傾斜で北側から小規模なピットを3か所検出した。規模は、P1が径40cm、深度25cm、P2が径32cm、深度28cm、P3が径35cm、深度18cmである。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など751点が出土した。出土状態は、大部分が埋没土中からであるが17、21の須恵器椀、灰釉陶器椀が底面から出土している。

本土坑の時期は、出土遺物から10世紀第3四半期に比定される。

15号土坑

本土坑は、径1m前後の土坑が重複するような状態で検出されたが、土層観察断面の観察では重複関係は認められない。このような状態から各土坑の掘削時期は若干の前後はあるが埋没段階まで開口していたと考えられる。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など166点が出土した。出土状態は、大部分が埋没土中からである。

本土坑の時期は、出土遺物から10世紀代後半に比定される。

21号土坑

本土坑は、小規模な住居のような形態を呈するが底面の状態が住居床面のような硬化面を呈していないことから土坑とした。確認面から底面までの残存高が低いため良い状態でない。

遺物は、土師器、須恵器など15点が出土している。出土状態は、残存高がほとんどないため大部分が底面からの出土である。

本土坑の時期は、出土遺物から10世紀第2四半期に比定される。

26号土坑

本土坑は、小規模な住居のような形態を呈するが底面の状態が住居床面のような硬化面を呈していないことから土坑とした。確認面から底面までの残存高が低いため良い状態でない。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品瓦など286点が出土している。出土状態は、大部分が埋没土中からの出土である。

本土坑の時期は、出土遺物が8世紀代から10世紀代にかけてと幅広い時期であることから判断が難しいが重複する住居の時期から9世紀第4四半期から10世紀第1四半期に比定される。

35号土坑

本土坑は、小規模な住居のような形態を呈するが底面の状態が住居床面のような硬化面を呈していないことから土坑とした。ただし住居掘削途中で放棄された可能性はある。残存状態は、確認面から底面までの残存高が40cmほどあるため比較的良好な状態である。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器など198点が出土している。出土状態は、大部分が埋没土中からの出土である。

本土坑の時期は、出土遺物から10世紀代後半に比定される。

41号土坑

本土坑の残存状態は、確認面から底面まで残存高が2～5cmと低いため良い状態ではない。

底面は、ほぼ平坦で4基の小規模なピットが検出された。規模は、P1が径27cm、深度26cm、P2が径42×30cm、深度6cm、P3が径80×57cm、深度7cm、P4が径55×47cm、深度6cmである。

遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器など82点が出土している。

本土坑の時期は、出土遺物から10世紀第1四半期に比定される。

43号土坑

本土坑の残存状態は、確認面から底面までの残存高が20cmほどあるため比較的良好な状態である。

底面は、東半が10cmほど高いテラス状を呈している。底面の状態は、東半・西半ともほぼ平坦である。

遺物は、土師器、須恵器が8点と少ない出土であるが完形、2分の1以上の残存したものが4点ある。

本土坑の時期は、出土遺物から10世紀第1四半期に比定される。

50号土坑

本土坑の残存状態は、確認面から床面まで残存高が低いため良い状態ではない。底面は、平坦である。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、石製品など37点が出土している。出土遺物は、須恵器椀・羽釜、灰釉陶器皿、石製品砥石などが残存率も良い状態でその中には判読不明ではあるが墨書土器もみられる。

本土坑の時期は、出土遺物から10世紀第3四半期に比定される。

51号土坑

本土坑の残存状態は、確認面から底面まで残存高が低いため良い状態ではない。

底面は、平坦である。北辺で小規模なピットを1基検出した。規模は、径18×10cm、深度20cmである。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など30点が出土している。

本土坑の時期は、出土遺物から10世紀第2四半期に比定される。

74号土坑

本土坑の残存状態は、確認面から底面までの残存高が35cmほどあり比較的良好な状態である。

底面は、ほぼ平坦であるが東側が3～4cmほど高い。壁面は、ほぼ垂直である。

埋没状態は、土層観察断面では斜めの堆積が観察できるが自然埋没であるとは考えにくい。

遺物は、土師器、須恵器、鉄器釘などが10点出土している。

本土坑の性格は、その形態や出土遺物に鉄器釘がみられること、埋没状態などから木棺で埋葬された土壙墓と想定される。

本土坑の時期は、出土遺物から10世紀代前半に比定される。

129号土坑

本土坑の残存状態は、確認面から底面まで残存高が40cmほどあり比較的良好な状態である。

底面は、ほぼ平坦で底面よりやや上位にはφ10～40cm大の多量の礫を検出した。その状態から礫は、廃棄された可能性が高い。

遺物は、土師器、須恵器など14点が出土している。

136号土坑

本土坑は、断面が浅いすり鉢状を呈しており明確な底部は存在しない。土坑の北半にはφ10～50cm大の多量の礫が検出した。

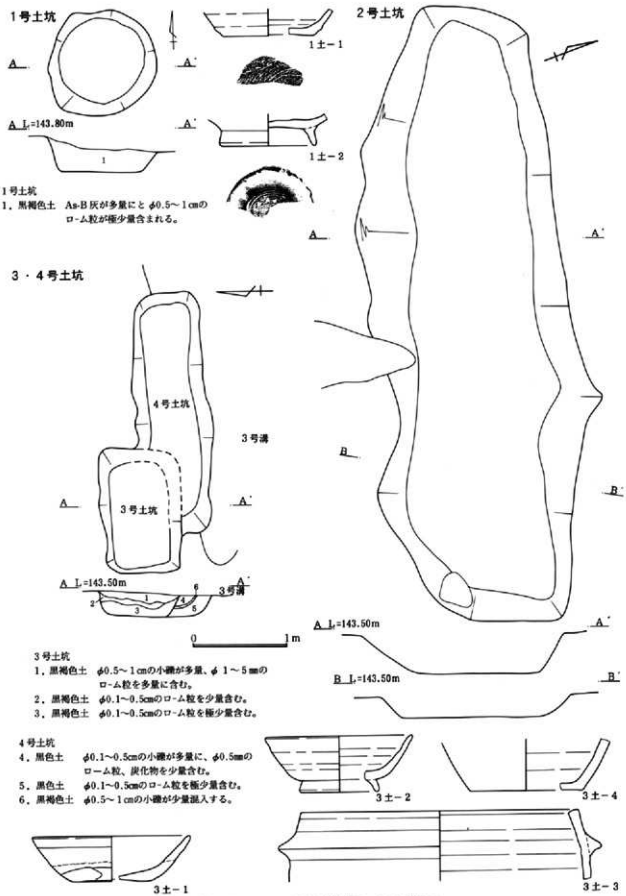
埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器など35点が出土しているが、本土坑の時期や性格を明らかにできるものは出土していない。

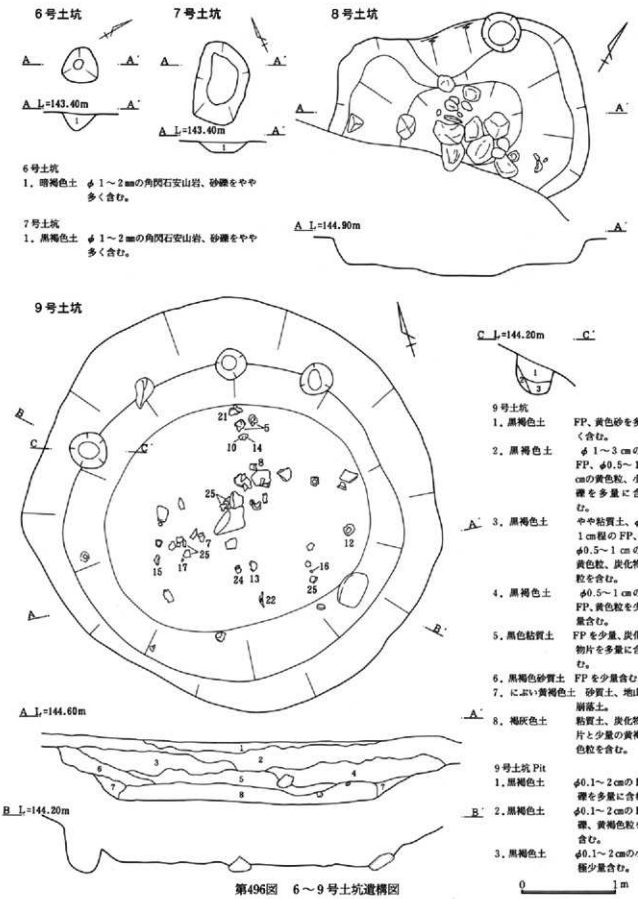
第3表　土坑表

土坑No	位置	形態	新	旧	長径(m)	短径(m)	深度(m)	備考
1号土坑	76区C-18	楕円形			11.5	1.08	0.36	9C.後半
2号土坑	76区B-16,C-16・17	長方形			6.52	2.13	0.42	
3号土坑	76区B-17	(長方形)		4号土坑	1.3	0.78	0.25	10C.代
4号土坑	76区B-17	(長方形)		3号溝	2.56	0.82	0.23	
5号土坑								欠
6号土坑	76区A-16	楕円形			0.37	0.36	0.19	
7号土坑	76区A-16、B-16	楕円形			0.85	0.54	0.11	
8号土坑	86区T-15	(楕円形)			2.72	(1.47)	0.39	14C.以降
9号土坑	86区C-4・5、D-4・5	楕円形			4.25	4.07	0.56	10C.Ⅲ
10号土坑								欠
11号土坑								140号住居
12号土坑								141号住居
13号土坑	85区T-15	楕円形			1.28	1.16	0.22	
14号土坑								欠
15号土坑	86区B-7	楕円形			3.87	2.8	0.47	
15号土坑-1	86区B-7	楕円形			1.07	0.88	0.31	10C.後半
15号土坑-2	86区B-7	楕円形			0.97	0.84	0.3	
15号土坑-3	86区B-7	楕円形		15号土坑-4	1.24	1.06	0.46	
15号土坑-4	86区B-7	(方形)	15号土坑-3	15号土坑-5	1.47	(0.7)	0.27	
15号土坑-5	86区B-7	(楕円形)	15号土坑-4		1.42	(1.02)	0.27	
15号土坑-6	86区B-7	楕円形			1.12	0.96		
16号土坑	86区A-4		17号土坑、172号土坑		(1.55)	(0.75)	0.31	
17号土坑	86区A-4	(楕円形)	17号住居	16号住居、16号土坑	(1.14)	(1.52)	0.31	
18号土坑								欠
19号土坑	86区G-3・4	楕円形		12号住居	0.79	0.73	0.12	10C.代
20号土坑								142号住居
21号土坑	86区F-4、G-4	長方形	19号住居?		2.23	2.02	0.07	10C.Ⅱ
22号土坑								欠
23号土坑	86区C-6	長方形?		143号住居	1.58	1.16	0.22	
24号土坑	86区G-11	楕円形			0.9	0.85	0.26	
25号土坑	86区G-4	楕円形		20号住居	0.87	0.8	0.23	10C.後半
26号土坑	85区T-10・11、86区A-10	方形	42号住居	46号住居	3.03	2.76	0.2	9C.Ⅳ～10C.Ⅱ
27号土坑	86区B-7・8、C-7・8	楕円形			1.33	1.1	0.49	
28号土坑	86区B-7	方形			0.48	0.48	0.15	
29号土坑	86区B-8	楕円形			0.98	0.74	0.13	10C.前半
30号土坑	86区B-8	楕円形			1.13	1.06	0.16	
31号土坑	86区C-8	楕円形			0.76	0.7	0.34	10C.前半
32号土坑								139号住居
33号土坑	86区B-10	楕円形		44号住居?	1.24	1.09	0.31	9C.後半
34号土坑								欠
35号土坑	86区F-16・17	長方形		56号住居	3.04	2.2	0.43	10C.後半
36号土坑	86区F-16、G-17	長方形	56号住居		1.76	0.86	0.34	
37号土坑								160号住居
38号土坑	86区E-11	楕円形			0.95	(0.67)	0.25	9C.後半
39号土坑								欠
40号土坑	86区C-10	楕円形			2.3	0.95	0.33	10C.前半
41号土坑	86区C-9・10、D-9	楕円形			3.09	2.08	0.12	10C.Ⅰ
42号土坑	86区C-9	楕円形			0.89	0.73	0.16	
43号土坑	86区C-9	楕円形			1.03	0.85	0.25	
44号土坑	86区C-10	楕円形			1.08	1.03	0.44	10C.前半
45号土坑	86区D-11・12	楕円形			2.04	1.69	0.49	9C.後半
46号土坑	86区B-12、C-12	楕円形			1.15	1.05	0.32	
47号土坑	86区B-13	楕円形			1.47	1.12	0.19	9C.前半
48号土坑	86区D-12・13	楕円形			0.98	0.84	0.31	10C.前半
49号土坑	86区H-8	楕円形			1.06	0.98	0.25	9C.後半
50号土坑	86区D-10、E-10	楕円形			1.52	1.37	0.14	10C.Ⅲ
51号土坑	86区E-11、F-11	楕円形			1.3	1.1	0.09	10C.Ⅱ
52号土坑	86区E-13	楕円形			0.63	0.5	0.29	
53号土坑	86区D-11・12	楕円形			1.4	1.09	0.22	
54号土坑	86区D-12	楕円形			1.05	0.97	0.3	
55号土坑	86区C-11・12	(楕円形)	152号土坑		1.42	(0.53)	0.31	10C.前半
56号土坑	86区D-12	楕円形			0.88	0.54	0.35	
57号土坑	86区D-12	楕円形			0.83	0.57	0.27	
58号土坑	86区D-13、E-13	楕円形			1.25	1.23	0.16	
59号土坑	86区F-17・18	楕円形			1.35	0.77	0.2	
60号土坑	86区E-17、F-17	楕円形	61号土坑		1.55	(8.3)	0.22	10C.前半
61号土坑	86区F-17	?			0.96	0.77	0.32	
62号土坑	86区E-17	楕円形			1.2	1.12	0.32	
63号土坑	86区E-16	楕円形			0.55	0.49	0.19	
64号土坑	86区E-16	楕円形			0.94	0.85	0.2	

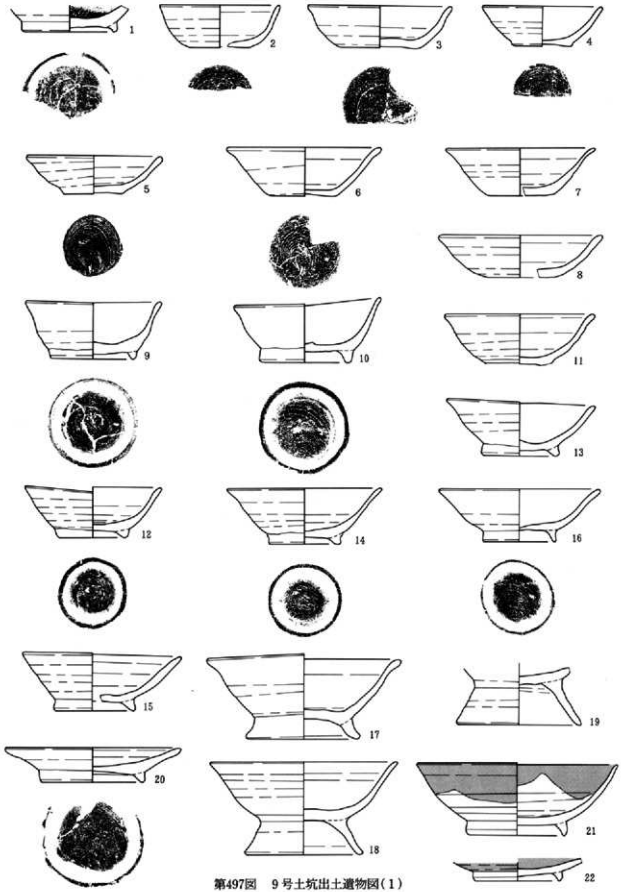
土坑No.	位　　置	形　態	新	旧	長径(m)	短径(m)	深度(m)	備　　考
65号土坑	86区E-15	楕円形			1.37	0.97	0.29	
66号土坑	86区F-15	楕円形			1.57	0.95	0.21	10C.前半
67号土坑	86区F-15	楕円形			1.17	0.68	0.31	
68号土坑	86区F-17	方　形			1.02	0.82	0.19	
69号土坑	86区N-16	楕円形			1.11	0.98	0.35	
70号土坑	86区M-16、N-16	楕円形			2.1	1.42	0.36	
71号土坑	86区M-16•17	(楕円形)			0.96	(0.76)	0.34	
72号土坑	86区N-16	楕円形			1.12	0.84	0.33	
73号土坑	86区M-15•16、N-15•16	楕円形			1.51	1.17	0.41	10C.後半
74号土坑	86区L-16	長方形			1.82	0.63	0.35	10C.前半
75号土坑	86区M-15	楕円形			1.62	1.32	0.46	
76号土坑	86区M-15	楕円形			1.03	1.0	0.3	
77号土坑	86区M-14•15、N-14•15	楕円形			1.46	1.34	0.4	
78号土坑	86区O-13、P-13	長方形		99号住居	2.48	0.7	0.23	
79号土坑	86区P-11	楕円形			0.76	0.74	0.32	
80号土坑	86区G-15		151号土坑	149号土坑	1.83	1.6	0.28	10C.前半
81号土坑	86区G-14•15、H-14•15			147号土坑	1.18	0.94	0.1	
82号土坑	86区F-18	楕円形		75号住居	1.84	1.1	0.21	10C.前半
83~100号土坑								古墳時代
101号土坑								As—B上
102号土坑	86区F-3、G-3	長方形			5.22	0.9	0.23	As—B上
103号土坑	86区G-2	楕円形			1.56	1.33	0.22	As—B上
104号土坑								欠
105号土坑	86区C-1	楕円形			1.5	1.1	0.2	現代
106号土坑	86区B-2	楕円形			0.8	0.63	0.13	現代
107号土坑	86区B-3	楕円形			1.02	0.9	0.12	現代
108号土坑	86区G-3	楕円形			2.17	1.15	0.26	現代
109号土坑	86区C-1	楕円形			1.22	1.07	0.13	
110号土坑	86区D-1	楕円形			0.7	0.57	0.09	
111号土坑	86区D-1•2	円　形			1.07		0.18	10C.前半
112号土坑	86区D-2	楕円形			1.04	0.98	0.26	
113号土坑	86区F-2	長方形			1.0	0.9	0.2	
114号土坑	86区F-2、G-2	楕円形			1.13	1.05	0.18	10C.前半
115号土坑	86区G-2	楕円形			1.01	0.97	0.16	10C.前半
116号土坑								欠
117号土坑	86区F-3	楕円形		24号住居	1.3	0.58	0.28	9C.後半
118号土坑	86区F-3	(楕円形)		24号住居	1.1	(0.54)	0.18	9C.前半
119号土坑	86区E-3	楕円形			0.47	0.42	0.26	
120号土坑	86区I-1	楕円形			0.7	0.6	0.24	
121号土坑	86区F-3				1.1	1.47	0.58	
122号土坑	86区F-3	楕円形			0.41	0.39	0.25	
123号土坑	86区M-5、N-5	円　形			1.06		0.22	
124号土坑	86区M-4•5、N-4•5	楕円形			0.73	0.66	0.31	
125号土坑	86区M-5	楕円形			0.94	0.9	0.25	
126号土坑	86区K-5	楕円形			0.55	0.47	0.13	
127号土坑	86区O-4•5	(長方形)			2.1	(1.07)	0.41	
128号土坑	86区M-4、N-4	円　形			0.95		0.29	
129号土坑	86区K-9•10、L-9•10	楕円形			2.23	1.63	0.44	10C.代
130号土坑	86区M-4	楕円形			0.81	0.71	0.13	
131号土坑	86区L-4	楕円形			0.73	0.43	0.08	
132号土坑	86区H-4	楕円形			0.73	0.43	0.08	
133号土坑	86区L-11	楕円形			0.62	0.6	0.12	
134号土坑	86区K-11、L-11	楕円形			0.72	0.68	0.12	
135号土坑	86区L-10	(楕円形)			(0.96)		0.3	
136号土坑	86区O-11•12	楕円形			2.35	2.22	0.96	
137号土坑	86区B-7•8	楕円形			1.28	1.18	0.19	
138号土坑	86区C-6	(楕円形)	143号住居	159号住居	1.42	(0.84)	0.3	
139号土坑	86区F-3、G-3	楕円形			1.07	0.43	0.22	
140号土坑	86区A-18•19	楕円形			1.14	0.83	0.14	
141号土坑	86区E-11	楕円形			(1.7)	1.52	0.12	
142号土坑	86区C-10	円　形			0.55	0.55	0.1	
143号土坑	86区B-7•8	楕円形			1.22	1.05	0.52	
144号土坑	86区C-9	楕円形			0.58	0.51	0.16	
145号土坑	86区C-9	円　形			0.55	0.55	0.1	
146号土坑	86区B-13	楕円形			1.28	1.0	0.17	
147号土坑	86区G-14、H-14	(楕円形)	81号土坑		(1.42)	1.2	0.11	
148号土坑	86区G-15	(楕円形)	149号土坑		(0.88)	0.86	0.07	
149号土坑	86区G-15	(楕円形)			0.91	(0.53)	0.11	
150号土坑	86区G-15	楕円形			1.07	0.83	0.22	
151号土坑	86区G-15	楕円形		80号土坑	1.2	1.02	0.34	
152号土坑	86区C-12、D-12	楕円形		55号土坑	1.1	0.74	0.36	



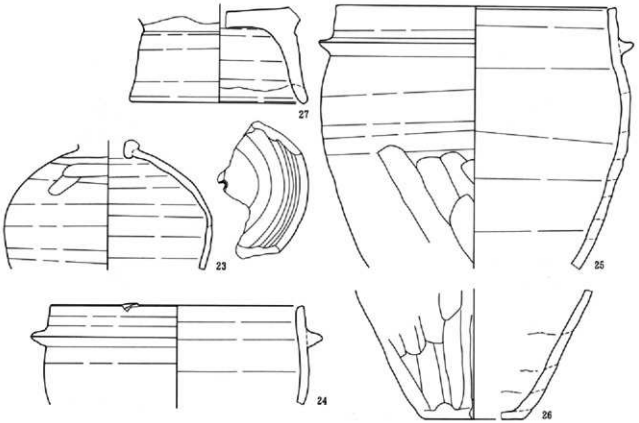
第495図　1～4号土坑遺構図・出土遺物図



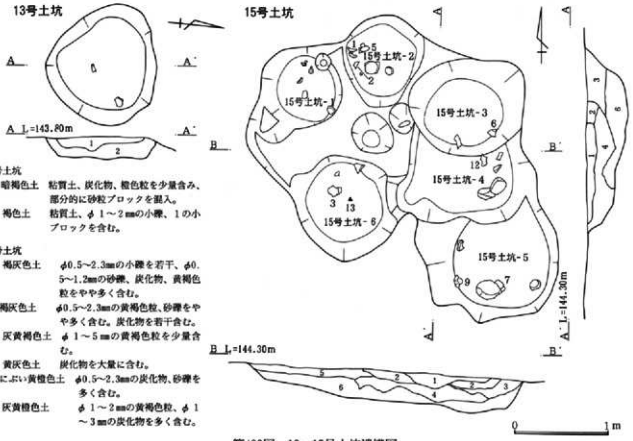
第496図　6～9号土坑遺構図



第497図　9号土坑出土遺物図(1)



第498図　9号土坑出土遺物図（2）



13号土坑

1．暗褐色土　粘質土、炭化物、橙色粒を少量含み、部分的に砂粒ブロックを混入。

2．褐色土　粘質土、φ1～2mmの小礫、1の小ブロックを含む。

15号土坑

1．褐灰色土　φ0.5～2.3mmの小礫を若干、φ0.5～1.2mmの砂礫、炭化物、黄褐色粒をやや多く含む。

2．褐灰色土　φ0.5～2.3mmの黄褐色粒、砂礫をやや多く含む。炭化物を若干含む。

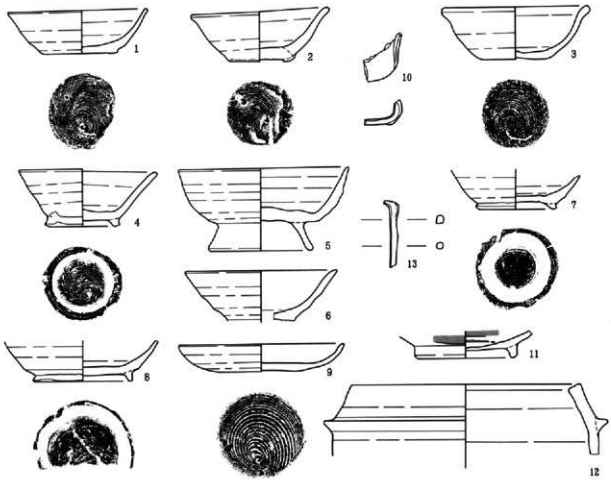
3．灰黄褐色土　φ1～5mmの黄褐色粒を少量含む。

4．黄灰色土　炭化物を大量に含む。

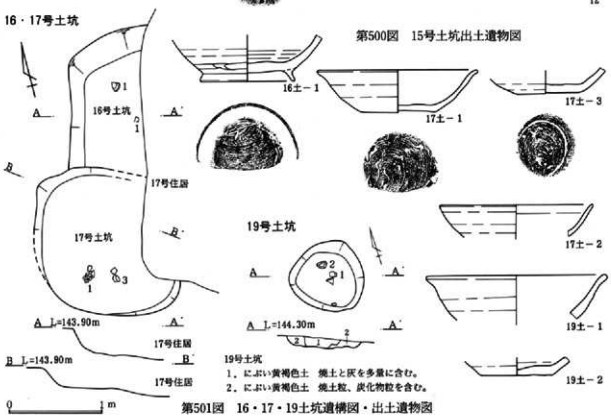
5．にぶい黄橙色土　φ0.5～2.3mmの炭化物、砂礫を多く含む。

6．灰黄褐色土　φ1～2mmの黄褐色粒、φ1～3mmの炭化物を多く含む。

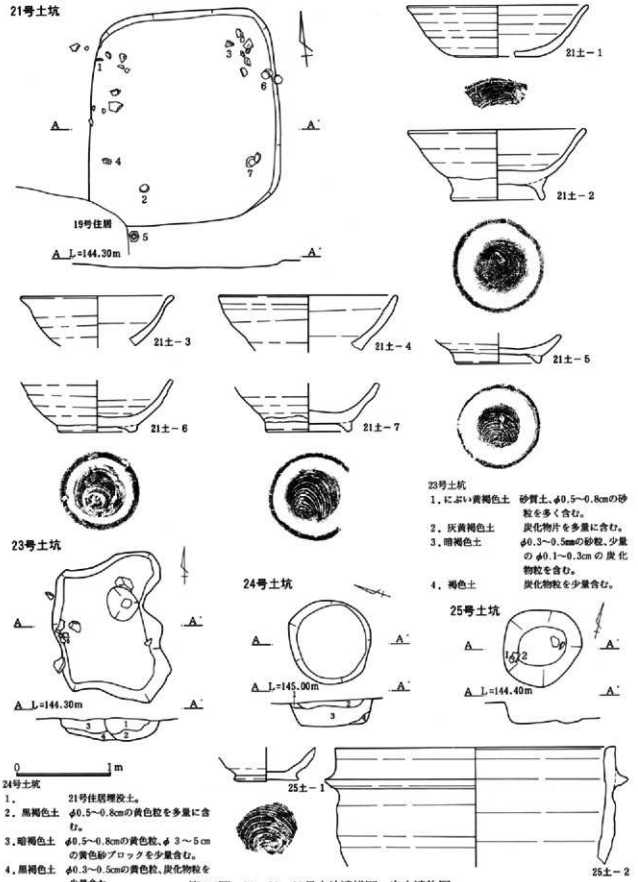
第499図　13・15号土坑遺構図



第500図　15号土坑出土遺物図



第501図　16・17・19土坑遺構図・出土遺物図



23号土坑

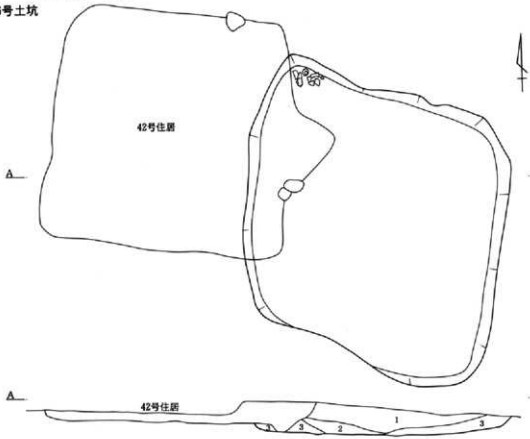
1．にぶい黄褐色土	砂質土。φ0.5～0.8cmの砂粒を多く含む。
2．灰黄褐色土	炭化物片を多量に含む。
3．暗褐色土	φ0.3～0.5mmの砂粒、少量のφ0.1～0.3cmの炭化物粒を含む。
4．褐色土	炭化物粒を少量含む。

24号土坑

1．	21号住居埋没土。
2．黒褐色土	φ0.5～0.8cmの黄色粒を多量に含む。
3．暗褐色土	φ0.5～0.8cmの黄色粒、φ3～5cmの黄色砂ブロックを少量含む。
4．黒褐色土	φ0.3～0.5cmの黄色粒、炭化物粒を少量含む。

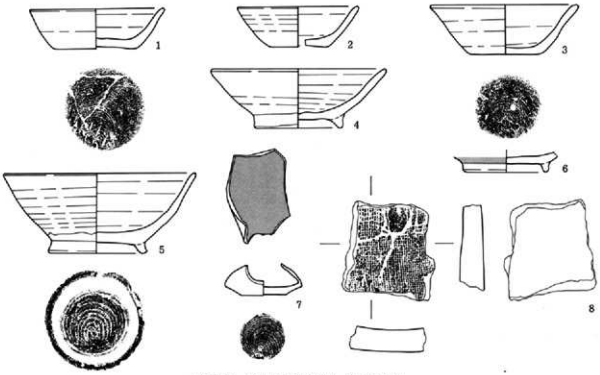
第502図　21・23～25号土坑遺構図・出土遺物図

26号土坑



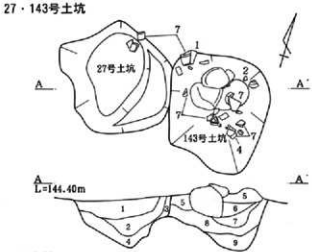
26号土坑
1．暗褐色土　　φ 2～4cmの砂礫、φ 1cm程の炭化物粒、φ0.3cm程の橙色粒を含む。
2．暗褐色土　　φ 5～6mmの小礫を少量、φ0.2cm程の炭化物粒を含む。
3．にぶい黄褐色砂質土　φ0.5～0.8cmの砂礫を含む。

0　L=144.40m　1m



第503図　26号土坑遺構図・出土遺物図

27・143号土坑



27号土坑

1．灰黄褐色土	φ0.5～5cmの砂礫、φ0.5～1cmの黄橙色土ブロックを斑点状に多く含む。
2．にぶい黄橙色土	φ0.5～2.3cmの砂礫、黄褐色粒を多く含む。
3．浅黄橙色土	砂礫層。（泥流層の崩土）
4．にぶい黄橙色土	φ1mm以下の砂礫を少量含む。

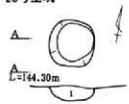
143号土坑

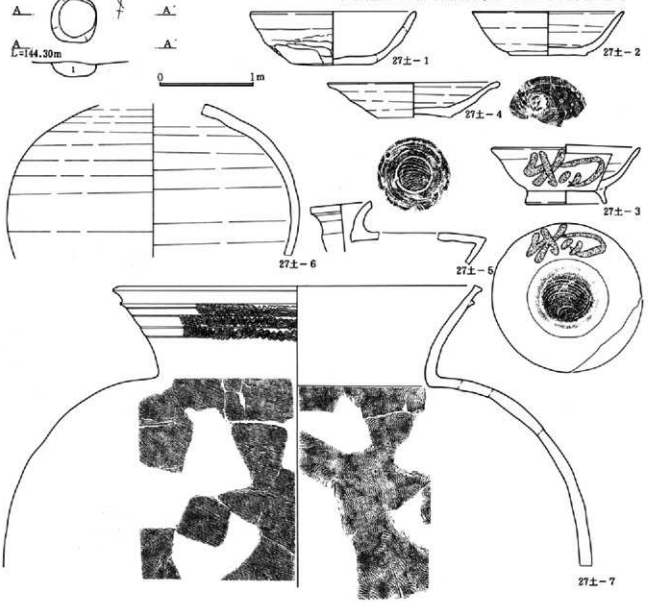
5．にぶい黄橙褐色土	φ0.5～2.3cmの砂礫、φ1～2cmの炭化物を多く含む。
6．黒褐色土	φ1～2cmの炭化物、φ0.5～1cmの砂礫、黄褐色粒を多量に含む。
7．明黄褐色土	φ1～3cmの砂礫、φ0.5～1.2cmの炭化物を多く含む。
8．にぶい黄褐色土	φ0.5～3cmの砂礫をやや多く、φ1～2mmの赤橙色粒を若干含む。
9．灰黄褐色土	φ0.5～3cmの砂礫を若干含む。

28号土坑

1．暗褐色土　1cm程の炭化物片、φ0.5～0.8cmの砂礫を多量に含む。

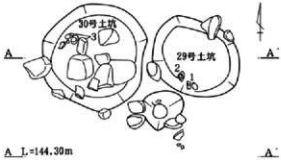
28号土坑





第504図　27・28・143号土坑遺構図・出土遺物図

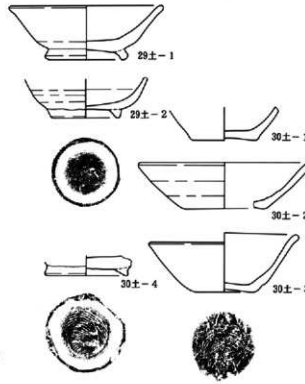
29・30号土坑



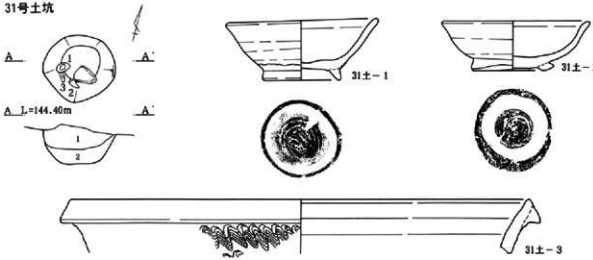
29号土坑
1．暗褐色土　1cm程の炭化物片、φ0.5～0.8cmの砂礫を多量に含む。

30号土坑
1．暗褐色土　1cm程の炭化物片、φ0.5～0.8cmの砂礫を多量に含む。

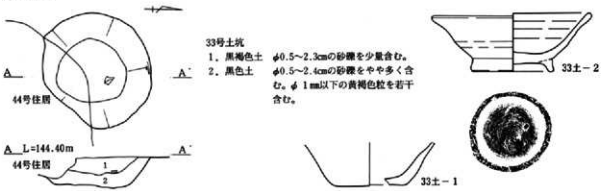
31号土坑
1．黒褐色土　φ0.5～1cmの砂礫、炭化物片を多量に含む。
2．暗褐色土　φ3～5mmの炭化物片を多量にとφ3～5mmの砂粒を少量含む。



31号土坑



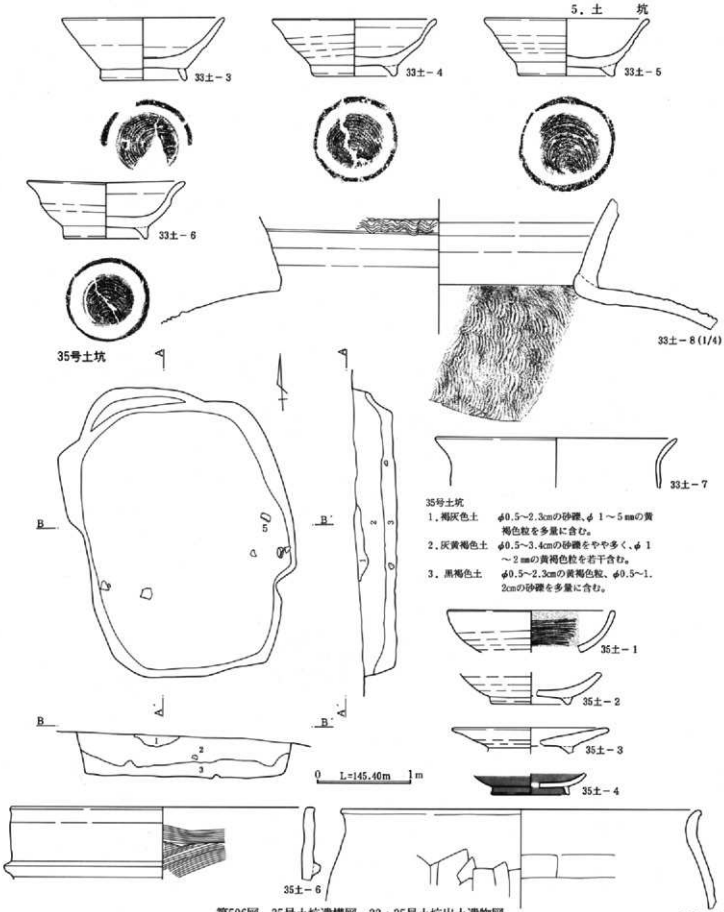
33号土坑



33号土坑
1．黒褐色土　φ0.5～2.3cmの砂礫を少量含む。
2．黒色土　φ0.5～2.4cmの砂礫をやや多く含む。φ1mm以下の黄褐色粒を若干含む。

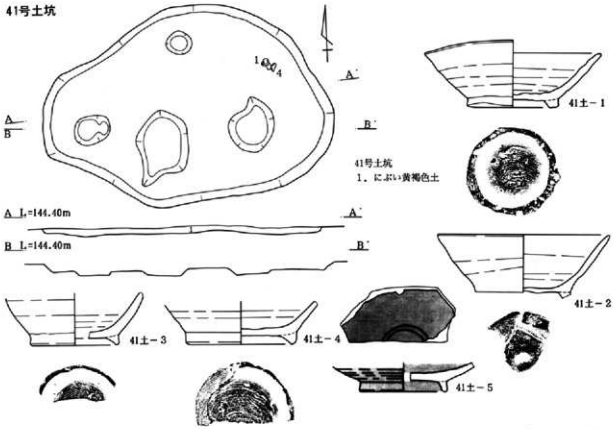
0　1m

第505図　29～31・33号土坑遺構図・出土遺物図

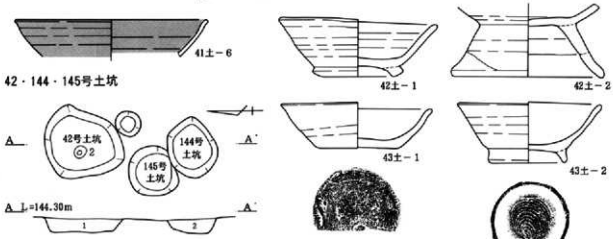


第506図　35号土坑遺構図　33・35号土坑出土遺物図

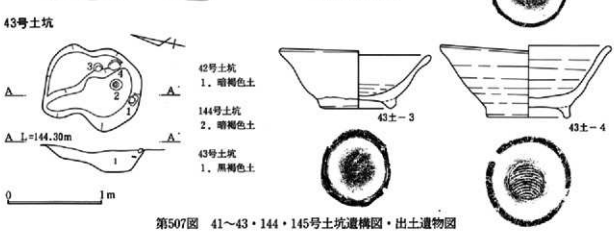
41号土坑



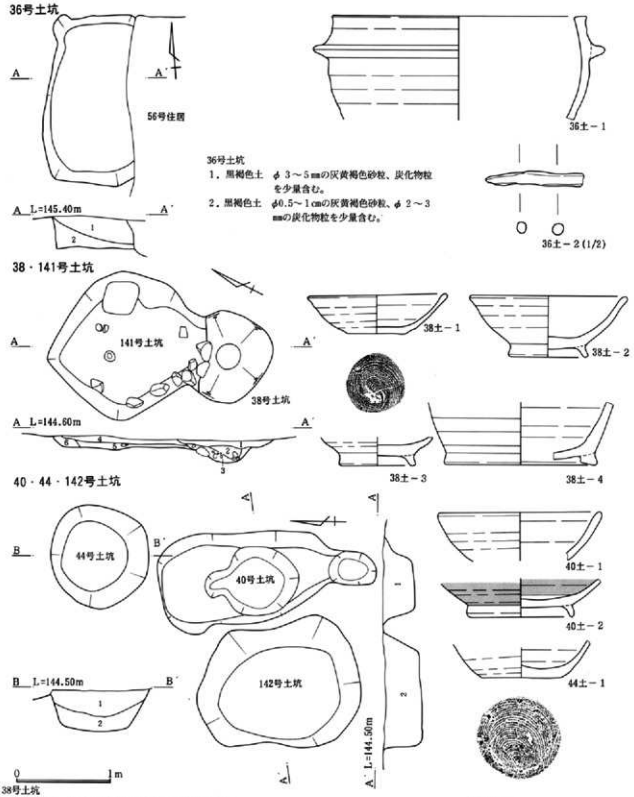
42・144・145号土坑



43号土坑



第507図　41～43・144・145号土坑遺構図・出土遺物図



36号土坑
1．黒褐色土　φ 3～5mmの灰黄褐色砂粒、炭化物粒を少量含む。
2．黒褐色土　φ0.5～1cmの灰黄褐色砂粒、φ 2～3mmの炭化物粒を少量含む。

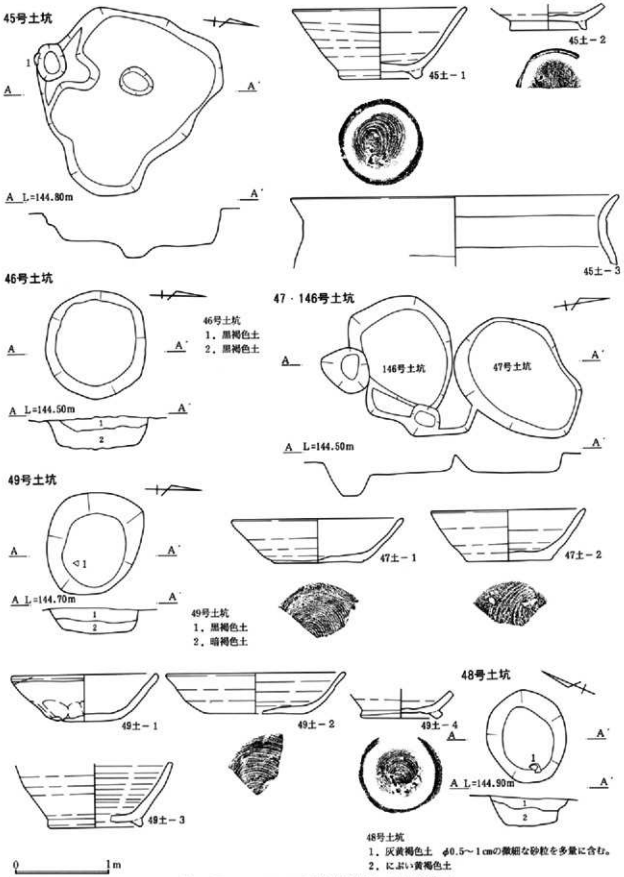
38号土坑
1．黒褐色土　φ 5mmのFP、φ 1～2mmのFPを含む。
2．暗褐色土　1に類似、FPを多く含む。
3．褐色土　φ 1～5cmのFP、φ 2～3mmの褐色粒、礫を含む。

141号土坑
4．黒褐色土　φ 2～3mmの礫、φ 1～2mmのFP、φ 2～3mmの褐色粒、炭化物を含む。
5．暗褐色土　4に類似、φ 1～2mmのFPをやや多く含む。
6．暗褐色土　5に類似、φ 5mm、φ 2～3mmの礫を含む。

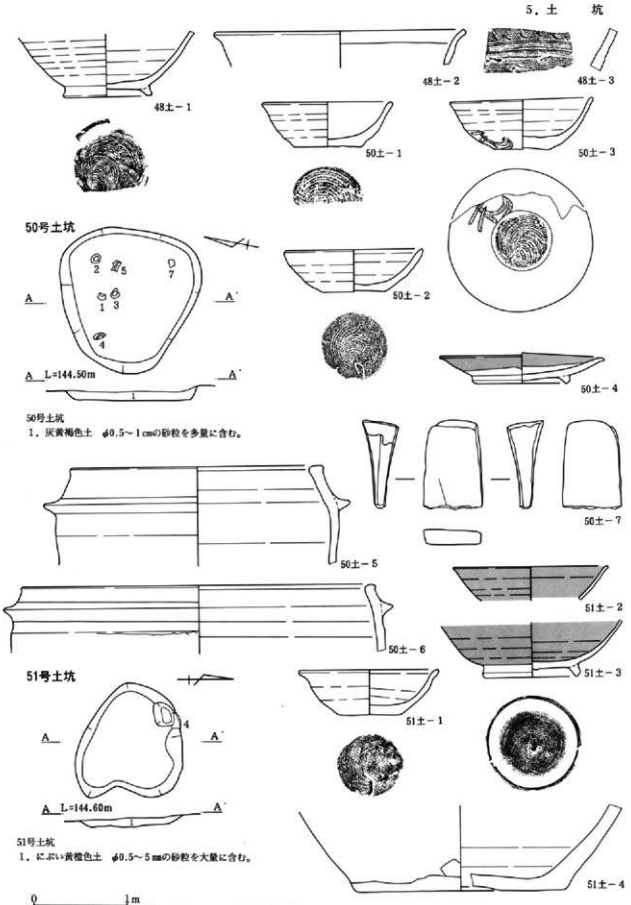
40号土坑
1．にぶい黄褐色土

44号土坑
1．黒褐色土
2．黒褐色土　炭化物を若干含む。

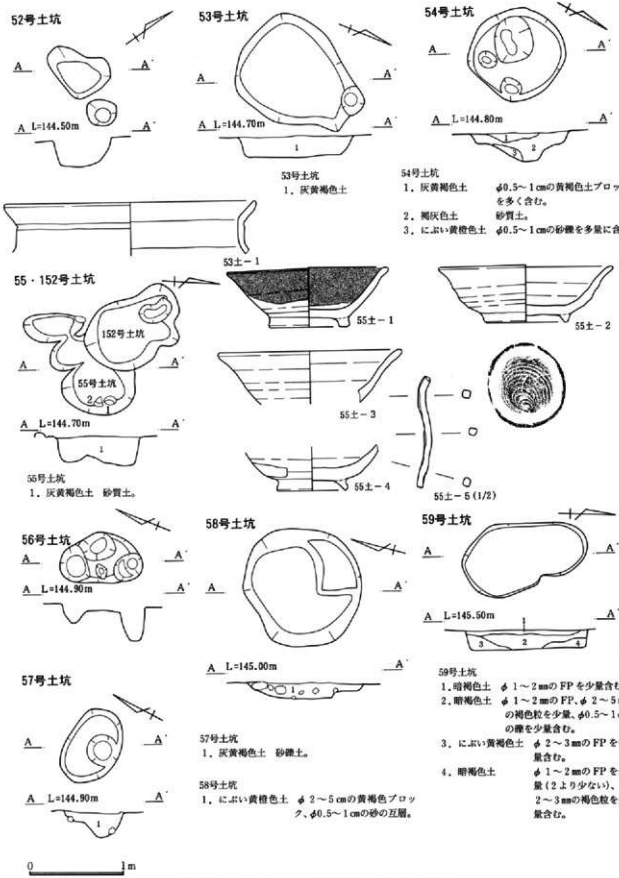
第508図　36・38・40・44・141・142号土坑遺構図・出土遺物図



第509図　45～49・146号土坑遺構図・出土遺物図

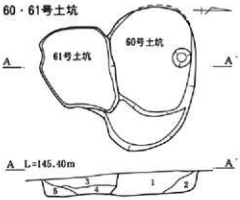


第510図　50・51号土坑遺構図　48・50・51号土坑出土遺物図



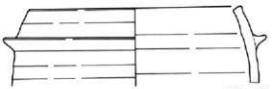
第511図　52～59・152号土坑遺構図・出土遺物図

60・61号土坑



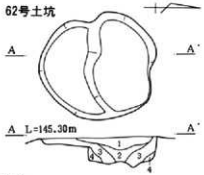
60号土坑
1．暗褐色土　φ 2～3 mmのFP、φ 3～4 mmの褐色粒を少量含む。
2．黒褐色土　φ 2～3 mmのFP、炭化物を少量含む。
61号土坑
3．暗褐色土　φ 1～5 mmのFP、φ 3～4 mmの褐色粒を少量含む。
4．黒褐色土　φ 2～3 mmのFP、炭化物を少量含む。
5．黒褐色土　φ 3 cm程のFP、φ 2～3 mmの褐色粒を所々に含む。

60土－1



60土－2

62号土坑

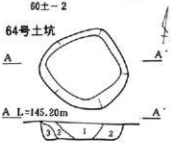


62号土坑
1．暗褐色土　φ 2～3 mmのFP、φ 5 mm程の炭化物、φ 2～3 mmの褐色粒、φ 1～2 mmの礫をそれぞれ少量含む。
2．黒褐色土　1に類似、所々に斑状に褐色がかっている。
3．黒褐色土　1・2に類似、φ 1～2 cmの礫を多く含む。
4．黒褐色土　3に類似。

63号土坑

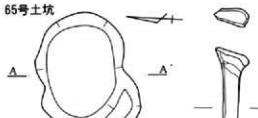
63号土坑
1．黒褐色土　φ 2～3 mmのFP、φ 2～3 mmの褐色粒、φ 1 cm程の礫を少量含む。(62土坑の1類似)
2．黒褐色土　1に類似、褐色がかっている所がある。(62土坑の2に類似)
3．黒褐色土　1・2に類似。

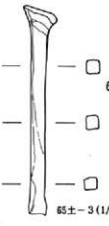
64号土坑



64号土坑
1．黒褐色土　φ 2～3 mmのFP、φ 2～3 mmの褐色粒、φ 5 mm程の礫を少量含む。
2．黒褐色土　φ 2～3 mmの礫を少量、φ 1 cm程の斑状に変色した部分あり。他は1層に類似。
3．黒褐色土　2に類似、FPは2より少ない。

65号土坑

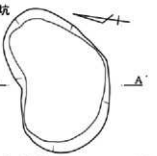




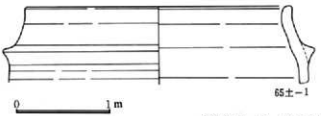
65土－3(1/2)

65号土坑
1．黒褐色土　φ 1～5 mmのFP、φ 2～3 mmの褐色粒、炭化物を少量含む。
2．黒褐色土　1に類似、FPは1より少なく、φ 1 cm程の礫を含む。
3．黒褐色土　1・2に類似、褐色土が多く混入している。

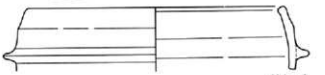
66号土坑



66号土坑
1．黒褐色土　65土坑の1と同様。
2．暗褐色土　65土坑の3と同様。



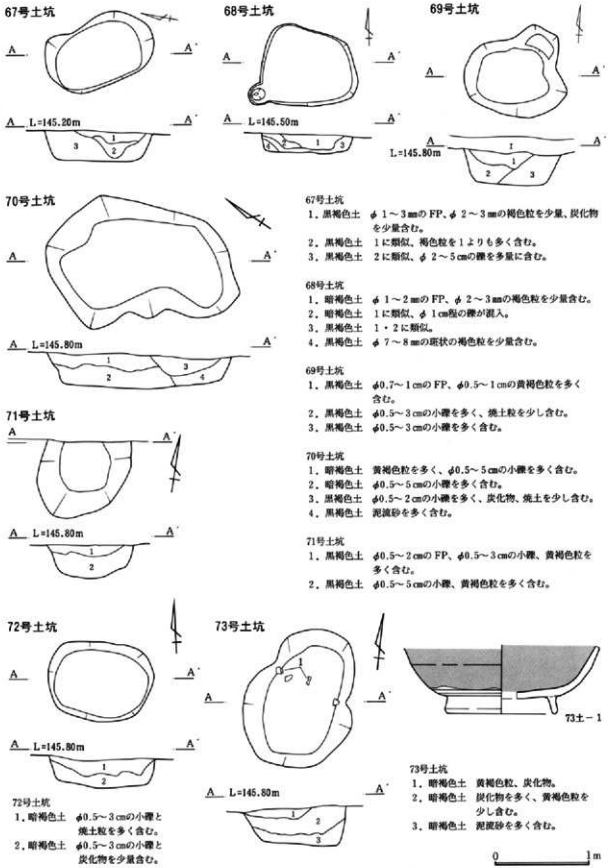
65土－1



66土－1

0　1 m

第512図　60～66号土坑遺構図・出土遺物図



67号土坑
1．黒褐色土　φ 1～3㎜の FP、φ 2～3㎜の褐色粒を少量、炭化物を少量含む。
2．黒褐色土　1に類似、褐色粒を1よりも多く含む。
3．黒褐色土　2に類似、φ 2～5㎝の礫を多量に含む。

68号土坑
1．暗褐色土　φ 1～2㎜の FP、φ 2～3㎜の褐色粒を少量含む。
2．暗褐色土　1に類似、φ 1㎝程の礫が混入。
3．黒褐色土　1・2に類似。
4．黒褐色土　φ 7～8㎜の斑状の褐色粒を少量含む。

69号土坑
1．黒褐色土　φ0.7～1㎝の FP、φ0.5～1㎝の黄褐色粒を多く含む。
2．黒褐色土　φ0.5～3㎝の小礫を多く、焼土粒を少し含む。
3．黒褐色土　φ0.5～3㎝の小礫を多く含む。

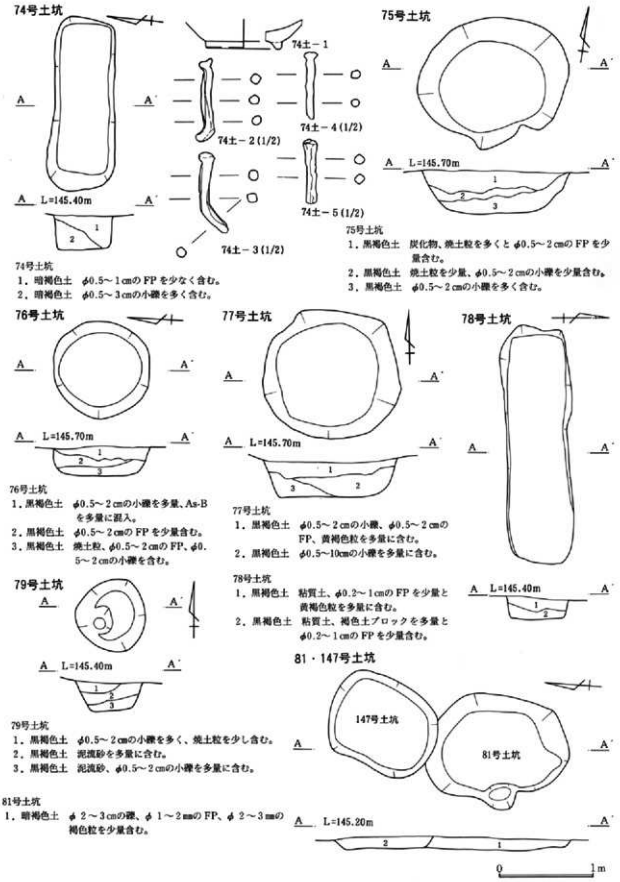
70号土坑
1．暗褐色土　黄褐色粒を多く、φ0.5～5㎝の小礫を多く含む。
2．暗褐色土　φ0.5～5㎝の小礫を多く含む。
3．黒褐色土　φ0.5～2㎝の小礫を多く、炭化物、焼土を少し含む。
4．黒褐色土　泥流砂を多く含む。

71号土坑
1．黒褐色土　φ0.5～2㎝の FP、φ0.5～3㎝の小礫、黄褐色粒を多く含む。
2．黒褐色土　φ0.5～5㎝の小礫、黄褐色粒を多く含む。

72号土坑
1．暗褐色土　φ0.5～3㎝の小礫と焼土粒を多く含む。
2．暗褐色土　φ0.5～3㎝の小礫と炭化物を少量含む。

73号土坑
1．暗褐色土　黄褐色粒、炭化物。
2．暗褐色土　炭化物を多く、黄褐色粒を少し含む。
3．暗褐色土　泥流砂を多く含む。

第513図　67～73号土坑遺構図・出土遺物図



74号土坑
1．暗褐色土　φ0.5～1cmのFPを少なく含む。
2．暗褐色土　φ0.5～3cmの小礫を多く含む。

75号土坑
1．黒褐色土　炭化物、焼土粒を多くとφ0.5～2cmのFPを少量含む。
2．黒褐色土　焼土粒を少量、φ0.5～2cmの小礫を少量含む。
3．黒褐色土　φ0.5～2cmの小礫を多く含む。

76号土坑
1．黒褐色土　φ0.5～2cmの小礫を多量、As-Bを多量に混入。
2．黒褐色土　φ0.5～2cmのFPを少量含む。
3．黒褐色土　焼土粒、φ0.5～2cmのFP、φ0.5～2cmの小礫を含む。

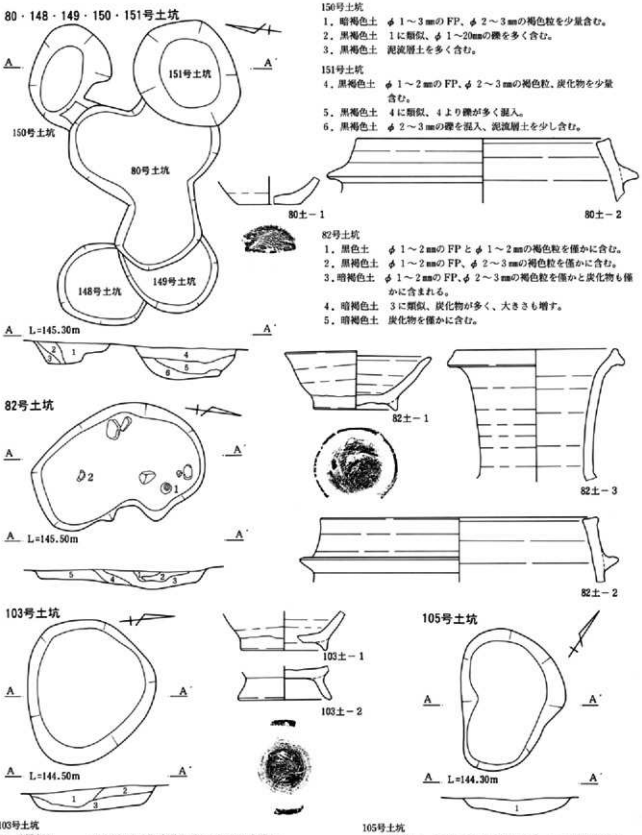
77号土坑
1．黒褐色土　φ0.5～2cmの小礫、φ0.5～2cmのFP、黄褐色粒を多量に含む。
2．黒褐色土　φ0.5～10cmの小礫を多量に含む。

78号土坑
1．黒褐色土　粘質土、φ0.2～1cmのFPを少量と黄褐色粒を多量に含む。
2．黒褐色土　粘質土、褐色土ブロックを多量とφ0.2～1cmのFPを少量含む。

79号土坑
1．黒褐色土　φ0.5～2cmの小礫を多く、焼土粒を少し含む。
2．黒褐色土　泥流砂を多量に含む。
3．黒褐色土　泥流砂、φ0.5～2cmの小礫を多量に含む。

81号土坑
1．暗褐色土　φ2～3cmの礫、φ1～2mmのFP、φ2～3mmの褐色粒を少量含む。

第514図　74～79・81・147号土坑遺構図・出土遺物図



150号土坑
1．暗褐色土　φ 1～3 mmの FP、φ 2～3 mmの褐色粒を少量含む。
2．黒褐色土　1に類似、φ 1～20mmの礫を多く含む。
3．黒褐色土　泥流層土を多く含む。

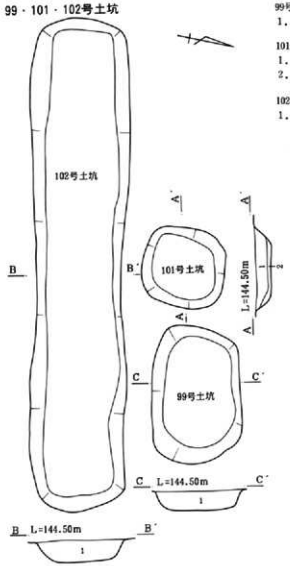
151号土坑
4．黒褐色土　φ 1～2 mmの FP、φ 2～3 mmの褐色粒、炭化物を少量含む。
5．黒褐色土　4に類似、4より礫が多く混入。
6．黒褐色土　φ 2～3 mmの礫を混入、泥流層土を少し含む。

82号土坑
1．黒色土　φ 1～2 mmの FP と φ 1～2 mmの褐色粒を僅かに含む。
2．黒褐色土　φ 1～2 mmの FP、φ 2～3 mmの褐色粒を僅かに含む。
3．暗褐色土　φ 1～2 mmの FP、φ 2～3 mmの褐色粒を僅かと炭化物も僅かに含まれる。
4．暗褐色土　3に類似、炭化物が多く、大きさも増す。
5．暗褐色土　炭化物を僅かに含む。

103号土坑
1．暗褐色土　φ5～7cmの円礫・割礫を5%、As-B を 3 %含む。
2．褐色土　φ5～7cmの円礫・割礫を5%、As-B を20%含む。
3．におい黄褐色土　粘質土、φ 1～3 cmの円礫を 1 %含む。

105号土坑
1．暗褐色土　φ5～7cmの円礫・割礫を5%、As-B を 3 %含む。

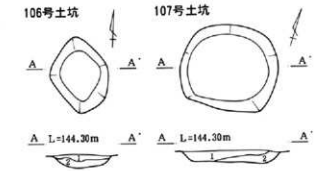
第515図　80・82・103・105・148～151号土坑遺構図・出土遺物図



99号土坑
1．灰黄褐色土　暗褐色土ブロックを5％、FPを1％含む。

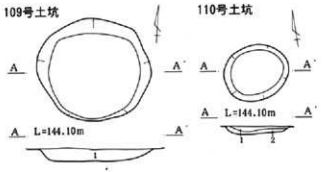
101号土坑
1．灰黄褐色土　暗褐色土ブロックを5％とFPを1％含む。
2．暗褐色土　　橙色ブロック、粒を5％含む。

102号土坑
1．にぶい黄褐色土　橙色粒を1％、As-Bも5％含む。



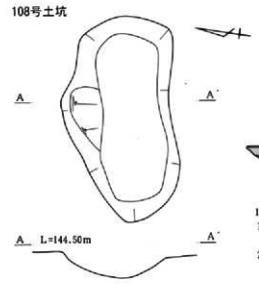
106号土坑
1．褐灰色土　黄色土ブロックを2～3％含む。
2．黄色土　ブロックからなる黒褐色土をしみ状に含む。

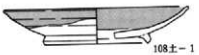
107号土坑
1．褐灰色土　黄色土ブロックを2～3％含む。
2．黄色土　ブロックからなる黒褐色土をしみ状に含む。



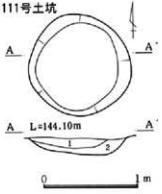
109号土坑
1．黒褐色土　橙色粒を1％含む。砂質土。

110号土坑
1．黒褐色土　にぶい黄橙色砂ブロックを5％含む。
2．褐色土　　砂質土。





111号土坑
1．褐灰色土　にぶい黄橙色砂ブロックを5％含む。
2．黒褐色土　暗褐色ブロックを10％含む。



第516図　99・101・102・106～111号土坑遺構図・出土遺物図

112号土坑

113号土坑

112号土坑
1．暗褐色土　橙色粒を1％含む。
2．褐色土　砂質土。

113号土坑
1．黒色土　炭化物、焼土粒を2～3％、暗褐色ブロックを5％含む。

114号土坑

114号土坑
1．黒色土　灰を10％含む。
2．褐色土　砂質土。

115号土坑
1．暗褐色土　焼土粒、炭化物を5％含む。

115号土坑

117・118・139号土坑

118号土坑

139号土坑

117号土坑

114土－1

114土－2

114土－3

115土－1

115土－2

117土－1

117土－2

117土－3

118土－1

118土－2

118土－3

A　L=144.10m　A'

A　L=144.20m　A'

A　L=144.20m　A'

A　L=144.30m　A'

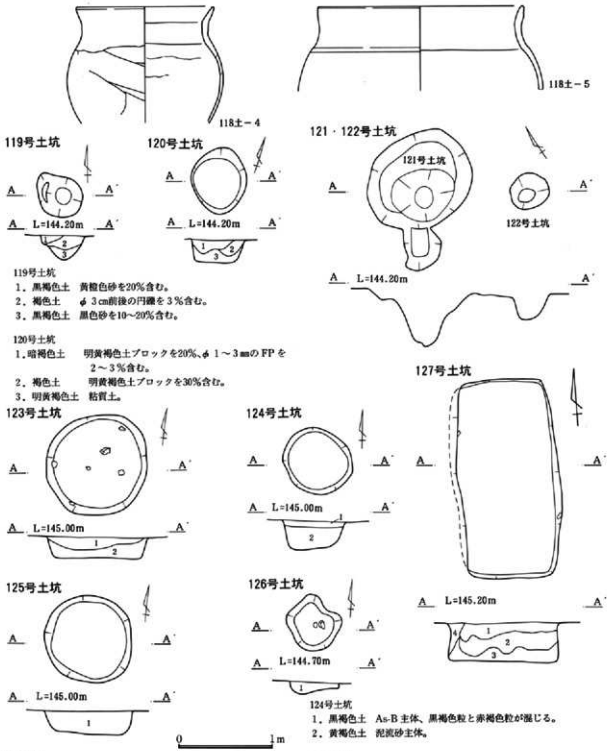
C　L=144.20m　C'

A　L=144.20m　A'

B　L=144.20m　B'

0　1m

第517図　112～115・117・118・139号土坑遺構図・出土遺物図



119号土坑
1．黒褐色土　黄橙色砂を20%含む。
2．褐色土　φ 3cm前後の円礫を3%含む。
3．黒褐色土　黒色砂を10～20%含む。

120号土坑
1．暗褐色土　明黄褐色土ブロックを20%、φ 1～3mmのFPを2～3%含む。
2．褐色土　明黄褐色土ブロックを30%含む。
3．明黄褐色土　粘質土。

123号土坑
1．赤褐色土　As-B主体。As-B下水田耕作土や赤土を僅かに含む。
2．黒褐色土　As-B下水田耕作土を多くとAs-Bを多く含む。

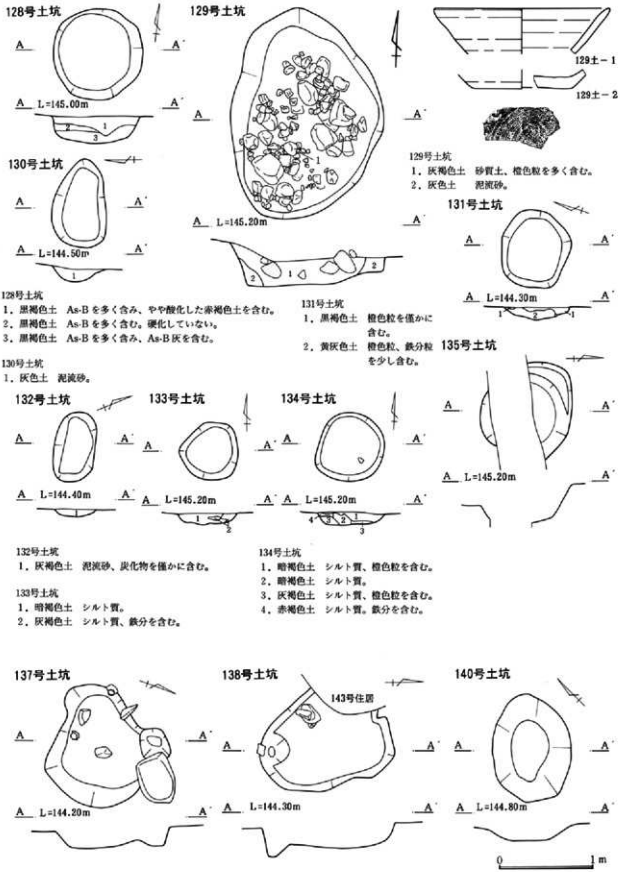
125号土坑
1．黒褐色土　As-B主体、As-B灰を少し含む。泥流層の擬似ロームを僅かに含む。

124号土坑
1．黒褐色土　As-B主体、黒褐色粒と赤褐色粒が混じる。
2．黄褐色土　泥流砂主体。

126号土坑
1．黒褐色土　As-B主体。

127号土坑
1．灰褐色土　砂質で橙色のローム状粒を多く含む。
2．灰褐色土　1よりやや細かいローム状粒が少ない。
3．灰褐色土　1・2より灰色が強く、ローム状粒はさらに少ない。
4．地山の崩落土。

第518図　119～127号土坑遺構図　118号土坑出土遺物図



128号土坑
1．黒褐色土　As-B を多く含み、やや酸化した赤褐色土を含む。
2．黒褐色土　As-B を多く含む。硬化していない。
3．黒褐色土　As-B を多く含み、As-B 灰を含む。

129号土坑
1．灰褐色土　砂質土、橙色粒を多く含む。
2．灰色土　泥質砂。

131号土坑
1．黒褐色土　橙色粒を僅かに含む。
2．黄灰色土　橙色粒、鉄分粒を少し含む。

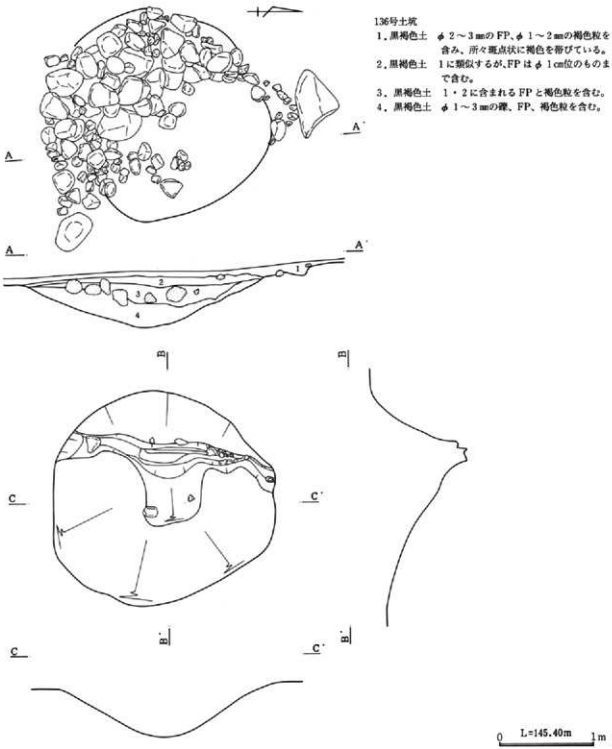
130号土坑
1．灰色土　泥流砂。

132号土坑
1．灰褐色土　泥流砂、炭化物を僅かに含む。

133号土坑
1．暗褐色土　シルト質。
2．灰褐色土　シルト質、鉄分を含む。

134号土坑
1．暗褐色土　シルト質、橙色粒を含む。
2．暗褐色土　シルト質。
3．灰褐色土　シルト質、橙色粒を含む。
4．赤褐色土　シルト質。鉄分を含む。

第519図　128～135・137・138・140号土坑遺構図・出土遺物図



第520図　136号土坑平面・断面図

6．溝

1号溝

本溝は、五反田地区本線部分東南隅、75区R－14・15グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、2号溝・7号溝と重複する。新旧関係は、2号溝より前出で7号溝より後出である。

走行は、ほぼ南北方向を指す。平面形態は、緩い弧を描いている。断面形態は、低い逆台形を呈す。底面は、ほぼ平坦で北から南に向けて緩い傾斜が見られる。

規模は、幅0.90～1.10mでほぼ一定である。深度は、18～29cmである。

遺物は、出土していない。

2号溝

本溝は、五反田地区本線部分東南隅、75区P～R－14・15グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、1号溝と重複する。新旧関係は、本溝のほうが後出である。

走行は、真北よりやや東を指すが調査区を横断するような位置関係で溝自体が蛇行しているため正確な走行は把握できない。断面形態は、底面から壁面への変換点が不明確なため弧状を呈す。底面は、緩い丸底で北から南へ傾斜している。

規模は、幅2.80～7.40mと大きな差が見られる。深度は、20～42cmである。

遺物は、出土していない。

3号溝

本溝は、五反田地区本線部分東南隅、76区A・B－14グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、3号土坑・4号土坑と重複する。新旧関係は、本溝のほうが前出である。

走行は、東西方向のN－80°－Eを指す。平面形は、ほぼ直線的である。断面形態は、逆台形状を呈す。底面は、ほぼ平坦で西半より東半がやや低いが明確な傾斜は確認されない。

規模は、幅62～68cmと西から東へ向かって広くなる。深度は、5～10cmである。

遺物は、出土していない。

4号溝

本溝は、五反田地区本線部分東南隅、75区T－15・17グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、見られず単独で占地する。なお、5号溝・6号溝とは平行関係にある。

走行は、ほぼ南北方向N－5°－Wを指すが、75区T－16グリッドでN－36°－Eへ走行を曲げる。断面形態は、U字状を呈す。底面は、ほぼ平坦で北から南へ向けてごく僅かな傾斜が見られる。

規模は、幅25cm前後で一定している。深度は、10～27cmで北側より南側が深くなる。

遺物は、出土していない。

5号溝

本溝は、五反田地区本線部分東南隅、75区T－15・16グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、見られず単独で占地する。なお、5号溝・6号溝とは平行関係にある。

走行は、ほぼ南北方向N－3°－Wを指す。平面形態は、ほぼ直線である。断面形態は、U字状・逆台形を呈す。底面は、ほぼ平坦で北から南へ向けて緩い傾斜が見られる。

規模は、幅32～50cmで、深度は、4～18cmで北側より南側が深くなる。

遺物は、出土していない。

6号溝

本溝は、五反田地区本線部分東南隅、75区S・T－14～17グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、見られず単独で占地する。なお、5号溝・6号溝とは平行関係にある。

走行は、ほぼ南北方向N－18°－Wを指すが、75区T－16グリッドでN－44°－Eへ走行を曲げる。断面形態は、逆台形状を呈す。底面は、緩い丸みを持ち北から南へ向けて傾斜が見られる。

規模は、幅80～175cmで北から南へ広くなる。深度は、ほぼ10cm前後である。

遺物は、土師器、須恵器など224点が出土しているが、小片のため図化できる個体がなかった。

7号溝

本溝は、五反田地区本線部分東南隅、75区R・S—14・15グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、1号溝と重複する。新旧関係は、本溝のほうが前出である。

走行は、ほぼ東西方向N—62°—Eを指す。平面形態は、ほぼ直線である。断面形態は、逆台形を呈す。底面は、若干凹凸が見られ、溝残存部分の中ほどがやや低い。

規模は、幅80～120cmで東側に向かってやや広くなる。深度は、15～20cmである。

遺物は、出土していない。

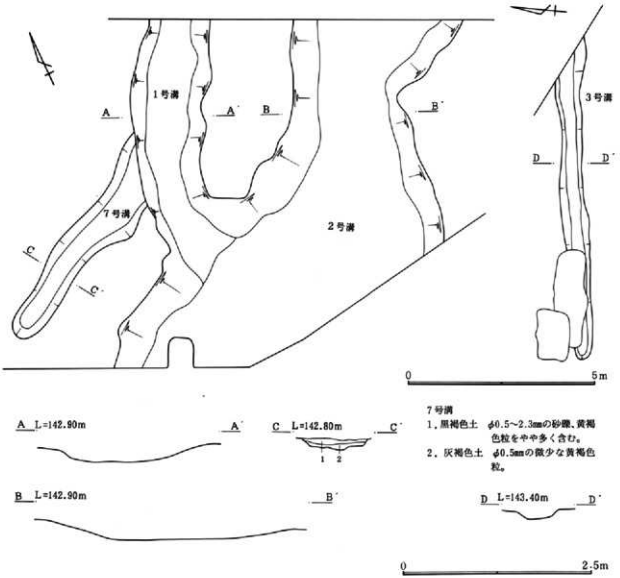
8号溝

本溝は、五反田地区本線部分東南隅、75区T・S—15グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、見られず単独で占地する。

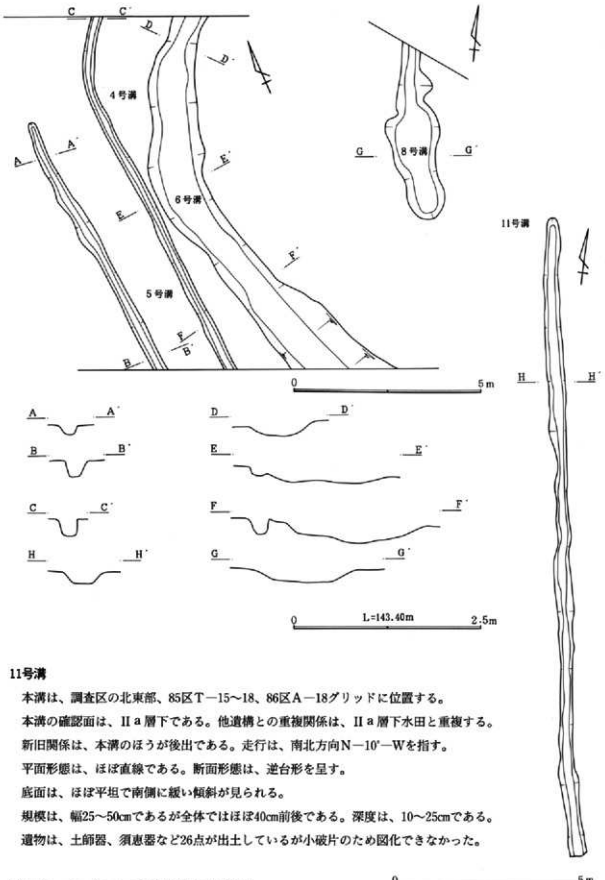
走行は、ほぼ南北方向N—4°—Wを指す。平面形態は、ほぼ直線的である。断面形態は、逆台形を呈す。底面は、ほぼ平坦で北から南へ緩い傾斜が見られる。

規模は、幅38～150cmで南側部分が土坑状に広がる。深度は、10～20cmである。

遺物は、土師器、須恵器など132点が出土しているが、小片のため図化できる個体がなかった。



第521図　1～3・7号溝平面・断面図



11号溝

本溝は、調査区の北東部、85区T－15～18、86区A－18グリッドに位置する。

本溝の確認面は、Ⅱa層下である。他遺構との重複関係は、Ⅱa層下水田と重複する。

新旧関係は、本溝のほうが後出である。走行は、南北方向N－10°－Wを指す。

平面形態は、ほぼ直線である。断面形態は、逆台形を呈す。

底面は、ほぼ平坦で南側に緩い傾斜が見られる。

規模は、幅25～50cmであるが全体ではほぼ40cm前後である。深度は、10～25cmである。

遺物は、土師器、須恵器など26点が出土しているが小破片のため図化できなかった。

第522図　4～6・8・11号溝平面・断面図

10号溝

本溝は、調査区の東側、85区Q－5～7、R6～8、S－7～13、T－12～19グリッドに位置する。確認面は、Ⅳ層上面である。他遺構との重複関係は、12号溝、Ⅲ（As－B）層下水田、多くの住居と重複する。新旧関係は、12号溝より前出でⅢ層下水田とは同時期、住居群よりは後出である。

走行は、ほぼ南北方向を指しているが、蛇行が見られる。断面形態は、V字型を呈す。底面は、凹凸が見られ、北から南へ傾斜しており調査区内では1.43mの比高差がある。

規模は、幅2.50～5.20mで平均3.0m前後である。深度は、82～135cmである。

埋没状態は、下部にⅢ（As－B）層の堆積が観察され、断面ではレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。底面付近は、砂礫層が堆積していることから本溝は水路としての機能を有していた。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、青磁など2,088点が出土しているが、大部分は水田耕作の攪拌で古代の個体が上層へ上がってきたものである。なお、12～14の青磁は、13世紀～14世紀代に比定される。

本溝の年代は、下部に堆積しているⅢ層から11世紀中頃に比定される。

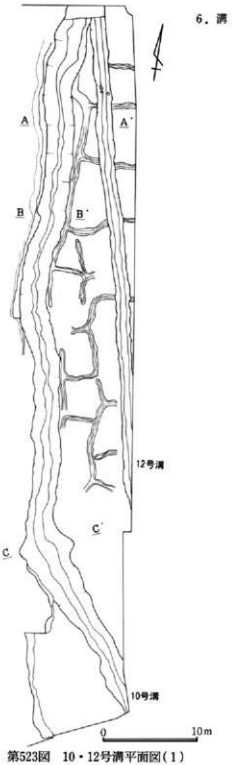
12号溝

本溝は、調査区の東端部、85区Q－9～11、R-10～15、S－15～19グリッドに位置する。確認面は、Ⅲ（As－B）層上面である。他遺構との重複関係は、11号溝と重複する。新旧関係は、本溝のほうが後出である。

走行は、南北方向N－14′－Wを指す。平面形態は、ほぼ直線的である。断面形態は、東側に比べて西側が緩やかなU字型を呈す。底面は、緩い丸底状を呈し、北から南へ傾斜しており調査区内では61cmの比高差がある。

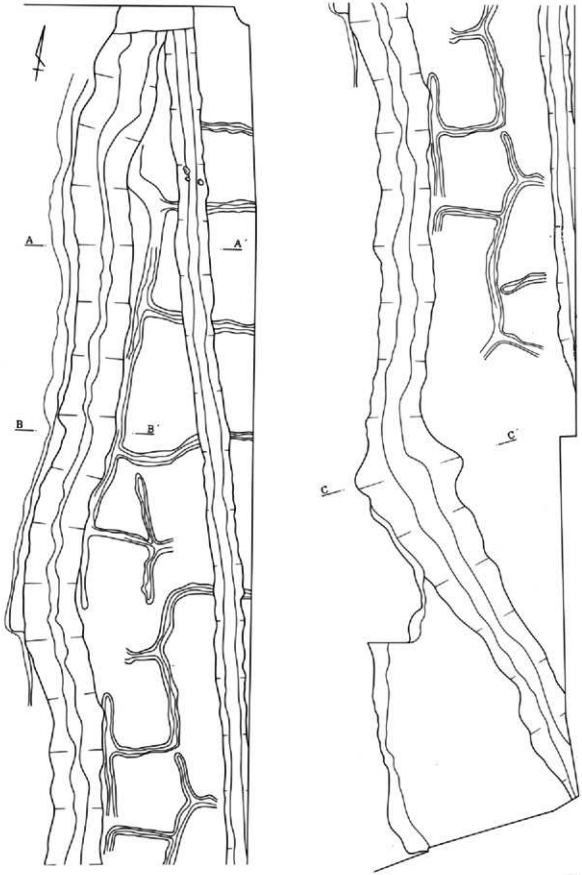
規模は、幅1.50m前後でほぼ一定している。深度は、32～49cmである。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。底面付近は、砂礫層が堆積していることから本溝は水路としての機能を有していた。

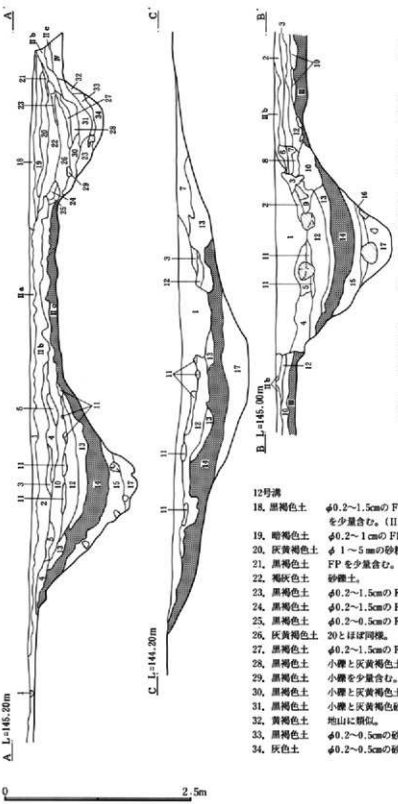


第523図　10・12号溝平面図（1）

本溝の時期は、出土遺物からは判断ができないが重複関係や埋没土内でⅡ層以降の堆積しか確認できないことと上層の水田遺構との関係から13世紀から14世紀代に比定される。



第524図　10・12号溝平面図（2）



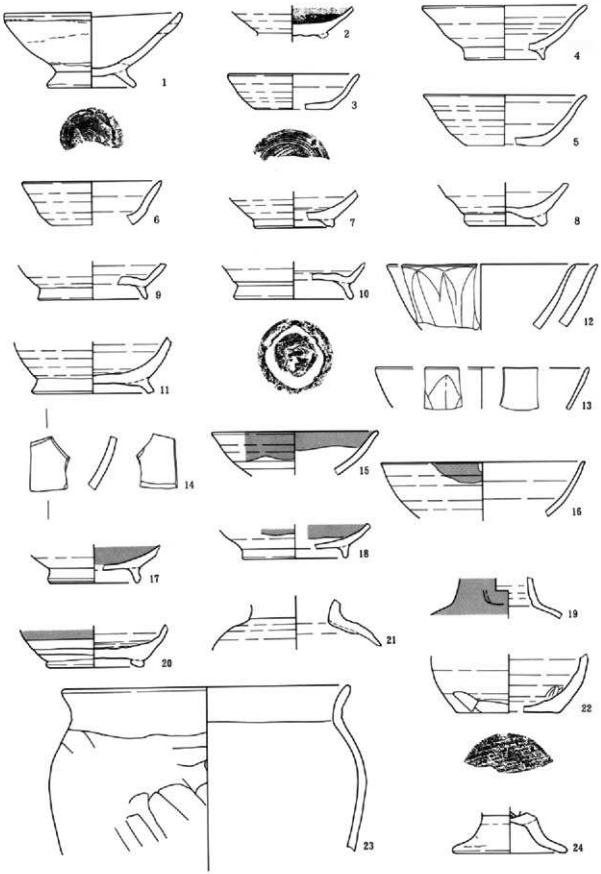
10号溝

1．暗褐色土　砂質土、細粒を帯び、φ5～8㎜のFP、黄色粒を多量に含む。
2．灰色砂
3．黒褐色土　砂質土、黄色砂粒を多量に含む。
4．褐灰色土　砂質土、FPを多量に含む。
5．黄灰色砂　青灰色砂と黄色砂の混合。
6．灰黄褐色土　砂質土、黄色砂ブロックを含む。
7．灰黄褐色土　砂質土、黄色砂を含む。
8．黒褐色土　砂質土、FPを含む。
9．黒褐色土　灰白色砂とAs-B灰のブロック、As-Bの混合土。
10．暗褐色土　As-Bが多量に混入し、黒色土ブロックが少量混入する。
11．黒褐色砂質土　砂粒と粕川テフラと見られる青色火山灰のブロックが見られる。
12．灰色砂
13．As-B灰
14．As-B
15．黒色土　φ3～4㎝の小礫、砂が混じる。
16．灰黒色土　φ0.5～3㎝の砂礫。
17．灰色土　砂礫土、φ1～20㎝の亜角礫、50㎝角礫を含む。

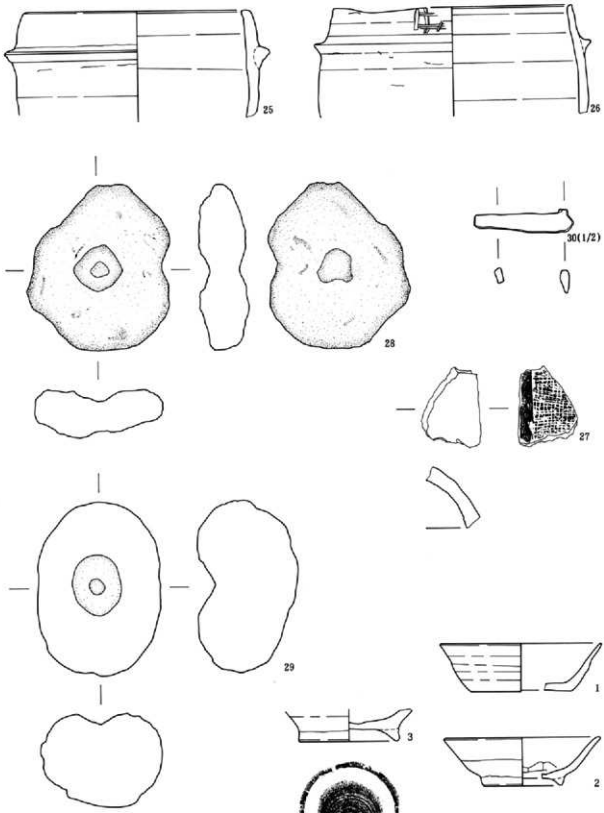
12号溝

18．黒褐色土　φ0.2～1.5㎝のFPを多量、φ0.2～1㎝のローム粒を少量含む。（Ⅱa層下水田耕作土）
19．暗褐色土　φ0.2～1㎝のFPを多量に含む。
20．灰黄褐色土　φ1～5㎜の砂粒と1～5㎝の小礫を含む。
21．黒褐色土　FPを少量含む。
22．褐灰色土　砂礫土。
23．黒褐色土　φ0.2～1.5㎝のFPを若干含む。
24．黒褐色土　φ0.2～1.5㎝のFPを少量含む。
25．黒褐色土　φ0.2～0.5㎝のFPを少量含む。
26．灰黄褐色土　20とほぼ同様。
27．黒褐色土　φ0.2～1.5㎝のFPを少量と小礫を少し含む。
28．黒褐色土　小礫と灰黄褐色土の混合土。
29．黒褐色土　小礫を少量含む。
30．黒褐色土　小礫と灰黄褐色土が交互に堆積。
31．黒褐色土　小礫と灰黄褐色砂が交互に堆積。
32．黄褐色土　地山に類似。
33．黒褐色土　φ0.2～0.5㎝の砂礫が多量に混入。
34．灰色土　φ0.2～0.5㎝の砂礫を多量に混入。

第525図　10・12号溝断面図



第526図　10号溝出土遺物図(1)



第527図　10号溝出土遺物図（2）

第528図　12号溝出土遺物図

13号溝

本溝は、調査区の東側、85区S－8、T－8～12グリッドに位置する。確認面は、V層上面である。他遺構との重複関係は、11号溝と重複する。新旧関係は、本溝のほうが前出である。

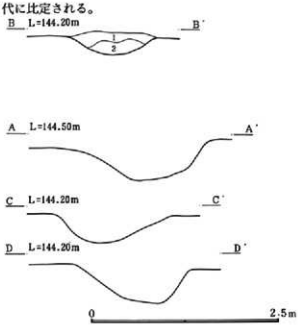
走行は、南北方向であるが、中ほどで「く」字状に曲がる。北半はN－10°－Eを指し、南半はN－36°－Wを指す。平面形態は、若干の凹凸はあるがほぼ直線的である。断面形態は、低い逆台形を呈す。底面はやや丸底で北から南へ緩い傾斜が見られる。

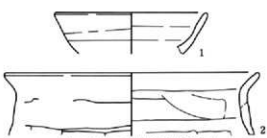
規模は、幅1.20～2.25mであるが平均1.50mである。深度は、22～47cmである。

埋没状態は、土層観察断面から自然埋没であると考えられる。

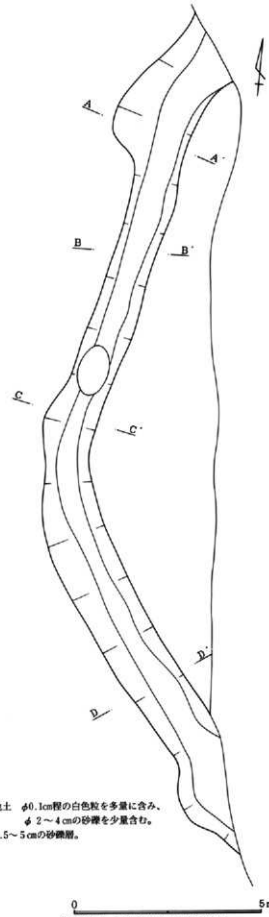
遺物は、土師器、須恵器など123点が出土しているが、大半が小破片である。

本溝の時期は、確認面層位や出土遺物から10世紀代に比定される。





第530図　13号溝出土遺物図

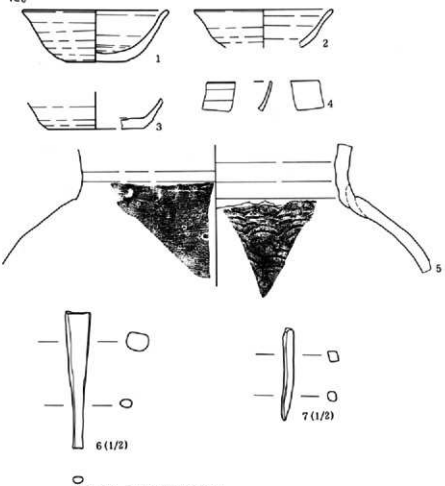


13号溝
1．褐色土　φ0.1cm程の白色粒を多量に含み、φ 2～4cmの砂礫を少量含む。
2．φ0.5～5cmの砂礫層。

第529図　13号溝平面・断面図

15号溝

本溝は、調査区の中ほどを南北に横断するように走行する用水路の掘り方であるが、遺物に白磁などが出土していることから出土遺物図だけを掲載した。



第531図　15号溝出土遺物図

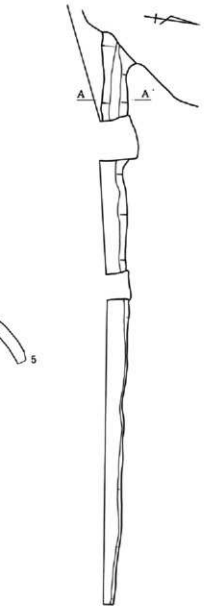
16号溝

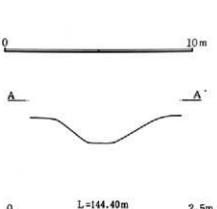
本溝は、調査区の南部、２次調査区の南端、86区B～H－20グリッドに位置する。確認面は、Ⅲ層上面である。他遺構との重複関係は、西側で攪乱と重複するが遺構との重複は見られない。

走行は、ほぼ東西方向N－83°－Eを指す。平面形態は、溝の走行での過半が調査区外に存在するため不明確であるがほぼ直線的である。断面形態は、逆台形状を呈す。底面は、ほぼ平坦で西から東へ緩い傾斜が見られる。

規模は、幅1.30m前後、深度19～38cmである。

遺物は、出土していない。





第532図　16号溝平面・断面図

17号溝・18号溝

本溝は、調査区の西部、３次調査区の中程、86区Ｌ－３～６、９・10、Ｍ－10・11グリッドに位置する。３次調査区は、「コ」の字状の調査区のため南側調査区を17号溝、北側調査区を18号溝と呼称したが同一の遺構である。確認面は、Ⅴ層上面である。他遺構との重複関係は、152号住居・158号住居と重複する。新旧関係は、本溝のほうが前出である。

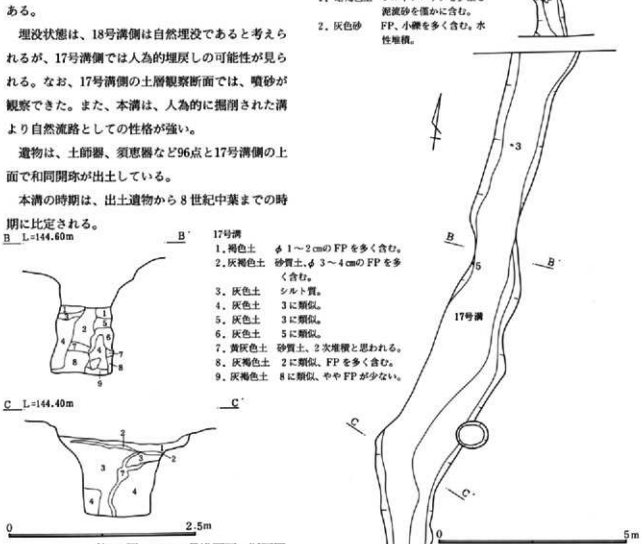
走行は、南北方向を指すが蛇行が見られる。断面形態は、17号溝側は箱形であるが18号溝側は逆台形状を呈す。底面は、ほぼ平坦であるが部分的に落ち込みや昇降が見られ、標高値は17号溝側が低いが一定の傾斜ではない。

規模は、17号溝側幅1.30～1.50m、深度100～160cmである。18号溝側0.30～0.50m、深度28～45cmである。

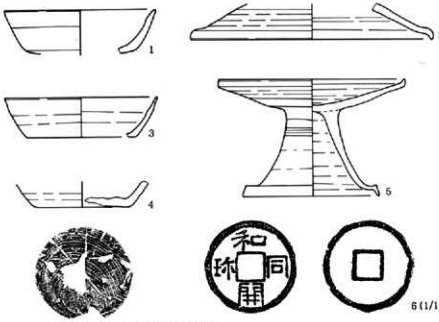
埋没状態は、18号溝側は自然埋没であると考えられるが、17号溝側では人為的埋戻しの可能性が見られる。なお、17号溝側の土層観察断面では、噴砂が観察できた。また、本溝は、人為的に掘削された溝より自然流路としての性格が強い。

遺物は、土師器、須恵器など96点と17号溝側の上面で和同開珎が出土している。

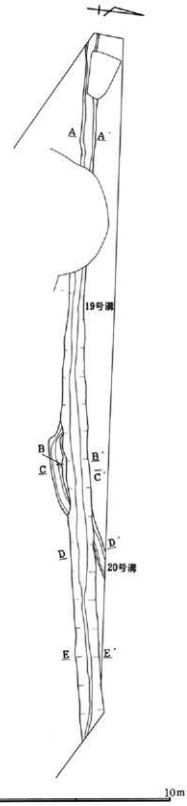
本溝の時期は、出土遺物から８世紀中葉までの時期に比定される。



第533図　17・18号溝平面・断面図



第534図　17号溝出土遺物図



第535図　19・20号溝平面図

19号溝

本溝は、清水地区調査区北端部、75区Ｉ～Ｋ－13、Ｊ～Ｐ－12グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、20号溝・25号溝と重複するほか一部を攪乱で欠く。新旧関係は、本溝のほうが後出である。

走行は、ほぼ東西方向Ｎ－78～84°－Ｅを指す。平面形態は、緩い弧を描いている。断面形態は、逆台形状を呈す。底面は、ほぼ平坦であるが幅は広・狭が見られ、西から東へ傾斜している。

規模は、幅40～65cm、深度15～50cmである。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器が若干出土しているだけである。

本溝の時期は、As－Ｂ層が堆積する25号溝より後出であることから13世紀以降と考えられる。

20号溝

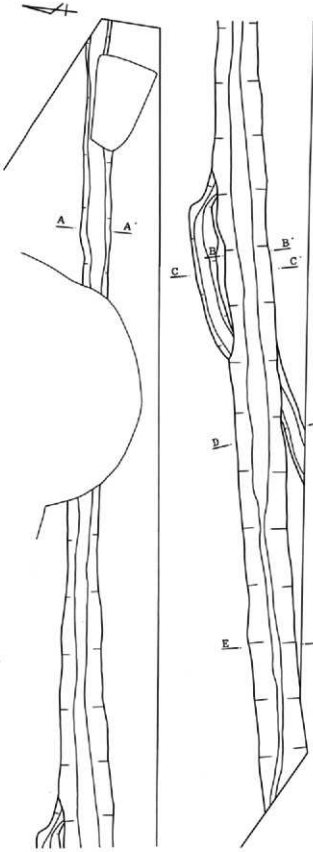
本溝は、清水地区調査区北端部、75区Ｋ～Ｍ－12グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、19号溝と重複する。新旧関係は、本溝のほうが前出である。

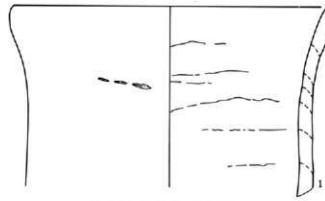
走行は、東西方向Ｎ－57°－Ｅを指す。平面形態は、蛇行をしている。断面形態は、逆台形状を呈す。底面は、ほぼ平坦で傾斜は見られない。

規模は、幅30cm前後、深度10cm前後である。

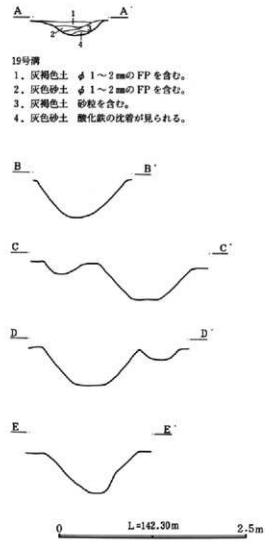
埋没状態は、自然埋没であると考えられる。

遺物は、出土してない。





第537図　19号溝出土遺物図



第536図　19・20号溝平面・断面図

25号溝

本溝は、清水地区の中程、75区H・I－8～13グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、19号溝・21～24号溝。新旧関係は、本溝のほうが前出である。

走行は、南北方向N－10°－Wを指す。平面形態は、多少の蛇行が見られるがほぼ直線的である。断面形態は、逆台形状を呈す。底面は、凹凸や細い溝状の落ち込みが見られ北から南へ傾斜が見られる。

規模は、幅3.15～5.20m、深度1.01～1.50mである。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。底面には、砂礫土の堆積が観察され、底面に溝状の落ち込みが走行に平行して見られることから水路として水が流れていたと考えられる。

遺物は、土師器、須恵器などが若干出土しているが掲載した遺物は古墳時代の須恵器であるため周辺に存在した後期古墳から流出した遺物と考えられる。

本溝は、位置関係や形態、埋没状態などから五反田地区調査区で検出した10号溝と同一の溝と考えれる。

21号溝

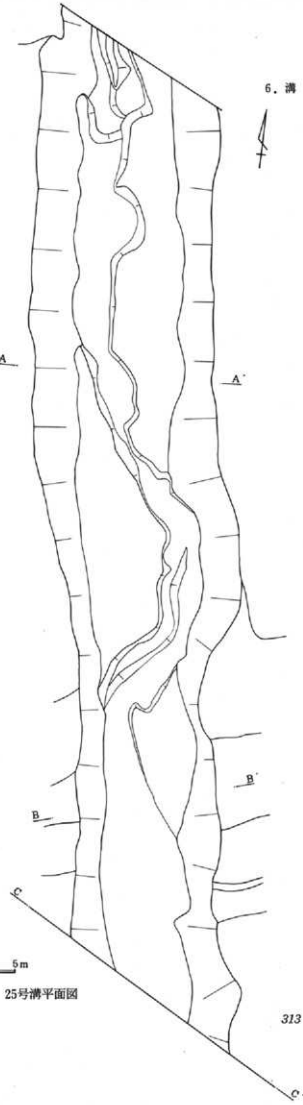
本溝は、清水地区調査区東より、75区E～H－10、H～J－9グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、25号溝・27号溝と重複する。新旧関係は、25号溝より後出であるが27号溝との関係は明確にできなかった。

走行は、東西方向N－65°－Eを指す。平面形態は、若干の蛇行は見られるがほぼ直線的である。断面形態は、逆台形状を呈す。底面は、ほぼ平坦で東から西へ僅かな傾斜が見られる。

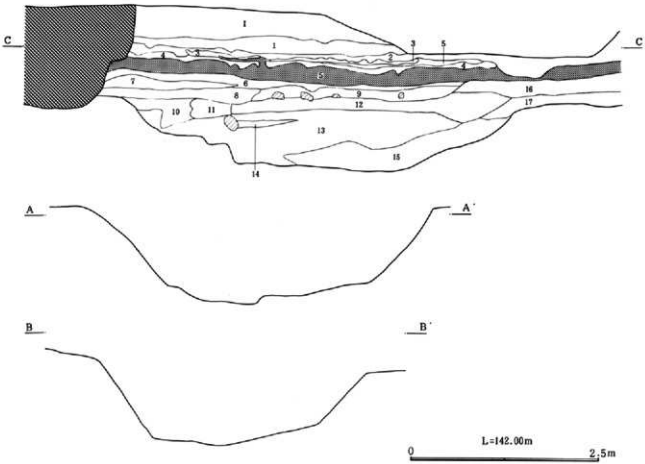
規模は、幅2.00m前後、深度45～65cmである。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器などが若干出土している。



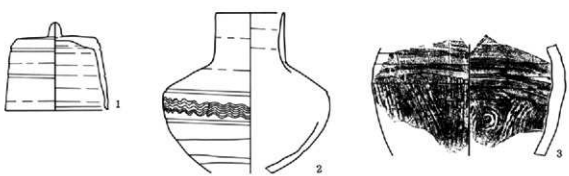
第538図　25号溝平面図



25号溝

1．暗褐色土　As-B を含む。
2．黄褐色土　暗褐色土と FA の混合、As-B、灰色降灰を部分的にブロック状に含む。
3．灰色降灰　As-B、黄褐色土をブロック状に含む。
4．小豆色降灰
5．As-B
6．黒褐色土　粘質土、As-B、暗褐色土小ブロックを含む。
7．黄褐色土　砂質土、6のブロック、小礫を多く含む。
8．灰褐色土　砂礫を多く含む。
9．灰褐色土　砂を若干含む。
10．灰褐色土　粘質土、砂粒を多く含む。
11．灰色砂
12．灰褐色土と砂の混合土
13．砂礫土
14．褐色粘質土と砂の混合土
15．暗褐色粘質土　砂礫、FP を多く含む。縞状に黒色土が見られる。
16．灰褐色粘質土　FP を若干含み、固くしまっている。
17．黄褐色砂土

第539図　25号溝断面図



第540図　25号溝出土遺物図

22号溝

本溝は、清水地区調査区東より、75区E～H－9、I－8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、23号溝・25号溝と重複する。新旧関係は、23号溝より前出で25号溝より後出である。

走行は、東西方向N－63°－Eを指す。平面形態は、南側の立ち上がりが重複する23号溝によって欠き東側の範囲が不明であるが、残存部分ではほぼ直線的である。断面形態は、逆台形状を呈すと想定される。底面は、平坦で東から西へ僅かな傾斜が見られる。

規模は、深度10～16cmである。

埋没状態は、自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器などが若干出土している。

23号溝

本溝は、清水地区調査区東より、75区E～H－9、H～I－8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、22号溝・24号溝・25号溝と重複する。新旧関係は、本溝のほうが後出である。

走行は、東西方向N－70°－Eを指す。平面形態は、僅かに弧を描くが直線に近い。断面形態は、逆台形状を呈す。底面は、ほぼ平坦で西から東へごく僅かな傾斜が見られる。

規模は、幅1.90～2.80m前後、深度24～46cmである。

埋没状態は、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器などが若干出土している。

24号溝

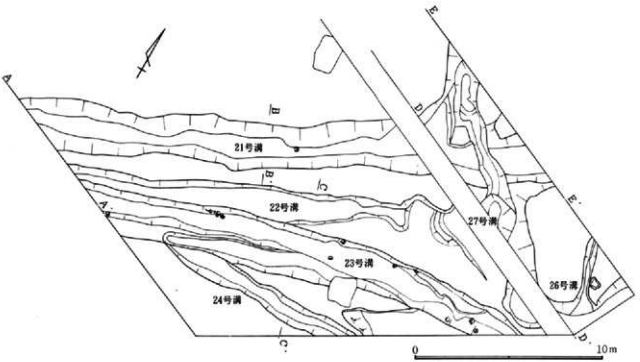
本溝は、清水地区調査区東より、75区F～H－8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、23号溝・25号溝と重複する。新旧関係は、25号溝より後出で23号溝より前出である。

走行は、東西方向N－87°－Wを指す。平面形態は、ほぼ直線的である。断面形態は、逆台形状を呈す。底面は、若干の凹凸が見られるがほぼ平坦で東から西へ僅かな傾斜が見られる。

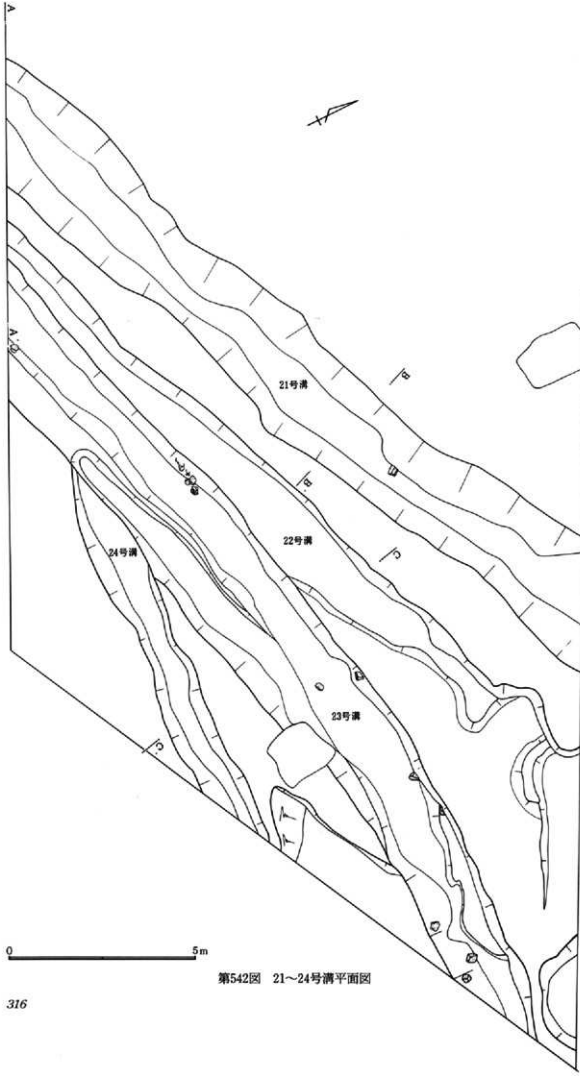
規模は、幅0.98～1.20m前後、深度14～24cmである。

埋没状態は、自然埋没であると考えられる。

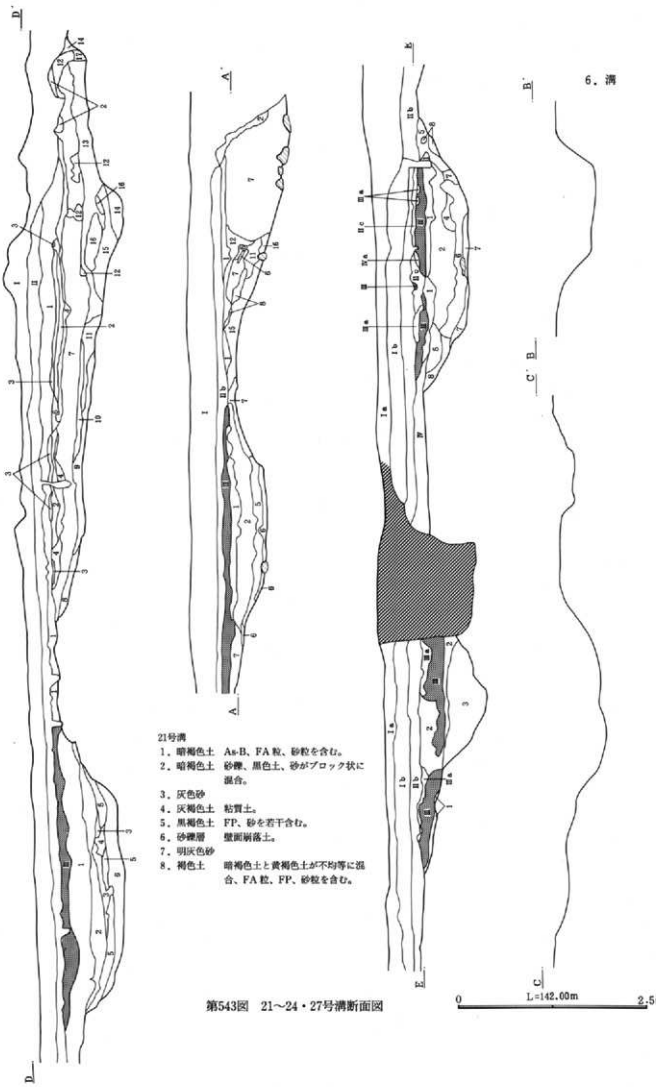
遺物は、土師器、須恵器などが若干出土している。



第541図　21～24・26・27号溝平面図



第542図　21～24号溝平面図



21号溝

1．暗褐色土　As-B、FA粒、砂粒を含む。
2．暗褐色土　砂礫、黒色土、砂がブロック状に混合。
3．灰色砂
4．灰褐色土　粘質土。
5．黒褐色土　FP、砂を若干含む。
6．砂礫層　壁面崩落土。
7．明灰色砂
8．褐色土　暗褐色土と黄褐色土が不均等に混合、FA粒、FP、砂粒を含む。

第543図　21～24・27号溝断面図

26号溝

本溝は、清水地区調査区東端、75区D－9・10グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、明確ではない。

走行は、南北方向N－17°－Wを指す。平面形態は、ほぼ直線的であるが南側が広がる傾向が見られるが不明瞭である。断面形態は、逆台形状を呈す。底面は、ほぼ平坦で北から南へ傾斜している。

規模は、幅は0.5m前後であるが南端は1.0mである。深度は、17～19cmである。

埋没状態は、自然埋没であると考えられる。

遺物は、出土していない。

27号溝

本溝は、清水地区調査区東端、75区E・F－10・11グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、21号溝と重複する。新旧関係は、明確ではないが本溝のほうが後出である。

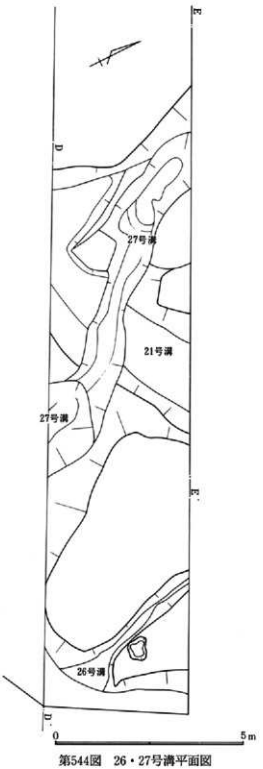
走行は、南北方向N－54°－Wを指す。平面形態は、多少の蛇行が見られる。断面形態は、逆台形状を呈す。底面は、落ち込み状の凹凸が見られ傾斜については凹凸があるため明確ではない。

規模は、幅1.15～1.32mで、深度は12～62cmである。

埋没状態は、自然埋没であると考えられる。

遺物は、僅かに土器が出土している程度である。

第545図　27号溝出土遺物図



第544図　26・27号溝平面図

22号溝
1．暗褐色土　　As-B、φ 1～3mmの FP を含む。
2．黄褐色土と砂の混合土
3．灰色降灰
4．小豆色降灰
5．暗褐色土、黄色土、黒色土がブロック状に混合した粘質土。
6．黄褐色土
7．黒色砂　　中ほどに黒褐色土を帯状に含む。
8．灰褐色土　　砂質土。
9．暗褐色土　　砂礫を含む。
10．黒褐色土　　粘質土、砂礫を少量含む。
11．灰褐色砂礫土　黒褐色土をうすい帯状に含む。
12．As-B、小豆色降灰、暗褐色土の混合層。
13．黒褐色土　　暗褐色土、黒色土を含む。砂粒を少量含む。やや粘性。
14．砂礫土
15．灰褐色土　　砂礫を全体的に含む。
16．赤褐色土　　砂礫土、灰褐色砂質土を含む。
17．暗褐色土　　砂粒を少量含む。

27号溝
1．As-B に As-B 灰が混入。
2．黒褐色土と砂礫の混入した土。
3．砂礫土

7．水　田

概　要

下芝五反田遺跡では、Ⅲ（As－B）層下で清水地区調査区と五反田地区調査区本線部分東半を除く広い範囲とⅡa層下から五反田地区調査区の北東部で小範囲で2面の水田面を検出した。

水田面は、それぞれテフラと洪水層によって覆われているが、開田から現代まで一次的な災害による中断はあったが連綿と水田耕作が行われていた。

水田耕作の行われている下層には、奈良・平安時代の集落が存在しておりこの地域が水田化したのは、集落が確認できなくなる11世紀中頃以降である。こうした集落地から水田地への変化は、この地域への配水が可能になったことが大きいと考える。この配水を可能にしたのが調査区の東側に位置する10号溝の開削によることは明らかである。この溝は、浅間山噴火によって機能を停止するが比較的早期に12号溝が開削され復旧したと考えられる。

なお、清水地区調査区と五反田地区調査区本線部分東半は、Ⅲ（As－B）層の堆積確認できなかったため水田遺構の存在が確認できなったが水田耕作が行われた可能性は同時期の水路を検出していることからあると考えられる。

Ⅲ（As－B）層下水田

被覆土と残存状態

被覆土は、基本層序のⅢ層であるAs－Bで10～20cmほど覆われている。残存状態は、比較的良好であるがアゼの残存高は3～4cmである。調査区北東部や中程では、アゼの残りが悪く区画を検出できない範囲があった。

水田域の形成

水田域は、白川扇状地上に立地している。調査区内は、ほぼ北から南へのごく緩い傾斜地でその標高差は最高値146.20m、最低値143.55mの2.65mである。傾斜角度は、1.36°である。

水田域は、地形による1区画面積の制約を受けぬよう一部を20～30cmほど削平を行っている箇所が見られる。こうした箇所では、調査区内に明確な段差が確認される。また、こうした拡大した耕地の崩壊を防止するため礫を積んだ箇所が2カ所検出されている。（8.石葺遺構の項を参照）

アゼ・区画・水口

アゼは、ほぼ東西南北方向に直線的に設けられているが、一部では蛇行しているものも見られる。

区画は、方形ないしは長方形を呈するが106区画のような三角形や167区画のように不整形を呈する区画も見られる。

長方形を呈する区画では、調査区の東半部分では南北に長軸を取り、西半部分では東西に長軸を取る傾向が見られる。

水口は、121区画の東アゼ、125区画の南アゼ、155、161、163、164区画の区画角部分のアゼで確認した。この他に119と124、120と125、174と176の区画間のアゼの中ほどに礫が集積されている箇所が見られ水口と考えられる。礫は、水量の調整の役割を持たせていたと考えられる。

水田の面積

一区画の面積は、10号溝の東側は比較的小規模なのに対して西側は比較的大規模である。

東側では、最小が106区画の7.06㎡に対して最大は104区画の38.40㎡＋α である。面積が測定または推定可能な区画面積の平均は28.556㎡ある。

西側では、最小が136区画の14.00㎡に対して明確に1区画と把握できる最大は124区画の118.13㎡である。面積が測定または推定可能な区画面積の平均は76.092㎡ある。

取配水の方法

遺跡地周辺では、谷地や湧水などで水田耕作に必要な水利を得ることは難しい地域である。今日では、圃場整備事業などで地形が大きく変化しており解らない点が多いが、明治13～14年測図の陸軍迅速図では、遺跡地の北側には谷地が存在している。こうした谷地の湧水を10号溝などの開削によって取水が可能になったと考えられる。

調査区内では、10号溝からの取水施設は、確認されていないことから調査区北側に何らかの施設が想

定される。

耕作土

耕作土は、6世紀代に起きた2度の榛名二ッ岳噴火の際の土石流災害で堆積した泥流層の上に約20～40cm堆積した黒色土であるⅣ層である。耕作は、住居群の遺構確認を行う際にⅣ層中での遺構確認ができなかったことからⅣ層下位まで水田耕作が違していたようである。

出土遺物

耕作土内より遺物は、多量に出土した。しかし、出土した遺物の年代は、集落が構成されていた時期のものである。水田耕作が行われた11世紀後半以降に比定される時期の遺物は、僅かに青磁片が出土した程度であった。明らかに水田に伴う遺物は、出土していないことから出土遺物は9の遺構外出土遺物の項で掲載した。

Ⅱａ層下水田

Ⅱａ層下水田は、調査区の北東部、85区Ｓ・Ｔ—13～19グリッドのⅡａ層が堆積している約70m²のごく狭い範囲でだけで検出した。Ⅱａ層下水田が検出された範囲の下層には、Ⅲ（As—Ｂ）層下水田や12号溝・10号溝が存在する。特に水田域の範囲では、大部分が溝の上位にあたり溝の埋没は、Ⅲ層下水田の埋没より時間がかかるため浅い谷地状を呈していたことがⅡａ層下水田面の田面形状から見ることができる。

残存状態は、南北方向に7区画が検出されただけである。アゼは、東西方向に6条検出された。水田の東西に位置するアゼは確認されなかったが水田域の形状が谷地状を呈していたことからこの水田の範囲は東・西方向への広がりを考えるより南北に区画された1列の水田域を想定される。

水口は、1～5を区画するアゼで検出された。その位置は、アゼの中央よりやや東側よりである。

区画は、東西に長い長方形を呈し、長軸が短軸の2倍近い長さがある。水田の面積は、30～55m²と比較的広い面積を有している。

耕作土は、As—Ｂを鋤き込んだ暗褐色土である。耕作土からの遺物は、出土していない。

この水田の時期については、下層に位置する12号溝が13世紀～14世紀に比定されることから14世紀以降の広い間での時期で考えざるを得ない。

第4表　Ⅲ(As—Ｂ)層下水田区画一覧

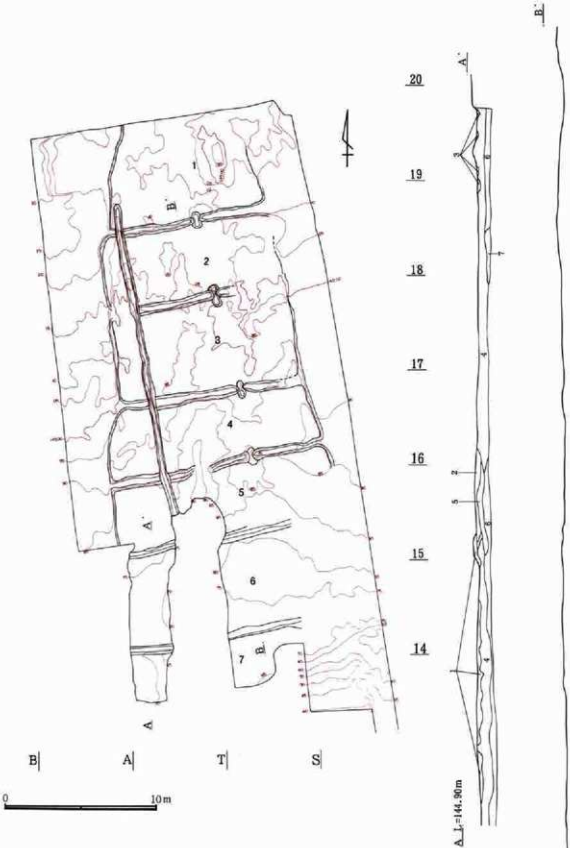
№	位置	長軸(m)	短軸(m)	高位(m)	低位(m)	比高差(m)	面積(m²)	水口（入口）	水口（出口）	備　考
101	S—18	(6.30)	(2.60)	4.70	4.60	0.10	18.26			
102	S—18	(4.90)	4.00	4.60	4.55	0.05	16.40			
103	S—16	(5.80)	5.50	4.55	4.20	0.35	27.46			
104	R—15	(7.00)	5.50	4.50	4.40	0.10	38.40			
105	R—14	(5.90)	4.20	4.40	4.35	0.05	25.46		北西隅→106	
106	S—14	4.10	1.40	4.40	4.35	0.05	7.06	北東隅105→		
107	R—13	(5.30)	2.40	4.35	4.30	0.05	9.46			
108	S—13	5.80	3.40	4.40	4.20	0.20	19.33			
109	R—11	(4.80)	11.10	4.35	4.20	0.15	23.20			
110	S—12	4.90	3.30	4.40	4.20	0.20	12.93			
111	S—11	4.60	3.70	4.20	4.10	0.10	13.46			
112	R—10	(4.30)	4.80	4.20	4.10	0.10	16.80		南西隅→113	
113	R—10	(4.10)	2.30	4.10	4.05	0.05	12.24	北西隅112→		
114	R—9	7.20	3.20	4.10	3.95	0.15	20.00			
115	Q—6		8.00	3.95	3.20	0.75	78.60			
116	T—12	15.20	2.30	4.70	4.45	0.25	47.86			
117	A—12	(11.10)	4.80	4.60	4.60	0.30	55.06	南西隅118→		
118	B—13	10.60	5.40	5.05	4.85	0.20	54.53		南東隅→117	
119	C—12	11.10	10.00	5.05	4.90	0.15	98.13		南中→124東中→123	
120	E—12	13.90	6.20	5.05	5.00	0.05	82.13	西中　121→	南中央→125	
121	G—9	24.70	7.20	5.05	4.95	0.10	274.53		東中　→120	
122	T—11		4.65	4.55	4.15	0.40				
123	A—11		10.90	4.95	4.50	0.45		西中央119→		
124	D—9	14.60	8.50	5.00	4.55	0.45	118.13	北中央119→		水口入口に集石
125	F—9	14.30	7.80	5.00	4.85	0.15	89.06	北中央125→	南中→130西	水口入口に集石
126	A—7			4.25	4.20	0.05				
127	A—5		6.80	4.25	4.05	0.20				

№.	位置	長軸(m)	短軸(m)	高位(m)	低位(m)	比高差(m)	面積(m²)	水口（入口）	水口（出口）	備　　考
128	B−6	10.30	6.70	4.40	4.25	0.15	60.13		南西隅→132	
129	C−6	9.20	4.30	4.60	4.50	0.10	36.80			
130	D−6		14.40	4.60	4.50	0.10				
131	A−4		7.80	4.20	4.00	0.20				
132	B−4	10.20	7.40	4.35	4.20	0.15	71.73	北西隅128→		
133	D−4	10.90	5.30	4.50	4.40	0.10	60.80			
134	E−4	10.40	3.90	4.55	4.50	0.05	40.13			
135	B−2	10.00	5.50	4.25	4.15	0.10	44.53			
136	B−3	(6.40)	2.50	4.30	4.25	0.05	14.00			
137	C−20	(13.30)	5.50	4.25	4.15	0.10	66.26			
138	D−2	9.50	9.10	4.40	4.25	0.15	79.20			
139	B−20			4.15	4.05	0.10	17.20			
140	D−1	6.30	4.00	4.30	4.20	0.10	22.13			
141	E−1	7.30	3.50	4.40	4.25	0.15	27.30			
142	C−20		9.40	4.20	3.90	0.30	4.30			
143	E−20	(1.60)	3.50	4.20	3.90	0.30	4.40			
144	F−2	(22.80)	(5.90)	4.15	3.90	0.25	141.86	北西隅149→	北西部→150	
145	I−5			4.80	4.70	0.10	21.60			
146	I−5	(9.40)	4.10	4.75	4.70	0.05	35.46			
147	J−5	(6.90)	2.40	4.75	4.70	0.05	16.00			
148	K−5			4.85	4.70	0.15				
149	J−4	13.20	5.60	4.80	4.55	0.25	61.06		南東隅2→144	
150	J−4	(6.00)	3.80	4.70	4.55	0.15	17.30	西　144→		
151	K−3	(13.40)	7.90	4.60	4.45	0.15	110.26			
152	N−5			5.20	4.85	0.35				
153	N−4			5.00	4.60	0.40				
154	F−1	13.60	7.20	4.40	4.25	0.15	106.93	北西隅144?→		
155	H−20	(12.30)	7.20	4.40	4.35	0.05	84.00	北東隅144?→	南西隅→161・163	
156	J−1	(7.00)	(4.60)	4.45	4.40	0.05	31.73			
157	K−1	(9.30)	(9.00)	4.55	4.40	0.15	77.06			
158	M−2	(8.40)	(5.50)	4.60	4.50	0.10	47.73			
159	O−2			4.65	4.55	0.10			東中　→160	
160	M−1	(3.70)	8.10	4.55	4.50	0.05	23.46	北西隅159→		
161	J−20	(11.10)	3.00	4.45	4.40	0.05	36.40	南東隅155→	南東隅→164	
162	F−20	11.80	2.00	4.25	3.85	0.40				
163	H−19	7.30	(5.60)	4.30	4.20	0.10	40.53	北東隅155→		
164	I−19			4.40	4.30	0.10	20.40	北東隅161→		
165	C−17	11.30	(5.80)	3.80	3.60	0.20	67.06	西中　167→	南中　→166	
166	C−16	(13.80)	(22.00)	3.75	3.55	0.20	26.53	北中　165→		
167	E−17	(7.80)	9.30	3.85	3.75	0.10	56.60		東中　→165	
168	G−18			3.90	3.80	0.10	14.13			
169	J−16	(12.90)	6.20	6.05	5.80	0.25	82.13			
170	M−16	(16.50)	3.60	6.05	5.90	0.15	69.86			
171	J−14	10.20	7.20	5.90	5.60	0.30	80.00			
172	L−15	(21.80)	4.80	5.95	5.80	0.15	129.20			
173	L−13	(26.60)	6.80	5.85	5.70	0.15	183.20			
174	J−12	13.30	6.30	5.80	5.50	0.30	84.53		南中　→176	
175	M−13	(23.30)	6.80	5.70	5.60	0.10	106.30			
176	J−11	(14.40)	6.40	5.45	5.30	0.15	40.10	北中　174→		水口入口に集石
177	M−12	(23.00)	3.80	5.60	5.45	0.15	104.40			
178	I−10	(14.30)	7.00	5.30	5.05	0.25	104.26			
179	L−10	12.60	5.50	5.45	5.30	0.15	67.20			
180	O−10	(10.70)	(7.50)	5.45	5.35	0.10	76.40			
181	J−9			5.15	5.00	0.15	16.66			
182	L−9	(7.20)	11.10	5.30	5.20	0.10	64.53			
183	N−8	(10.40)	7.90	5.30	5.25	0.05	82.66			

第５表　Ⅱa層下水田区画一覧

№.	位置	長軸(m)	短軸(m)	高位(m)	低位(m)	比高差(m)	面積(m²)	水口（入口）	水口（出口）	備　　考
1	T−19	8.32	(5.52)	5.19	4.85	0.34	38.25		南中央→２	
2	T−18	9.44	3.76	5.22	4.93	0.29	32.01	北中央１→	南中央→３	
3	T−17	9.76	4.64	5.12	4.87	0.25	42.26	北中央２→	南中央→４	
4	S−16	11.32	3.20	5.00	4.76	0.24	34.56	北中央３→	南中央→５	
5	S−15	11.92	3.40	4.92	4.76	0.16	(36.91)			
6	S−14	(11.92)	4.72	4.80	4.70	0.10	(55.68)			
7	S−13			4.72	4.65	0.07				

第546図　Ⅲ(As-B)層下水田平面図



A－A′ S=1/50、B－B′ S=1/100

IIa層下水田耕作土

1．暗黄褐色砂　As-Bを多く含む。　2．暗黄褐色砂　黄褐色砂と茶褐色砂をブロック状に含む。

3．黄褐色砂　4．黒褐色土　As-Bを多く含む。

5．黒褐色土　4に類似、黄褐色砂を含む。6．黒褐色土　4に類似、黄褐色砂を含む。

7．灰褐色土　As-Bを多く含む。

第547図　IIa層下水田平面・断面図

8．石葺遺構

石葺遺構は、Ⅲ（As－B）層下水田に伴う遺構と考えられるが大規模なものについてはこの別項で掲載した。

1号石葺遺構

本遺構は、調査区の西部、86区L～O－4・5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、Ⅲ（As－B）層下水田、6号建物、17号溝と重複する。新旧関係は、Ⅲ（As－B）層下水田より前出と考えられるが明確でない。その他の6号建物、17号溝よりは後出である。

形態は、調査区内での礫の配列をみるとL字型を呈する。このL字状部分は、台状を呈している。遺構の範囲は、町道を挟んで西側で隣接する下芝天神遺跡発掘調査区内では確認されていない。また、3次調査区の北側や西側でも確認されないため不明な点が多い。礫は、比高差20cmの緩い傾斜地に敷かれ、上部は西から東へ傾斜しているがほぼ平坦である。この遺構は、一見すると基壇などの施設の端部斜面に敷かれているように見えるが明確な版築や盛り土は確認されない。このようなことと水田区画の状態から水田面の確保のために削平した後の傾斜部分の土砂崩落防止に礫を敷いたものと考えられる。

規模は、全長24m、東西15m、南北9mで幅は0.7～1.5mを測る。

礫は、φ10～30cmの亜角礫、円礫を使用している。

礫の積み方や敷き方に明確な規則性は見られず、礫の分布も粗・密の箇所がある。

出土遺物は、見られない。本遺構の時期は、上部にAs－Bの堆積が見られることから下限は1108年であるが上限については、重複する住居群が11世紀前葉まで存続することから11世紀代中頃から後半代に考えられる。

2号石葺遺構

本遺構は、調査区の中央よりやや西、86区K～L－9、L－9～11グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、Ⅲ（As－B）層下水田と重複する。新旧関係は、明確ではないが上面にAs－Bが堆積し、礫がその下層の堆積土に多少埋没していることからⅢ（As－B）層下水田の最終段階より前出である。

形態は、調査区内での石の配列をみると東西方向の緩い弧状態と南北方向の直線的に延びる列状を呈す。弧状部分は、浅い窪みを呈し、列状部分は水田アゼ上と重なる。遺構の範囲は、東側、北側の1次調査区では確認されていない。弧状部分の石は、比高差15cmほどの緩い傾斜地に敷かれている。このような遺構の状態や1号石葺遺構の状態から弧状部分は、水田区画の斜面に土砂崩落防止に敷かれたものと考えられるが、列状部分はⅢ（As－B）層下水田アゼに水田耕作時に出た礫を集積したものであると考えられる。

規模は、弧状部分が東西14m、幅1.0m、列状部分が南北9m、幅0.5～0.8mを測る。

礫は、φ10～30cmの亜角礫、円礫を使用している。礫の積み方や敷き方に規則性は見られず、礫の分布も粗・密の箇所がある。

出土遺物は、見られない。本遺構の時期は、列状の部分が水田アゼと重なることから水田耕作時にでた礫を集積したものと考えられ水田開田と同様な時期の11世紀中頃と考えられる。

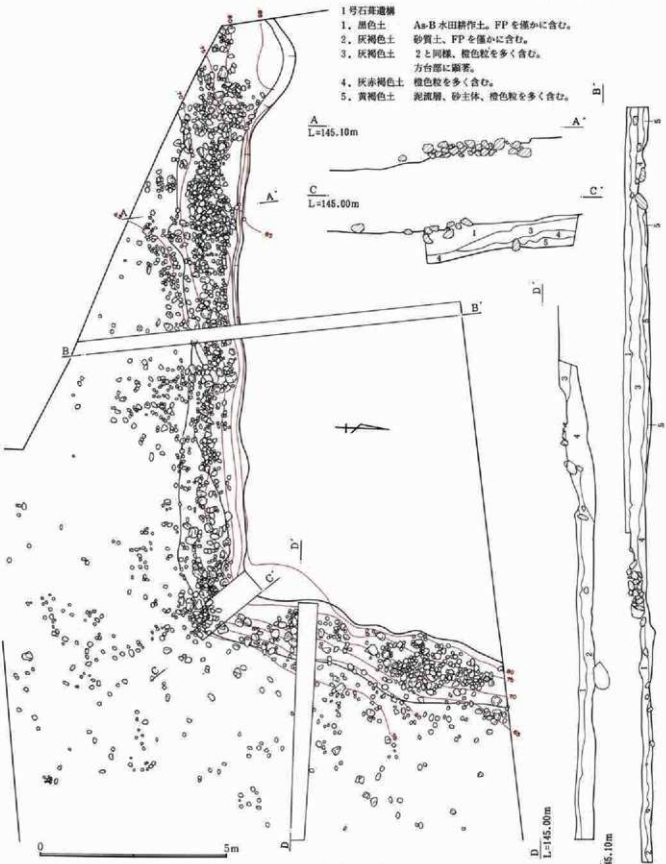
3号石葺遺構

本遺構は、調査区の西南部、86区Ⅰ－4グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、見られず、検出された状態からⅢ（As－B）層下水田アゼに水田耕作時に出た礫を集積したものであると考えられる。

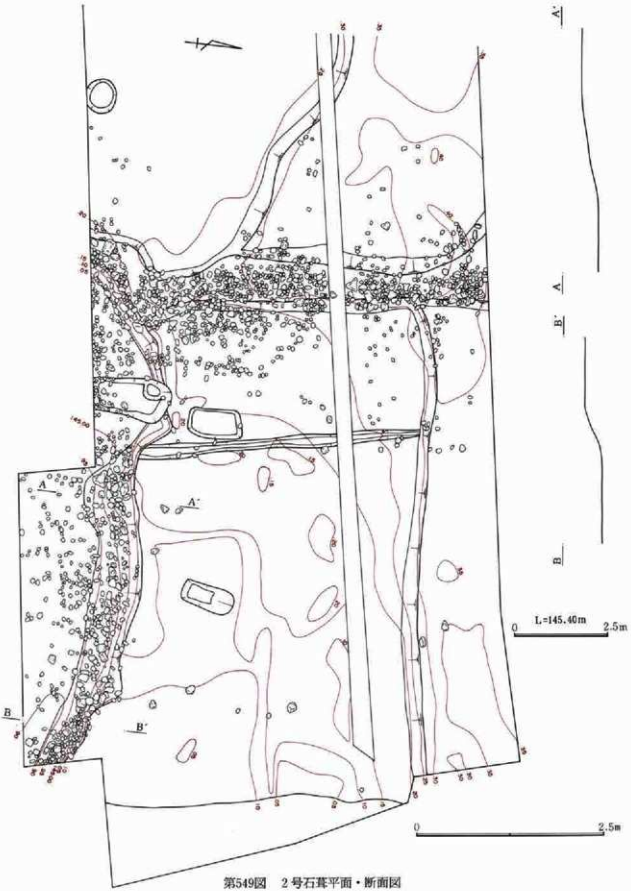
形態は、楕円形に近く、規模は長径4.2m、短径1.2mの範囲である。

礫は、φ10～30cm大の亜角礫、円礫でその集積状態は粗・密がある。

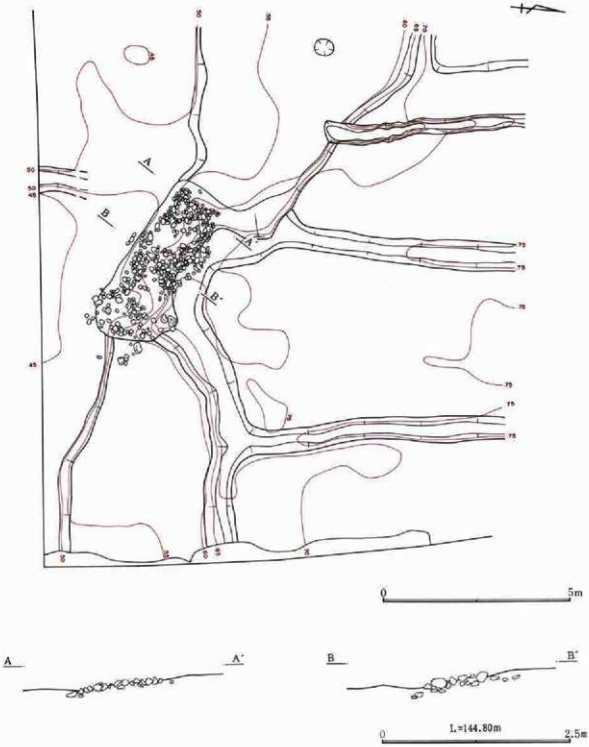
出土遺物は、見られない。本遺構の時期は、水田開田と同様な時期の11世紀中頃と考えられる。



第548図　1号石葺平面・断面図



第549図　2号石葺平面・断面図



第550図　3号石葺平面・断面図

9．遺構外出土遺物

下芝五反田遺跡では、土師器、須恵器をはじめとし灰釉陶器、緑釉陶器、石製品、鉄器・鉄製品など多量の出土があった。これら遺物のうち遺構に伴って出土したもで図化が可能な個体については1～6のそれぞれの遺構ごとに掲載したが、これ以外でもⅢ層下より多量の土器をはじめとする遺物の出土があった。特にⅢ層下水田面から住居群の確認面までのⅣ層内では、水田耕作が行われていたため遺構の確認ができなかった。このためⅤ層上面まで人力によって削平を行った。そしてこのⅣ層中からは約120,000点の土器などの遺物が出土した。Ⅳ層から出土した遺物は、可能な限り調査区の最小単位であるグリッド毎に取り上げ各遺構からの出土遺物を接合するさいに照合した。そして遺構内出土の遺物と接合したものについてはその帰属をそれぞれの遺構に含めたが帰属の明らかにできなかった個体についてはこの項で取り上げた。

掲載にあたっては、遺構で出土した遺物よりやや残存率のよいものを選択したが、青磁・白磁などの希少な種類、形態については可能な限り掲載した。須恵器杯・椀など数量的に多い個体については、形態による分類を行い掲載してある。

Ⅳ層中からの遺物の分布は、第551図に示したように住居群が存在する周辺と多くの遺物を出土した住居の周辺から多く出土している。これは、住居に残された遺物が水田耕作によって周囲に拡散された結果で当然の結果といえる。しかし、86区A－5グリッド周辺では、住居軒数が6軒と少ないわりには1,000点以上の遺物が出土したグリッドが集中しており近辺に竪穴住居以外の建物の存在が想定される。

なお、清水地区調査区と五反田地区本線部分の東半分は、Ⅲ層下水田が確認されなかったため調査区全体で遺物を取り上げている。

また、一部調査区では、グリッド毎の遺物取り上げをしていない箇所があるため空白部分が存在する。

土師器

土師器には、杯、甕が見られる。甕は破片の出土量は非常に多いが接合率も悪く図化できるものがないため掲載していない。

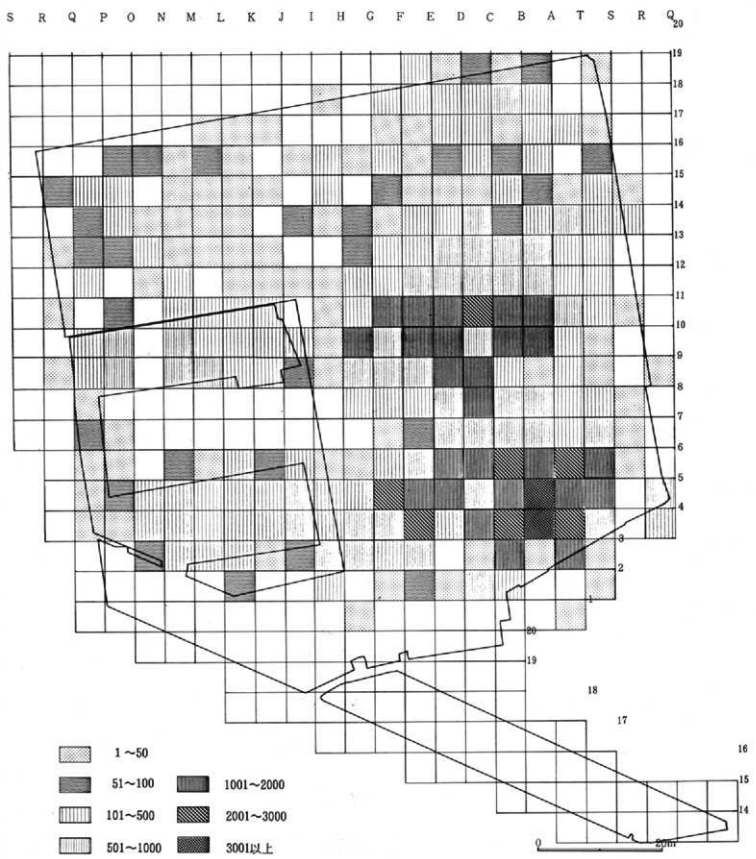
土師器　杯

土師器杯の出土量は、比較的少ないため図化可能な個体も14点しか出土していない。1～5は、8世紀代の個体で成・整形も丁寧で口縁部上半に横ナデ、下半に1段か2段の横方向のヘラ削り、そして底部は不定方向のヘラ削りが施されている。また、1～3には内面に暗文が施文されている。その中でも2の杯は、外面のヘラ削りも細かく、内面の暗文も口縁部放射状暗文も密で細かく、底部螺旋暗文も密で丁寧な施文が施されており8世紀前半代に比定される。6は、口縁部上半が横ナデ、下半がナデで底部が不定方向のヘラ削りが施されており8世紀第4四半期代に比定される。7～13は、成・整形がやや雑で口縁部上位または口唇部の僅かな範囲を横ナデ、下位に1段の横方向のヘラ削り、横ナデとヘラ削りの間は無調整やナデ程度の整形で底部はヘラ削りを行っている。一部には、砂底が残るものも見られる。これらの杯は、9世紀第4四半期～10世紀前半代に比定される。14は、口径に対して器高の低い皿・盤状の杯で口縁部上半の横ナデと下半から底部のヘラ削りの間に弱い稜を持っている。この杯は、8世紀前半代に比定される。

黒色土器　椀・皿

黒色土器は、須恵器、土師器に比較して出土量が少ない。形態は、椀が圧倒的に多く皿は僅かである。黒色処理は、大部分が内面だけであるが20の椀は内外面を黒色処理している。内面の整形は、横方向のヘラ磨きと放射状のヘラ磨き、横ナデだけの3通りが主である。そうした中でも24の皿には、花弁状の磨きが施されているが雑な整形である。

本遺跡で出土した黒色土器は、9世紀後半代から10世紀代に比定される。



第551図　遺構外出土遺物調査区別出土量図

須恵器

須恵器は、土師器、黒色土器に比べて数量的には土師器と大差がないが残存状態では両者より良好な状態である。須恵器のなかでは、杯・椀類がそして羽釜、甕類が比較的多くを占めているが、羽釜や甕は、図化可能な個体が少なく胴部片や小片が大多数を占めている。なお、本遺跡では、希少な形態である杯・椀蓋、長頸壺、短頸壺、底部穿孔椀などについては可能な限り掲載した。

須恵器　杯蓋

須恵器杯・椀蓋は、数点の出土があるが図化可能な破片は第553図に掲載した１個体だけである。掲載できなかった破片のうち口唇端部が残存する個体をみるとすべて端部を折り曲げた形態でカエリをもつ形態は確認されなかった。また、法量的には、口径が大きい個体は見られないことからも本遺跡の住居が存続した期間にでも前半の８世紀後半代から９世紀代に伴う形態である。

須恵器　杯

須恵器杯は、椀に比べて出土量が少ない。形態的には、概ね３形態に大きく分類でき、杯２はさらに２形態に分類できる。

成・整形は、すべてロクロ成・整形で回転方向は右回りである。底部の切り離し技法は、39が回転ヘラ切りである以外すべて回転糸切りである。切り離し後の整形は、回転ヘラ切りの39が回転ヘラ削りを施しているだけで他は無調整である。そして口縁部は、回転ヘラ削りをはじめとする整形技法は施されていない。

杯１は、器高がやや高く底径／口径比が55以上で口縁部が底部から直線的に開く形態である。

杯2Aは、杯１に比べて器高が低く、口縁部が直線的、口縁部下半にやや丸みをもつ形態である。底経／口径比は53～63である。

杯2Bは、杯2Aと同様であるが、口縁部上半でやや外反する形態である。底径／口径比は、50以下の個体も見られ、焼成も52のような酸火焔焼成の個体も見られる。

杯３は、カワラケに近い形態を示すもので59～61とも酸火焔焼成である。

須恵器　椀

須恵器椀は、出土した須恵器のなかでももっとも多い割合を占めており、無高台と有高台とがある。

無高台は、有高台に比べて数量的には少ない。

形態は、無高台が４形態、有高台が７形態に分類できる。

成・整形は、すべてロクロ成・整形で回転方向は右回りである。底部の切り離し技法は、回転糸切り無調整である。有高台の個体の高台は、すべて貼付によるもので削りだしによる高台は見られない。口縁部の整形は、98が口縁部下位に横方向のヘラ削りが施され、168・170がロクロ整形痕を消すようなナデが施されている以外はすべてロクロ整形のままである。

須恵器　（無台）椀

須恵器無台椀は、Ⅰ－１からⅠ－４までの４形態に分類できる。

Ⅰ－１は、口縁部が比較的直線、または口縁部上半が僅かに外反する形態。底径／口径比は、42～52を示す。

Ⅰ－２は、口縁部が外反、上半がⅠ－１より大きく外反する形態。底径／口径比は、42～53を示す。

Ⅰ－３は、口縁部下位がやや丸みをもって立ち上がり、口縁部上位で外反する形態。底径／口径比は、46、53～55を示す。

Ⅰ－４は、Ⅰ－３より口縁部下位の丸みが強い形態。底径／口径比は、41～47を示す。

須恵器　（有台）椀

須恵器有台椀は、Ⅱ－１からⅡ－７までの７形態に分類できる。

Ⅱ－１は、口縁部が比較的直線、または口縁部上半で僅かに外反し、高台の整形も丁寧な形態である。

底径／口径比は、45～56を示すが、大多数は50以上である。

Ⅱ－２は、口縁部が直線的に開く形態で器厚がやや厚く高台の整形が若干雑である。底径／口径比は、

43～65を示す。

II－3は、口縁部下半が直線的で上半が外反する径である。器厚が厚めで高台が低く整形が雑である。底径／口径比は、46～60を示す。

II－4は、口縁部下半がやや丸みを持ち、上半が外反する径である。器厚が厚めで高台が低く整形が雑である。焼成は、ほとんど酸火焔か酸火焔ぎみである。底径／口径比は、49～55を示す。

II－5は、口縁部下位の一般に腰と呼ばれる部分が張り、口唇部が若干外反する形態である。焼成は、酸火焔である。底径／口径比は、47～61を示す。

II－6は、口縁部下位がやや張るが大きく開き、上位で外反する形態である。焼成は、酸火焔である。

II－7は、身の部分はII－6に類似するが口縁部の外反が強く高台が高足の形態である。焼成は、酸火焔である。底径／口径比は、45～52を示す。

須恵器　皿

須恵器皿は、杯、椀に比べて数量的に少量である。出土した皿は、すべて高台が貼付された形態である。成・整形は、ロクロ成形で回転方向は右回りである。底部の切り離し技法は、回転糸切り無調整であるが、高台は貼付のナデで消されている個体が見られる。形態は、187、188、190に見られる口縁部が直線的でほとんど外反しない形態と186、189、191のように口縁部が外反する２形態に分類が可能である。

須恵器　盤・高杯・鉢

須恵器の供膳具は、椀が大多数で杯、皿が若干伴う程度であり、ここに掲載した盤、高杯、鉢は、遺構に供伴する個体も僅かである。

盤は、大型の形態で住居など遺構に供伴する個体の中にも見られない。成・整形は、ロクロ成形で、回転方向が右回り。底部の切り離し技法は、回転ヘラ削りを施しているため不明である。

高杯は、杯身部分を欠くが脚部がやや高いところからカエリのない蓋を逆さまにした形態の杯身を伴う形態である。

鉢は、鉄鉢形の形態で住居など遺構に供伴する個体の中にも見られない。

青磁・白磁

青磁・白磁は、遺構外から青磁２点、白磁１点が出土している。青磁は、２点とも椀で口縁部に鎬連弁文が施されている。生産地は、中国龍泉系で時期は13世紀中葉～後葉のものである。白磁は、口縁部が玉縁状を呈する椀である。生産地は、中国で時期は９世紀～10世紀代のものである。この白磁は、山本信夫氏の分類の白磁１類にあたり、県内では舟橋遺跡出土例に続いて２例目である。

緑釉陶器

緑釉陶器は、遺構外から20点出土しているがほとんど小破片である。器種は、椀、稜椀、輪花椀、皿、耳皿の５器種である。生産地・時期は、202の皿が京都産で10世紀代の他は東海産である。東海産のうち208、209、211が猿投山西南麓古窯跡群産の黒笹90号窯式期、198、199、204が10世紀前半代、205、206が10世紀後半代でその他は10世紀代に比定される。

灰釉陶器

灰釉陶器は、遺構外から4260点出土しているが大多数が小片である。そのうち口縁部や底部が残存して固化が可能な66点を掲載した。器種は、椀、小椀、稜椀、皿、段皿、折縁皿、小瓶、手付瓶、長頸壺、短頸壺、平瓶、広口壺など多器種に及んでいる。しかし、器種は、多器種にわたっているが椀・皿が大部分を占めている。

生産地・時期は、245が猿投山西南麓古窯跡群の黒笹14号窯式期である以外は、光が丘１号窯式期から虎渓山１号窯式期の東濃古窯跡群産でその中でも圧倒的に大原２号窯式期の個体が占めている。

須恵器　瓶類

須恵器瓶類には、長頸壺、短頸壺の出土が見られる。瓶類の遺構外での出土は、遺構に供伴する個体より少量である。286は、上野型短頸壺蓋である。

須恵器　甕

須恵器甕は、遺構外からの出土も多く見られるが胴部小片が大部分を占めているため図化可能な個体が少ない。甕の口縁部は、ロクロ成・整形無調整の個体と区画凹線と波状文の組み合わせの個体が見ら

れる。胴部は、外面が平行叩き、内面が同心円状アテ具痕が残る。

須恵器　底部穿孔

須恵器有台椀形態の土器のうち僅かであるが底部に穿孔が施されている個体がある。底部の穿孔は、みな焼成前の段階に施されている。そして297以外は、口縁部を打ち欠いている。用途としては、形態が紡錘車に類似していることから同様な用途が考えられる。土製品

土製品には、風字硯、紡錘車、羸具、円盤状製品、瓦、埴輪がある。風字硯は、陸と海を区分した形態である。羸具は、瓦を転用したものと考えられる。瓦は、遺構に供伴する個体を含めても少量であることから近辺に瓦葺き建物が存在したとは考えられず二次的利用と考えられる。

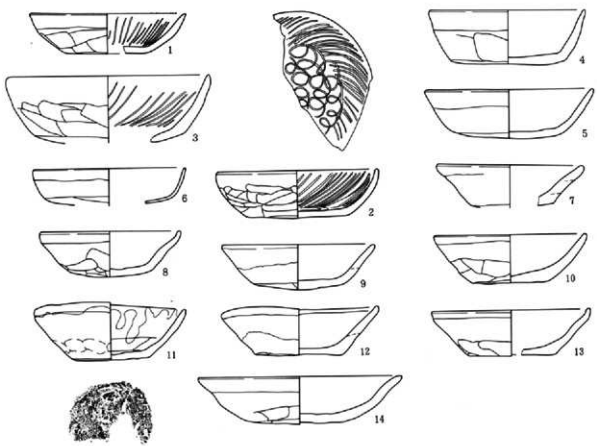
石製品

石製品には、カ帯の蛇尾・丸鞆、紡錘車、碁石、砥石、石皿、椎名二ッ岳噴出軽石を利用した凹石などがある。凹石は、椎名山麓地域に多く出土例が確認されているがその用途については解明されていない。

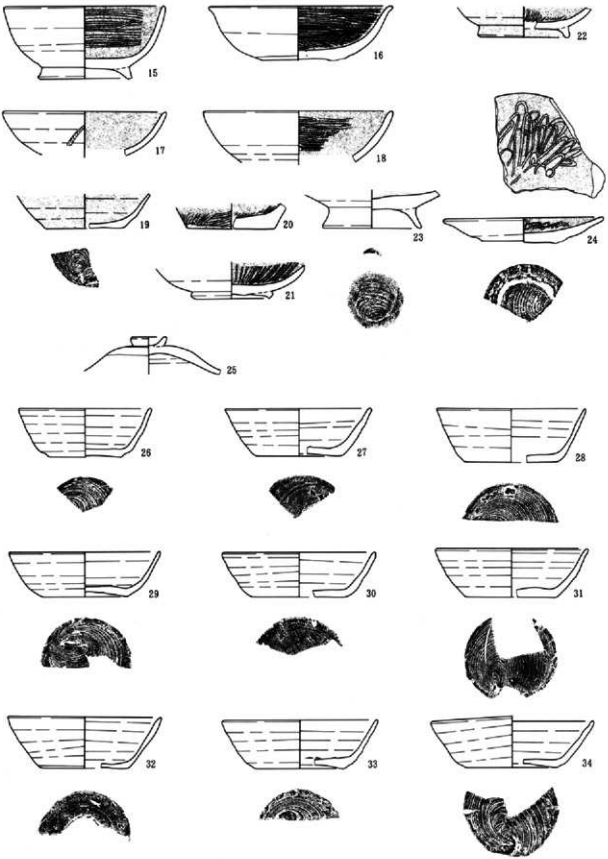
金属製品

金属製品には、銅製品と鉄製品がある。銅製品には、印章、銭貨、キセルがある。鉄製品には、紡錘車、鋤先、鏃、刀子、鍵、角金具、棒状品、釘などがある。

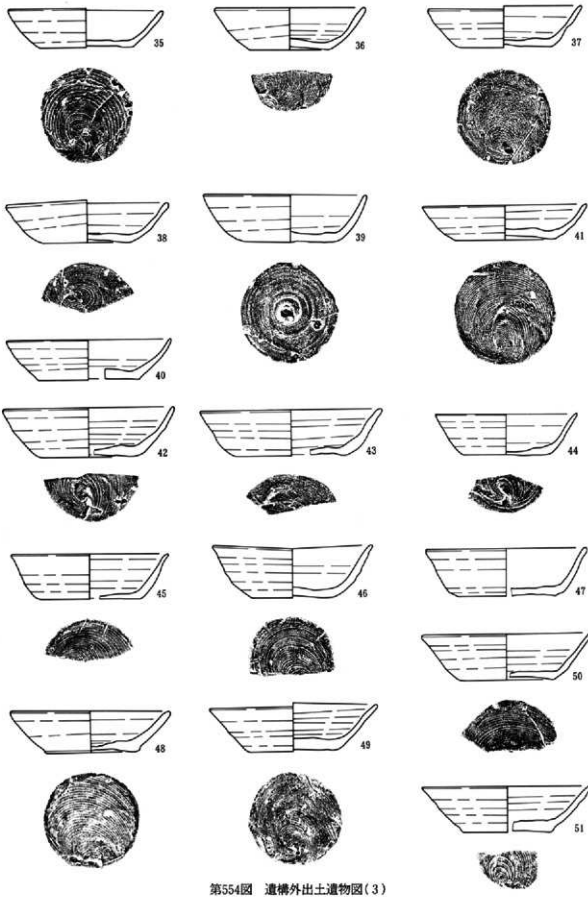
印章は、私印で印面は「犬甘」と読め犬養氏の存在を想定させられる。銭貨は、「熙寧元寶」で1068年初鋳の北宋銭である。鉄器のうち棒状品については、鏃柄、紡錘車軸などの可能性が考えられるが確定でないため棒状品として取り扱った。



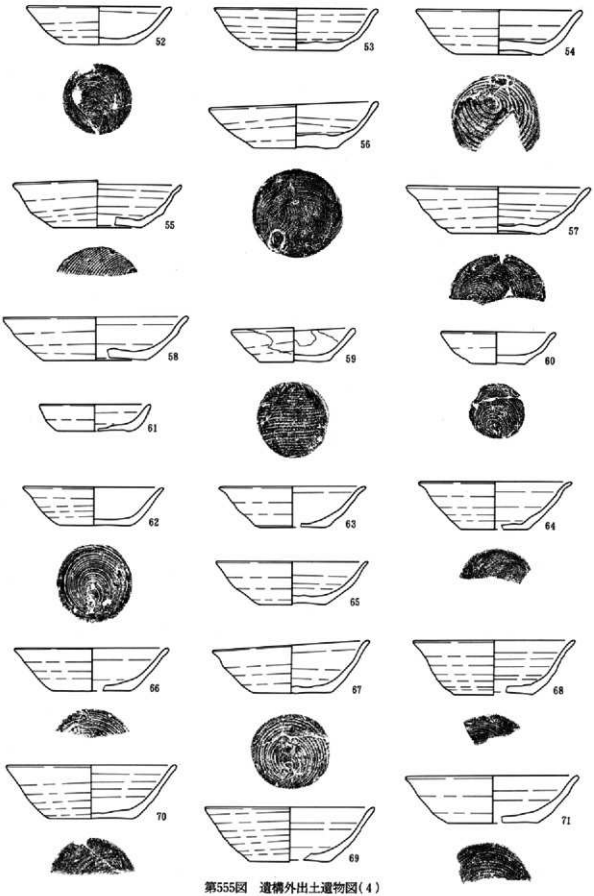
第552図　遺構外出土遺物図（1）



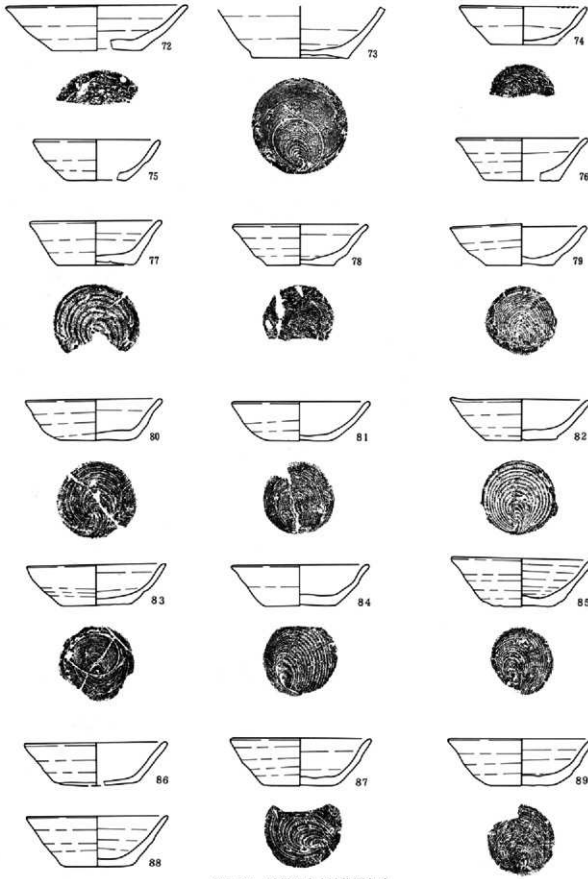
第553図　遺構外出土遺物図（2）



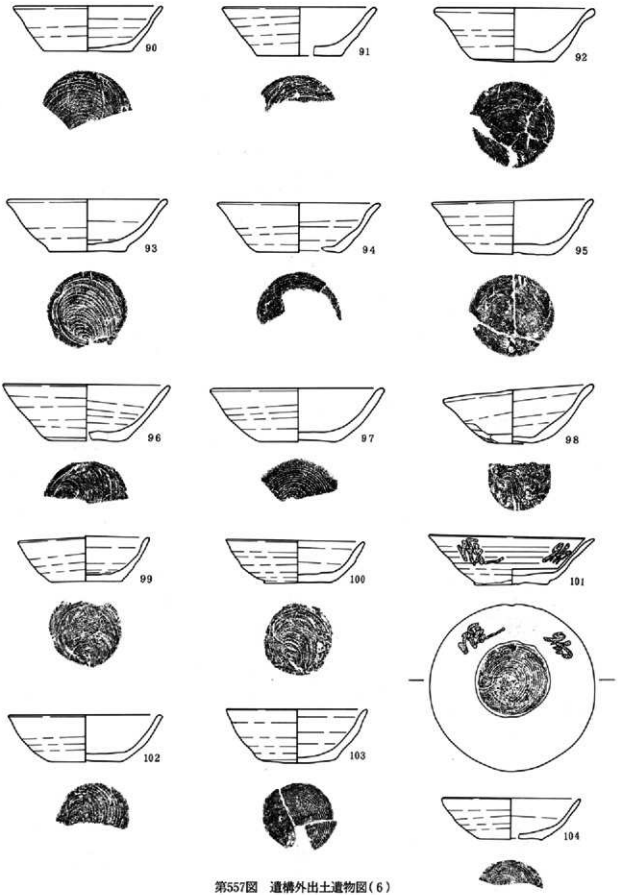
第554図　遺構外出土遺物図(3)



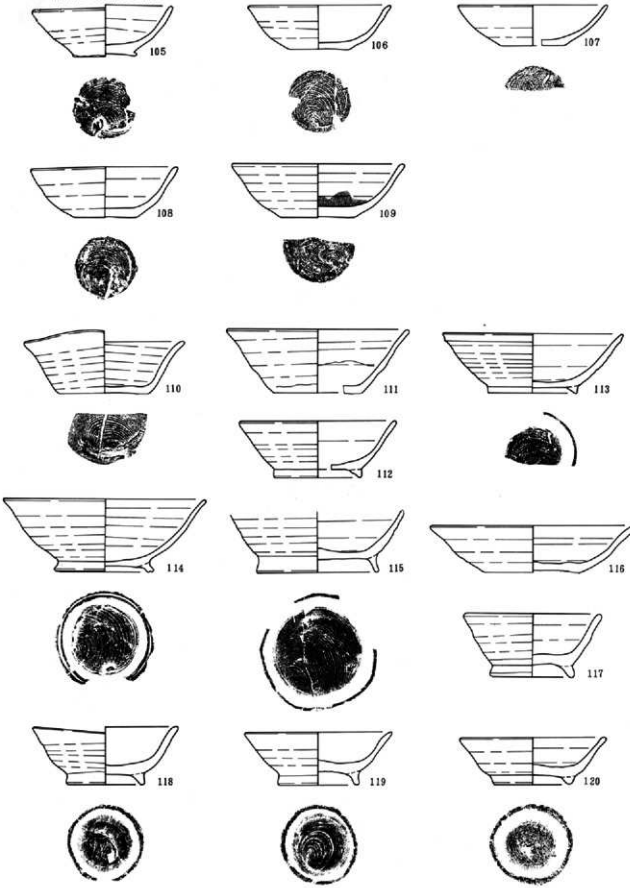
第555図　遺構外出土遺物図(4)



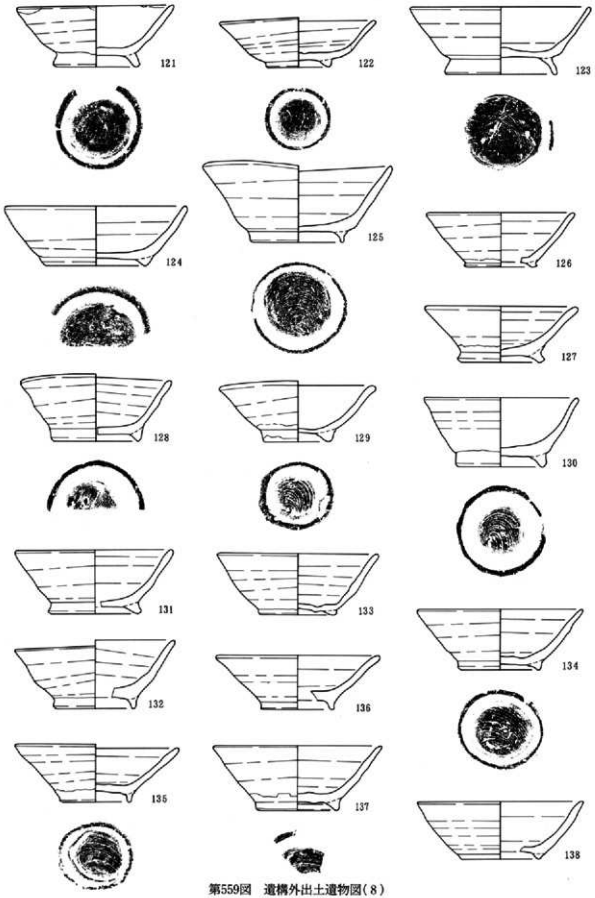
第556図　遺構外出土遺物図(5)



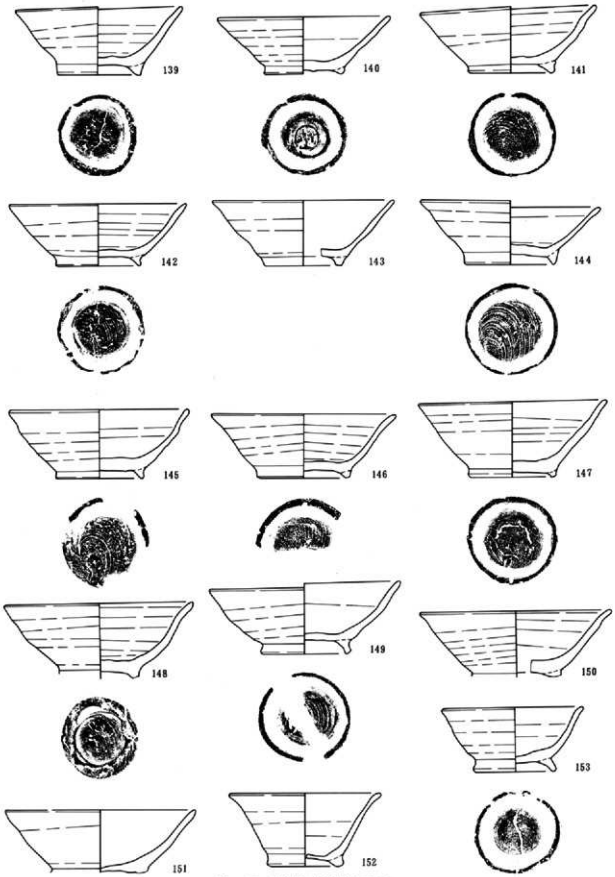
第557図　遺構外出土遺物図(6)



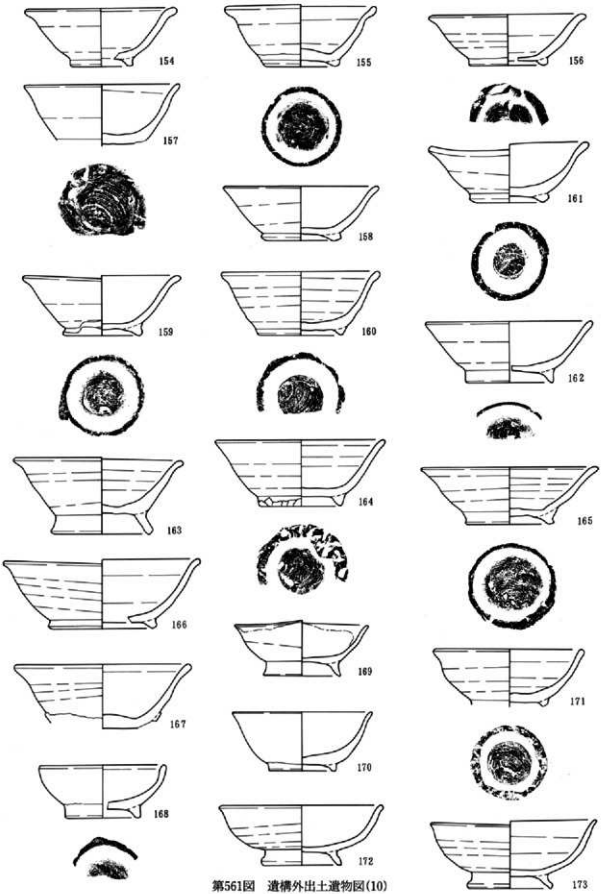
第558図　遺構外出土遺物図（7）



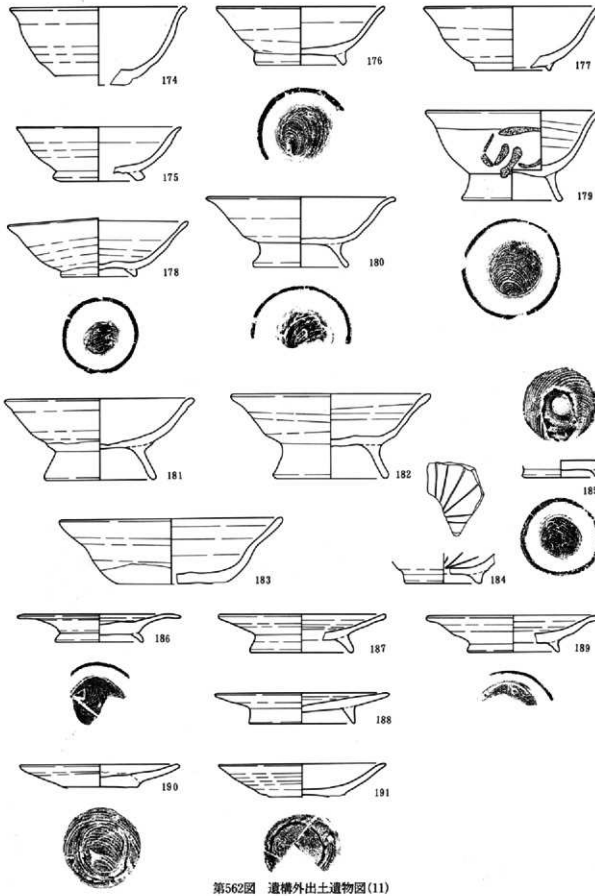
第559図　遺構外出土遺物図(8)



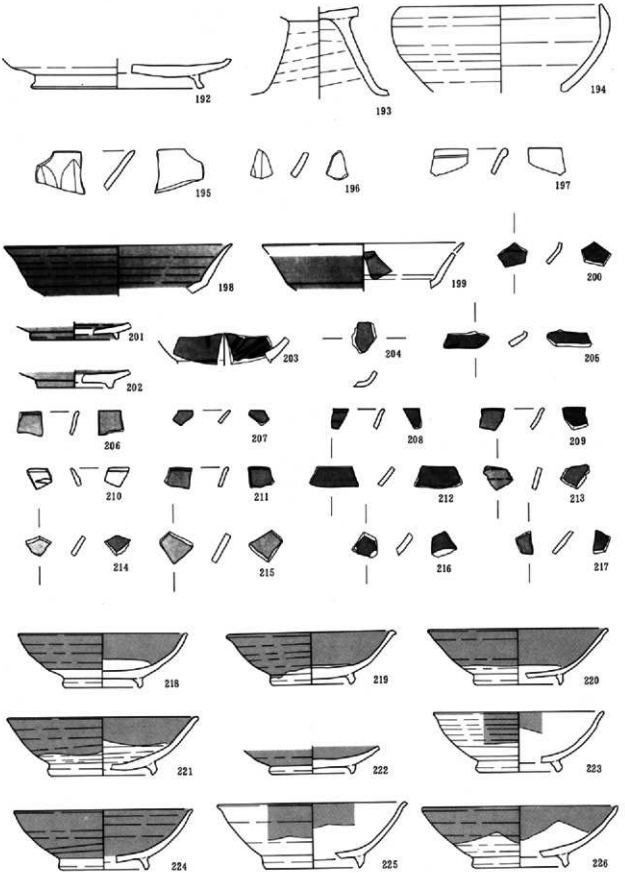
第560図　遺構外出土遺物図(9)



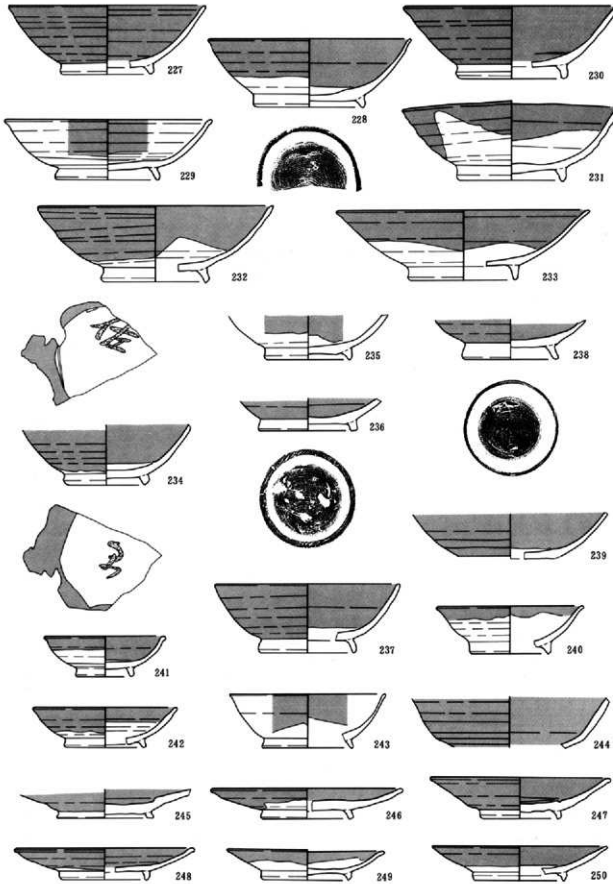
第561図　遺構外出土遺物図(10)



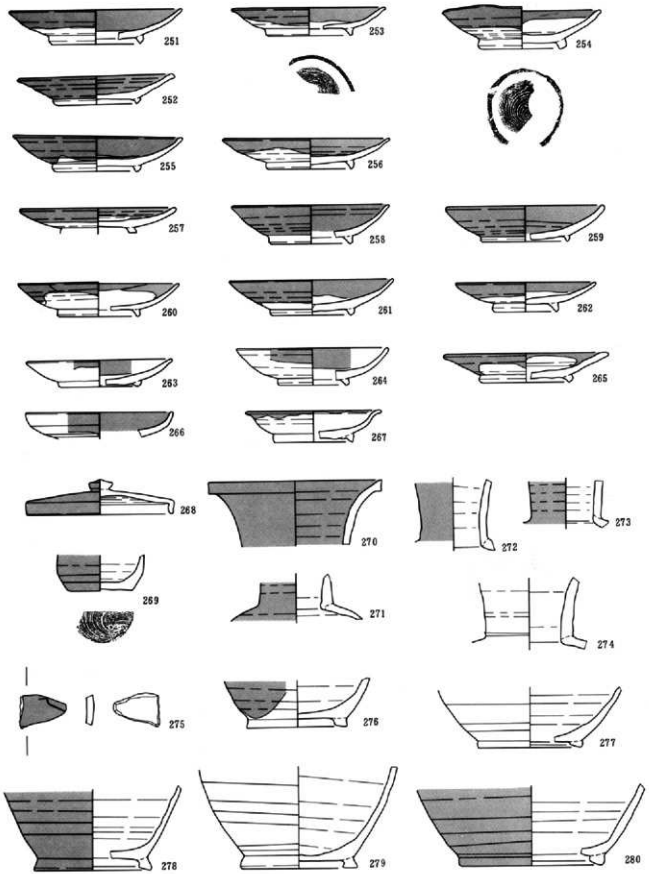
第562図　遺構外出土遺物図(11)



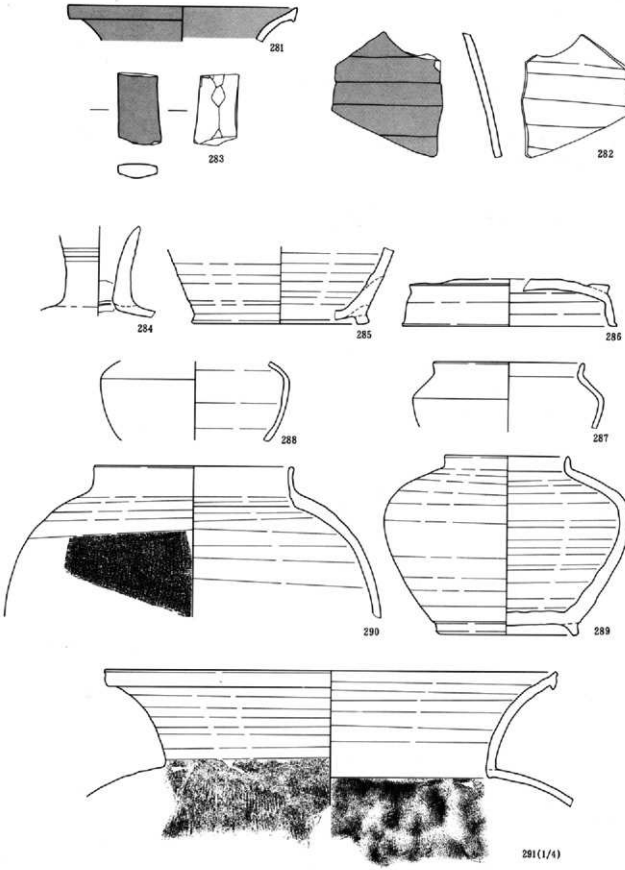
第563図　遺構外出土遺物図(12)



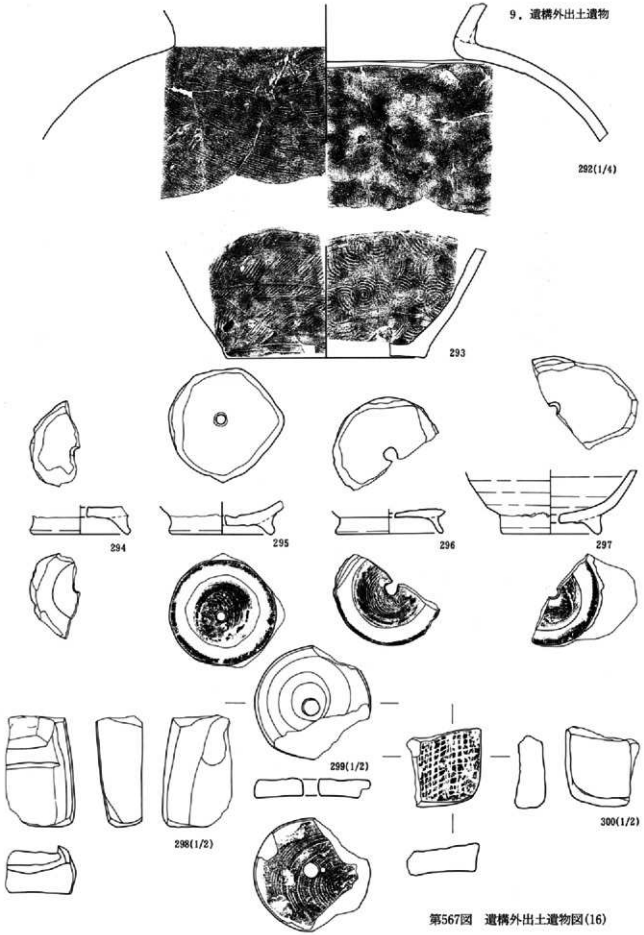
第564図　遺構外出土遺物図(13)



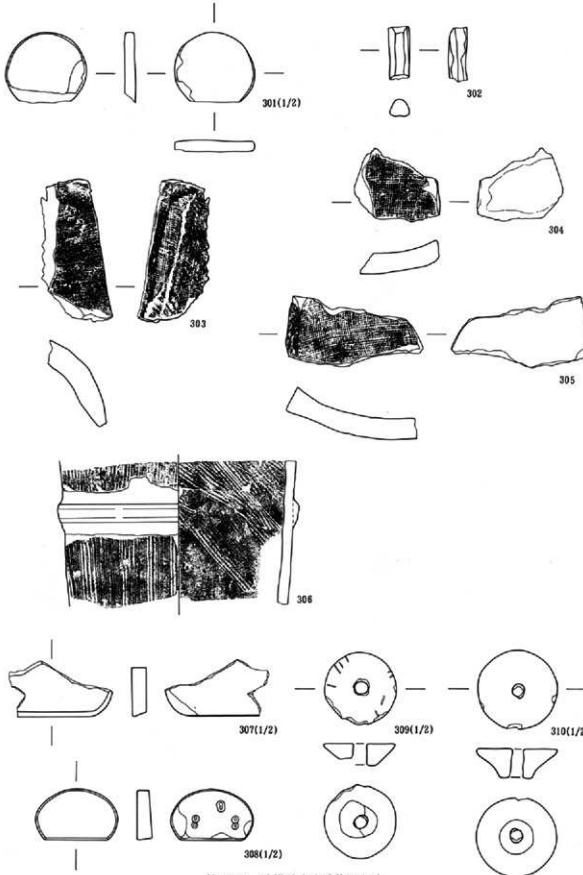
第565図　遺構外出土遺物図(14)



第566図　遺構外出土遺物図(15)

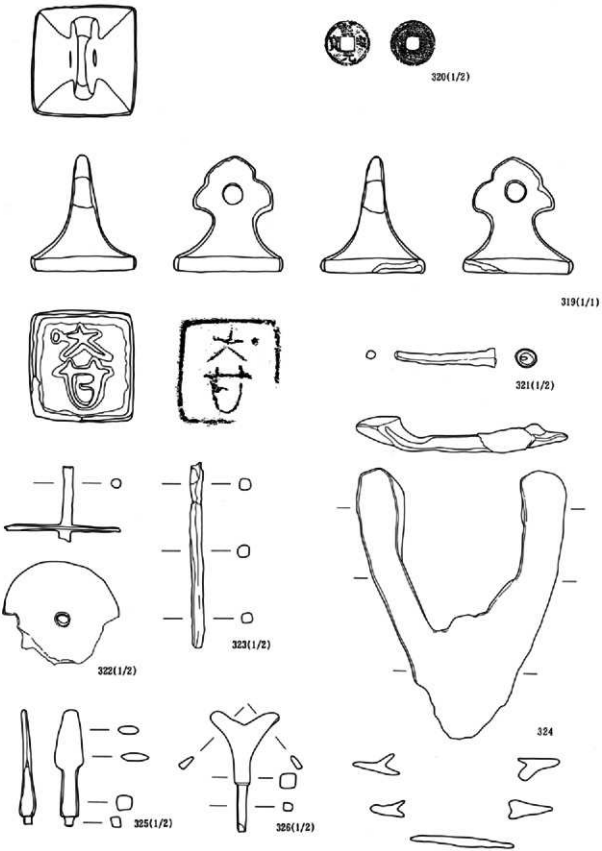


第567図　遺構外出土遺物図(16)

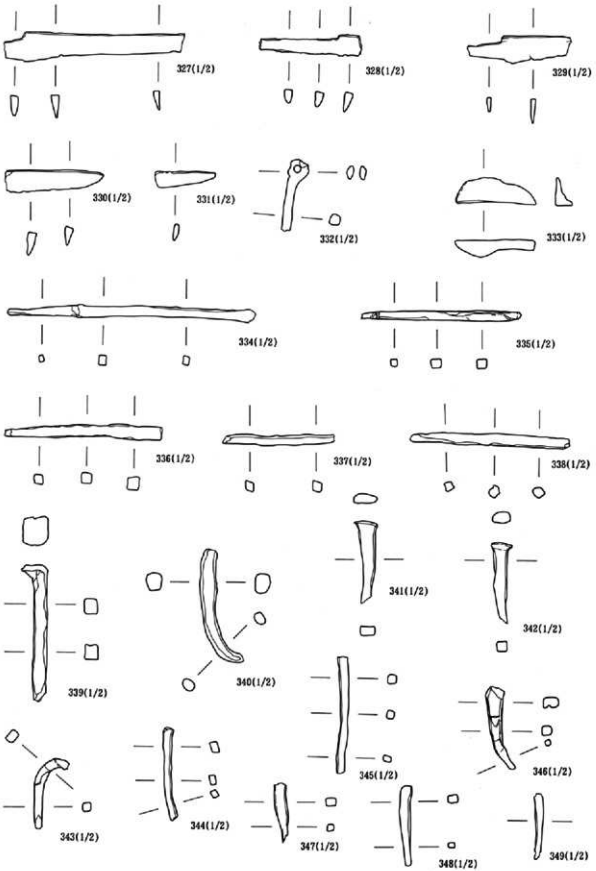


第568図　遺構外出土遺物図(17)

第569図　遺構外出土遺物図(18)



第570図　遺構外出土遺物図(19)



第571図　遺構外出土遺物図(20)

発掘調査報告書抄録

ふ り が な	しもしばごたんだいせき
書　　名	下芝五反田遺跡―奈良・平安時代以降編―
副 書 名	北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	6
シリーズ名	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告
シリーズ番号	第250集
編 集 者	神 谷 佳 明
編集機関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
所 在 地	〒377-8555　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2　TEL　0279―52―2511
発行年月日	1999年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
下芝五反田 (しもしばごたんだ)	群馬県群馬郡箕郷町大字下芝 (ぐんまけんぐんまぐんみさとまちおおあざしもしば)	10323	00359 00371	36°22′22″ 138°56′6″	19921001 19951013	9,050	鉄道(北陸新幹線)建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
	集 落	奈良～平安時代	竪穴住居・掘立柱建物 井戸・土坑	土師器・須恵器 灰釉陶器・緑釉陶器 青磁・白磁・鉄器 銅製品	8世紀後半から11世紀初頭にかけての開発集落、「犬甘」の銅印、鋤先・鏃・紡錘車等多量の鉄器が出土。
	生 産	平安時代	水田		11世紀中頃の開田、12世紀初頭の浅間B経石で埋没。大規模な造成が窺える。
		中 世	水田	谷地を利用した小規模な水田か？	
	祭 祀	平安～鎌倉時代	建物	鏡像(瑞花双鳥八稜鏡)	建物は堂宇か。鏡像は二体の仏像が彫られている。

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調 査 報 告 第 230 集

下芝五反田遺跡—奈良平安時代以降編—〈第1分冊〉

北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告書第6集

1999年(平成11年)3月20日　印刷
1999年(平成11年)3月25日　発行

編集・発行／群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555　勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511 (代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社